悪魔の紋章(江戸川乱歩)

劈頭の犠牲者

てからもう数年になる。グに宗像研究室を設け、犯罪事件の研究と探偵の事業を始め、法医学界の一権威宗像隆一郎博士が、丸の内のビルディン

えば、明智小五郎か宗像隆一郎かとい爾来年毎に著名の難事件を処理して、 ていた。 研究題目であった。 ほどの難事件でなけ すでに二つの難事件を見事に解決し、 同研究室は 「迷宮入り」の事件こそ、 普通の民間探偵とは違い、其筋でも手古摺る 宗像博士は、研究室開設第一年にして、 れば、 決して手を染めようとは 郎かというほどに、 同研究室の最も歓迎する 一躍その名声を高 現在では、 名探偵と云 世に知られ し なかっ

う程になっていた。 難事件が起ると、 であったから、 も多いのに反して、 えどころがなく、気に入った事件があれば、支那へでも、 ところはなかったけれど、 へでも、 どころがなく、気に入った事件があれば、支那へでも、印度天才明智は、その生活ぶりが飄゚々としていて、何となく捉 とする事件に限って手がけるという、 気軽に飛び出して行って、 期せずして市民の信頼を博し、警視庁でも、 宗像博士の方は、 応は必ず宗像研究室の意見を 徴 するとい あくまで堅実で、 事務所を留守にすること 明智のような天才的な 科学的で、 実際的なやり方 東京

まるやり口であった。助手は、一度も博士の自宅を訪ねたことがないという、厳格極も研究室へ顔出しをしたことがなく、又研究室の二人の若いて、郊外の住宅から毎日研究室へ通い、博士夫人などは一度に反して、宗像博士は、家庭生活と仕事とをハッキリ区別し事務所なども、明智の方は住宅兼用の書生流儀であったの事務所なども、明智の方は住宅兼用の書生流儀であったの

の探偵事務所なのだ。究室の真。鍮看板が光っている。赤煉瓦建ての一階三室が博士、丸の内の一郭、赤煉瓦貸事務所街のとある入口に、宗像研

して、 く と、 鼻の頭にかけて、 でも起したのであろうか、顔色は土のように青ざめ、 もあるように、 人の若い背広服の男がある。二十七八歳であろうか、 段を昇り、開いたままのドアを通って、階下の一室に辿りつ なのは、 のサラリー・マンと別に変ったところも見えぬが、 彼は 入 口 室内に転がり込んだ。 その事務所の石段を、遣うようにして上って行く、 ハッハッと、 トントンと駆け上るべき石段を、 のガラス張りのドアに、 ヨタヨタと這い上っていることであ 脂、汗が玉をなして吹き出している。 さも苦しげな息を吐きながら、 身体をぶッつけるように まるで爬虫類ででれえぬが、ただ異様 る。 やっと石 その辺 額から

や長椅子が並んでいる。
クが置かれ、それを囲んで、やはり古風な彫刻のある肘掛椅子っている。室の中央には畳一畳敷程の大きな彫刻つきのデス博士の博識を物語るかの如く、内外の書籍がギッシリと詰まるこは、宗像博士の依頼者接見室で、三方の壁の書棚には

「先生、先生はどこです。アア、苦しい。早く、先生……

り絞って叫んだ。 若い男は床の上に倒れたまま、喘ぎ喘ぎ、精一杯の声をふ

実験室へ通じるドアが開いて、一人の男が顔を出した。 すると、唯ならぬ物音と叫び声に驚いたのであろう、 隣の

も三十歳程に見える若い事務員風の洋服男である。 「オヤッ、木島君じゃないか。どうしたんだ、その顔色は?」 彼はいきなり室内に駈け込んで、若者を抱き起した。

「アア、小池君か。せ、先生は? ……早く会いたい。……

が行われる。アア、恐ろしい。……せ、先生に……」 重大事件だ。……ひ、人が殺される。……今夜だ。今夜殺人

れが分ったのだ。一体、誰が殺されるんだ」 「ナニ、殺人事件だって? 今夜だって? 君はどうしてそ

目を見つめた。 小池と呼ばれた若者は、 顔色を変えて木島の気違いめいた

の中にすっかり書いてある。それを先生に……」 られるんだ。……せ、 「川手の娘だ。……その次は親爺の番だ。みんな、みんなや 先生は? 早く先生にこれを。

な小さい紙包を掴み出し、さも大切そうに握りしめている。 にのせた。そして、 ぼったい洋封筒を取出して、 「先生は今御不在だよ。三十分もすればお帰りになる筈だ。 彼はもがくようにして、胸のポケットを探ると、一通の厚 次には同じポケットから、何かしら四角 やっとの思いで、大デスクの端

うんだ」 「あいつに、 やられたんだ。毒薬だ。 アア、苦しい。 水を、

水を……」

それよりも、

君はひどく苦しそうじゃないか。

「よし、今取って来てやるから、待ってろ」

入れて帰って来ると、病人を抱えるようにして、 小池は隣室へ飛んで行って、化学実験用のビーカーに水を それを飲ま

せてやった。

「しっかりしろ。今医者を呼んでやるから」

彼は又病人の側を離れて、 卓上電話にしがみつくと、 附近

の医院へ至急来診を頼んだ。 「すぐ来るって。ちょっとの間我慢しろ。 だが、 体誰にや

られたんだ。誰が君に毒なんか飲ませたんだ」

恐怖の表情を示した。 木島は、 半ば白くなった目を見はって、 ゾッとするような

「あいつだ。……三 重の渦巻だ。……ここに証拠がある。

…こいつが殺人鬼だ。アア、恐ろしい」 彼は歯を喰いしばって、 もがき苦しみながら、 右手に握っ -2-

た小さな紙包みを示した。 「よし、分った。この中に犯人の手掛りがあるんだな。 しか

し、そいつの名は?」 だが、木島は答えなかった。もう両眼の虹彩が上、瞼に隠れ

「オイ、木島君、 木島君、 しっかりしろ、 名だ。 そい つの名

なかった。

いくら揺すぶっても、

木島の身体は水母のように手応えが

を云うんだ」

てしまっていた。

どうしたとい

となって、遂に無残の最期をとげたのであった。 可哀想に、宗像研究室の若き助手木島は、捜査事業の犠牲

五分程すると、附近の医師が来診したが、最早や脈搏も鼓

動も止った木島を、どうすることも出来なかった。

四十分程のちであった。 待ち兼ねた宗像博士が研究室に帰って来たのは、それから

大股に歩を運ぶところ、如何にも帝政独逸時代の医学博士と折目正しい夏のモーニングに包んで、少し反り身になって、黒鼈甲縁のロイド眼鏡をかけ、大柄なガッシリした身体を、に刈った濃い顎髯、何物をも見透す鷲のように鋭い目には、房のように縮らせ、ピンとはねた小さな口髭、学者臭く三角房のように縮らせ、ピンとはねた小さな口髭、学者臭く三角

愛弟子のなきがらを見おろしながら、博士は小池助手から、事の次第を聞き取ると、痛ましげに

いう趣きであった。

と、小池助手に訊ねた。「実に気の毒なことをした。木島君の家へは知らせたかね」

来るということでした」から警視庁へも電話しました。中村さん驚いてました。すぐ「電報を打ちました。やがて駈けつけて来るでしょう。それ

がこんな目に合う程では、余程大物らしいね」想だろうって、取り合わなかったくらいだ。それが、木島君とは、想像もしていなかったからね。中村君なんか、被害妄「ウン、中村君も僕も、川手の事件が、こんなことになろう

ろしいと言いつづけて死んで行きました」「木島君は、何だか非常に怖がっていました。恐ろしい、恐

されていた。

て、今日からこの事件に全力を尽そう。木島君の敵討ちをし余程兇悪な犯人に違いない。小池君、外の事件は放って置い「ウン、そうだろう。予告して殺人をするくらいの奴だから、

なけりゃならないからね<u>」</u>

捜査係長が入って来た。鼠色の背広姿である。 話しているところへ、゛慌゛しい靴音がして、警視庁の中村

の表情を隠しもせず、宗像博士を顧みて云った。彼は木島の死体を見ると、帽子を取って黙礼したが、

あなたの部下をこんな目に合わせて、実に何とも申訳ありま「こんなことになろうとは思いもよらなかった。油断でした。

せん」

「電話の話では、木島君は何か犯人の手掛りを持って帰った木島君一人に任せてなんぞ置かなかったでしょうからね」「イヤ、それはお互です。僕だって、これ程の相手と思えば、

係長が小池助手を振返った。ということでしたが」ということでしたが」「電話の話では「木島君は何カ狐人の手掛りを持って帰っれ

たと云っていました」「エエ、これです。この封筒の中に詳しく報告を書いて置い

-3-

「オヤ、この封筒は銀座のアトランチスの封筒じゃないか。像博士が受取って、裏表を調べながら、呟いた。小池が大デスクの上の例の洋封筒を取って差出すのを、宗

如何にも、封筒の隅に、カフェ・アトランチスの名が印刷を書いたんだな」

すると、木島君はあのカフェで、

用紙と封筒を借りて、

ったい書翰箋を抜き出して、開いて見た。博士は卓上の鋏を取って、丁寧に封筒の端を切ると、厚ぼ

違いをしてやしないかね。それとも、木島君が倒れてから、「オイ、小池君、確かにこれに違いないね? 君は何か思い・がし言幹等を払っ出して 閉して見が

誰かこの部屋へ入ったものはなかったかね」

博士が妙な顔をして、 小池助手にただした。

ものなぞありません。どうかしたのですか。その封筒は確か に木島君が内ポケットから出して、そこへ置いたままなんで 「イイエ、僕は一歩もこの部屋を出ませんでした。 誰も来た

「見給え、これだ」

うに持って来る訳はないが」 ラとめくって見せたが、不思議なことに、それはただの の束に過ぎなかった。文字なぞ一字も書いてはないのだ。 「変だなア、まさか木島君が、 博士は用箋を中村係長と小池助手の前に差出して、パ 白紙を封筒に入れて、 大切そ 白紙 ラパ

中村氏が、 狐につままれたような顔をした。

束を紙屑籠に投げ入れると、決定的な口調で云った。 「小池君、 宗像博士は、唇を噛んで暫く黙っていたが、 すぐアトランチスへ行って、木島君が用紙と封筒 白紙

の

胡乱な奴がいなかったか調べてくれ給え。そいつが犯人か、 を借りたあとで、誰かと話をしなかったか、同じテーブルに

毒を飲ませたのも、 報告書の入った封筒と、この白紙の封筒とすり換えたんだ。 少くとも犯人の相棒に違いない。木島君の油断している隙に、 同じ奴かも知れない。出来るだけ詳細に

いるものは、 のがあるんです。死体の右手をごらん下さい。そこに掴んで しました。 余程大切な証拠品らしいんです。 しか し、もう一つ、木島君がでは、 持って来たも

調べてくれ給え」

り外へ飛び出して行った。

小池助手はテキパキと云い捨てて、

帽子を掴むと、

いきな

三重渦げ

ことが出来た。 手を調べた。小さな紙包を握っている。死んでもこれだけは は死人の指を一本一本引きはなして、やっとそれをもぎ取る 手放すまいとするかの如く、固く固く握りしめている。 小 池助手を見送ると、宗像博士は 死体の上に屈が ん で、 その

切り、紙を解いて行った。 いて、紐でくくってある。 に手をふれないように、 ガラス板を持って来て、紙包をその上に乗せ、なるべくそれ 何か小さな板切れのようなものが、丁寧に幾重 ナイフとピンセットを使って、 博士は隣りの実験室から、一 にも紙を巻 枚の

と小さな音を立てるば ただ時々ナイフやピンセットがガラス板に触れて、 博士も無言、それをじっと見つめている捜査係長 かり、 まるで、 手術室のような薄気味 カチカチ も無言、

悪い静けさであった。 「なあんだ、靴箆じゃありませんか」

る。 枚の小型の象牙色をしたセルロイ 中村係長が頓狂な声を出した。 ド製のありふれた靴箆であ 如何にも紙包の品物は、

助手は気でも違ったのであろうか。 封筒の中へ大切そ

の紙包だ。一体こんなものに何の意味があるというのだろう。うに白紙の束を入れていたかと思うと、今度は御丁寧な靴箆

して電燈をつけ、その光の下で、靴箆を入念に検査した。分調べることが出来なかったので、部屋の隅のスイッチを押見たが、その時分にはもう、窓の外に夕闇が迫っていて、十に、その靴箆の端をソッと摘むと、窓からの光線にすかしてしかし、博士は別に意外らしい様子もなく、さも大切そう

「 村系長が、 っついい へ気が 「指紋ですか」

「そうです。しかし……」中村係長が、やっとそこへ気がついて訊ねた。

向こうともしないのである。博士は吸いつけられたように靴箆の表面に見入って、振り

れとも僕の目がどうかしているのかしら」こんな不思議な指紋を見たことがない。まるでお化けだ。そオヤ、これは不思議だ。中村君、実に妙な指紋ですよ。僕は側に一つだけ、非常に明瞭な奴がある。拇指の指紋らしい。「外側の指紋は皆重なり合っていて、はっきりしないが、内

「どれです」

でしょう。別に重なり合ってはいない。しかし、ホラ、渦が「ホラ、こいつですよ。すかしてごらんなさい。完全な指紋(中村氏が近づいて、博士の手元を覗き込んだ。

よく見分けられませんね」「そういえば、なる程、妙な指紋らしいが、このままじゃ、

三つもあるじゃありませんか」

「拡大して見ましょう。こちらへ来て下さい」

博士は靴箆を持って、先に立って隣りの実験室へ入って行

った。中村係長もそのあとにつづく。

化学実験室と調剤室とを一緒にしたような眺めだ。が置かれ、一方には、夥しい瓶の並んだ薬品棚が立っている、実験台があり、その上に大小様々のガラス器具、顕微鏡など十坪程の部屋である。一方の窓に面して大きな白木の化学

物の指紋の部分を、直ちに拡大して映写することが出来る。うが、コップであろうが、ピストルであろうが、それらの実によって指紋は元より、あらゆる微細な品物を拡大して、スによって指紋は元より、あらゆる微細な品物を拡大して、ス度 丈な三脚にのせて置いてある。実物幻燈器械なのだ。これの機械まで揃っている。それらの間に、黒い幻燈器械の箱が、又別の隅には、大型写真器、紫外線、赤外線、レントゲン

ないのだ。 鑑識課にもないような、宗像博士創案の奇妙な器械も少くはようだと感じないではいられなかった。イヤ、この部屋にはが、入る度毎に、まるで警視庁の鑑識課をそのまま縮小した中村捜査係長は、この部屋へは度々入ったことがあるのだ

燈を点火し、靴箆を器械に挿入して、ピントを合せた。と濡繻子のカーテンを閉め、部屋を暗室にすると、幻燈内の電粉末を塗り、隆線を黒く染めてから、窓の紐を引いて厚い物末を塗り、隆線を黒く染めてから、窓の紐を引いて厚い情士は先ず靴箆を実験台の上に置いて、指紋の部分に黒色

に拡大され、指紋の隆線の一本一本が黒い紐のように渦巻いが映し出された。五分にも足らぬ拇指の指紋が、三尺四方程で おい ち部屋の一方の壁のスクリーン上に、巨大な指紋の幻燈

博士自慢の装置である。

ている。

くて、何かしらえたいの知れぬ化物に睨みつけられているよくは口を利くことさえ出来なかった。二人とも、指紋ではな博士も係長も、暗闇の中でじっとそれを見つめたまま、暫

うな、

不思議な気味悪さを感じたからだ。

下の渦巻はニヤニヤと笑った口である。のように見えて来る。上部の二つの渦巻は怪物の目玉、そのに長い渦巻がある。じっと見ていると、異様な生きものの顔渦巻があるのだ。大小二つの渦巻が上部に並び、その下に横アア、何という奇怪な指紋であろう。一箇の指紋に三つの

「中村君、こんな指紋を見たことがありますか」

闇の中から、博士の低い声が訊ねた。

状紋とでも云うのでしょうか」
にみたいな顔をしている奴は、全く例がありません。三重渦は、たまに出くわしますが、渦巻が三つもあって、こんなお変態紋に属するのでしょうね。渦巻が二つ抱き合っているの変態な奴には出くわしたことがありません。指紋の分類では「ありませんね。僕も相当色々な指紋を見ていますが、こん

「拵えたものじゃないでしょうね」な指紋を持った人間は、二人とあるまいからね」るまでもありませんよ。一目で分る。広い世間に、こんな妙「如何にも、三重渦状紋に違いない。これはもう隆線を数え

少しも不自然な点がない」こころがあって、じき見破ることが出来るのですが、これにはの位に拡大して見れば、拵えものなれば、どこか不自然なと「イヤ、拵えたものでは、こんなにうまく行きませんよ。こ

されたかの如く、又黙り込んでしまった。 そして、闇の中の二人は、目と口のある巨大な指紋に圧迫

暫らくして、中村係長の声

犯人に会っている訳ですね。直接犯人から掠めて来たものじれたのでしょう。この靴箆が犯人の持物とすれば、木島君は「それにしても、木島君は、この妙な指紋をどうして手に入

ゃないでしょうか」

「そうとしか考えられません」

易々と犯人を捉えることが出来たかも知れないのに」「残念なことをしたなア。木島君さえ生きていてくれたら、

い奴だ。中村君、これは余程大物ですよ」上、報告書まで抜き取ってしまったのです。実に抜け目のな「犯人はそれを恐れたから、先手を打って毒を呑ませ、その

たそうですからね」
「あの強情な木島君が、恐ろしい恐ろしいと云いつづけていら

った。それだけに、僕らは余程用心しなけりゃいけない。…「そうです。木島君は、そんな弱音を吐くような男じゃなか

「イヤ、何もして居りません。今日までは川手の訴えを本気博士は心配らしく、せかせかと訊ねた。

…川手の家は、あなたの方から手配がしてありますか」

は置けません」に受取っていなかったのです。しかし、こうなれば、捨てて

「おっしゃるまでもありません。今からすぐ帰って手配をし犯人の方でも事を急ぐに違いない。一刻を争う問題です」「すぐ手配をして下さい。木島君をこんな目に合せたからは、

ます。今夜は川手の家へ三人ばかり私服をやって、厳重に警

戒させましょう」 って置く訳に行きません。 「是非そうして下さい。僕も行くといいんだけれど、死骸を抛 僕は明日の朝、 川手氏を訪問して

「じゃ、急ぎますから、これで」

見ることにしましょう」

て行った。 中村係長は云い捨てて、 あたふたと夕闇の街路へ駈け出し

るであろう。又検事局から検視の一行も来るであろう。 厳重に鍵をかけた。 箆をガラスの容器に入れて、鋼鉄製の書類入れの抽斗に納 し、それを待つ間、このままの姿では可哀想だ。 ままの姿で横たわっている。 あとに残った宗像博士は、幻燈の始末をすると、指紋の靴 次の間には、部下の無残な死体が、 今に家族のものが駈けつけて来 元 の しか め

ながら、それをフワリと死体の上に着せてやった。 博士は奥の部屋から一枚の白布を探し出して来て、 黙ら 続き

生ける蝋人形

から、 H製糖株式会社取締役川手庄太郎氏は、ここ一カ月ほど前 差出人不明の脅迫状に悩まされていた。

者は、ただ貴殿への復讐準備の為に費して来た。今や準備は 全く整った。愈々恨みをはらす時が来たのだ。貴殿一 もなく 「拙者は貴殿に深き恨みを抱くものである。長の「拙者は貴殿に深き恨みを抱くものである。長の 、鏖「に会うであろう。一人ずつ、一人ずつ、次々と世 年月を、 家は間 拙

にもいまわしき最期をとげるであろう」

った。 ふれた安物で、全く差出人の所在をつきとめる手掛りがなか 筆蹟が違っていた。 局の消印もその度毎に違っていたし、封筒も用紙も最もあり という意味の手紙が、 、ひどく下手な乱暴な書体であった。差出 毎日のように配達された。 一通毎に

にえたいの知れぬ声が響いた。 脅迫は必ずしも手紙ばかりではなかった。 ある時は 電 話口

めに、その娘さんの方から片づけることに極めているんだよ。 ホホホホホホホ ホ。君には美しい娘さんが二人あるねえ。僕はね、 「川手君、久しぶりだなア。僕の声が分るかね、 ホホホホホホ 先ず手初

底から震い上らせてしまった。 を云っていたのであろう。 ホと女のように笑ったが、その奇妙な笑い声が川手氏を心の 非常に優しい鼻声であった。恐らく電話口で鼻を抑えて物 彼は一言喋る度に、ホホホホホホ -7-

無論声には聞き覚えがなかった。局に問合せて見ると、 自

働電話からという答えで、やっぱり相手の正体を掴む手掛り

がなかった。

「若しやあれでは?」今度の脅迫者を探し当てることは出来なかった。 外の関係でも、随分むごたらしい目に会わせた相手がないでた人物だけに、事業上の敵などは数知れずあったし、事業以 はなかった。だが、それらの記憶を一つ一つ辿 川手氏は今年四十七歳、 無一文から現在の資産を築き上げ って見ても、

と思われるものが一二ないではなかったけれど、 それらの

相手は皆死んでしまっているし、子孫とても残っていないこ 青ざめた顔を見合せて、 急を聞いて馳せつけた親戚知己の人々で、広い邸内も一方な は、中村捜査係長と宗像博士と主人川手庄太郎氏の三人が、 らぬ混雑を呈していたが、 善後の処置を協議していた。 その中に、 取るものも取りあえず、 第一号応接室の洋間に 係長と

に、一層不気味であった。前半生にいじめ抜いた相手が、怨霊とが分っていた。 いくら考えても脅迫者の素性が分らぬだけ 怖を感じないではいられなかった。 となって彼の身辺にさまよっているような、 何とも云えぬ恐 早朝から川手邸を訪問したのである。 博士とは、 事件の報告を受けると、

を失っているように見えた。 士であったが、いつも艶々と赤らんでいる豊頼も、今日は色 川手氏は半白の頭髪を五分刈りにして、半白の口髭を貯え、 大きな目、デップリと太った、 如何にも重役型の紳

思うと、流石の川手氏も狼狽しないではいられなかった。の一人が、何物とも知れぬ殺人鬼の手中に奪い去られたかと 二人の娘と水入らずの家庭を楽しんでいたのだが、 いと申出で、博士の方では、この重大事件を、 の変死の悔みを述べ、遺族に対して出来るだけのことをした 同氏は、一年程前夫人に先立たれたまま、後添い 川手氏と宗像博士は初対面であった。川手氏は、 助手任せにし ŧ 木島 その愛嬢 娶らず、 助手

いうことですが……」 て置いた手落ちを詫びた。 「承"わると、犯人は妙な三重の渦 川手氏はそれを聞き知っていた。 巻の指紋を持った奴だと

持っている人物のお心当りはないでしょうか」 なっているの 「そうです。三つの渦巻が上に二つ、下に一つと三角型に重 です。 若しや、古いお知合いに、 そんな指紋を

- それが全く心当りがないのです。指紋などという奴は、 博士が訊ねると、 川手氏は頭を振って、

の助手の木島という若い探偵が訪ねて来て、 並び称せられる宗像博士に犯人捜査を依頼したところ、 に帰らないという返事であった。そこで、 が、月雪ではゝゝハササザにススールル゙テニュードため、ト゚タラセントでは民間探偵を物色し、先ず明智小五郎の事務所へ使を出したは うような返事をしたまま、一向取合ってくれないので、次に 川手氏は遂に堪らなくなって、このことを警視庁に訴え出 だが警視庁では、 明智氏はある重大犯罪事件の為に、朝鮮に出張中で、 所轄警察署へよく話して置くからとい 今度は明智探偵と 一伍一什を聞き 博士

今更のように震え上った。 問を受け、宗像探偵事務所の木島助手変死の次第を聞かされ、 それから十日余りの昨夜、 川手氏は突然中村捜査係長の訪

取った上、捜査に着手したのであった。

はもう手おくれであった。 りをしてくれることになっ そして、その夜は三名の私服刑事が、徹、宵邸の内外の見張 たが、 しか この警視庁の好意

夕刻から友達を訪問するといって出かけた次女の雪子さん

友達の家は元より、心当りという心当りを電話や使いで探し廻り 十時を過ぎ十一時を過ぎ、深夜となっても帰らなかった。 友達の家を辞去したのが八時頃と分ったばかりで、

不安の一夜が明けて翌朝、 麻布区の高台にある川手邸は、 その後の消息は杳として知れなかった。

すからね」 くら親しくつき合っていても、気のつかぬ場合が多いもので

で、何かお心当りがなければならないと思うのですが」余程深い恨みを持っている奴に違いありません。そういう点「しかし、これ程の復讐を企てているのですから、あなたに・・・

を見た。そこから、この資産家の旧悪を探り出そうとでもす宗像博士は、やはり少し青ざめた顔をして、じっと川手氏

るように、

鋭い目で相手の表情を見つめた。

んな相手は全く心当りがないのです」せん。しかし、これ程の復讐を受ける覚えはないのです。そ「イヤ、そりゃ、わたしを恨んでいる人間がないとは申しま

川手氏は、博士の疑い深い質問に、少し怒りをあらわして

くても、恨む側には何層倍も強く感じられる場合が、往々あ「ですがね、恨みという奴は、恨まれる方では左程に思わな答えた。

こま、どう考えて見ても、そんな心当りまありませんは、犯罪者の気持はよく御承知でいらっしゃる。しかし、わたし「なる程、そういうこともあるでしょうね。さすが御商売柄、るものですからね」

宗像博士は一方の窓の下

の床を、

意味ありげに見つめ

川手氏は益々不快らしく云い放った。には、どう考えて見ても、そんな心当りはありませんね」

紋原紙の内には、無論そんなものはないということでした」任も、三重の渦状紋なんて見たことも聞いたこともない。指の指紋原紙を十分調べさせたのですが、十五年勤続の指紋主のところ、唯一の手掛りですね。実は昨夜のうちに、警視庁「あなたの方にお心当りがないとしますと、例の指紋が、今

い当る人物があるらしく見える。した。さりげなく装っているけれど、心の底では、何者か思聞くと、川手氏は脅えたように、キョロキョロとあたりを見廻宗像博士が、何か意味ありげに、低い声で呟いた。それを

く娘の無事な顔が見たいのです」といっても、日間の無事な顔が見たいのです。わたしは一秒でも早懸けましょう。警察の方でも、民間の方でも構いません。娘人を発見し、娘を取返して下さった方には、五千円の賞金をわたしが負担します。懸賞をつけてもよろしい。そうだ、犯には行かんでしょうか。費用はいくらかかっても、すっかり「中村さん、宗像さんも、何とかして娘を取戻して下さる訳

ている封筒が気になって仕方がないのだが……」かも知れませんね。……僕はさっきから、あの窓の下に落ち「なる程、懸賞とはよい思いつきですが、悪くすると手遅れ々興奮して、遂には半狂乱の体であった。川手氏は感情の激しい性格と見えて、喋っているうちに段

-9-

洋封筒が落ちている。あとの二人は驚いて、その方へ目をやった。如何にも一通ののの声に、何かゾッとさせるような響がこもっていたので、ら、独言のように云った。

封筒はなかった筈だ」がなかったのですよ。それに、わたしの家には、あんな型の「オヤ、おかしいぞ。つい今し方まで、あんなものは落ちてそれを一目見ると、川手氏の顔色がサッと変った。

いながら、ツカツカと窓の側へ立って行って、その封筒

して女中を呼んだ。を拾い上げ、気味悪そうに眺めていたが、いきなり呼鈴を押

のが落ちてたんだが」「お前、今朝ここを掃除したんだね。この窓の下にこんなも

た。 女中が顔を出すと、川手氏は叱りつけるように聞きただし

ど、何も落ちてなんかいませんでございました」「イイエ、アノ、わたくし、十分注意して掃除しましたけれ

「確かかね」

「エエ、本当に何も……」

らめながら、しかし、キッパリと答えた。若い女中は、いかめしい二人の客の姿におびえて、頬を赤

中村警部が不安らしく瞬きしながら云った。「誰かが、窓の外から投げ込んで行ったのではありませんか」

ことは出来ないのです」ません。それに、この外は内庭ですから、家のものしか通るは閉め切ってあります。封筒をさし入れるような隙間もあり「イヤ、そんな筈はありません。ごらんの通りこちら側の窓

「封筒がここへ入って来た経路は兎も角として、中を改めて川手氏は魔術でも見たように、脅え切っていた。

見ようじゃありませんか」

宗像博士は一人冷静であった。

「お調べ下さい」

し出した。博士は受取って、注意深く封を開き、一枚の用紙川手氏は、脅ら開封する勇気がなく、封筒を博士の方へさ

せた。

を拡げた。

「オヤ、これは何の意味でしょう」

そこには、ただ五文字、

衛生展覧会

と記してあるばかり、さすがの博士も、その意味を解し兼しい。

ねたように見えた。

通信に違いありません」「オオ、いつもの封筒です。いつもの用紙です。犯人からの

川手氏が、やっと気附いたように叫んだ

「犯人の手紙ですって、それじゃこれは……」

「中村君、行って見よう。これからすぐ行って見よう」

て、惶しく促すのだ。

「行くって、どこへです」

「極っているじゃないか。衛生展覧会へですよ」

かれている筈なんです。サア、すぐに行って見ましょう」ので、それを知っているんだが、今衛生展覧会というのが開「U公園の科学陳列館さ。僕は、あすこの役員になっている「しかし、衛生展覧会なんて、どこに開かれているんです」

た警視庁の自動車に乗り込んで、U公園の科学陳列館へ走ら場合でないと思ったので、博士と共に、門前に待たせてあっどあっけに取られる程であったが、兎も角愚図愚図している素人探偵は何という恐ろしいことを考えるのだろうと、殆ん中村係長にも、おぼろげに博士の考えが分って来た。この

めていたが、雪子の行方不明と衛生展覧会とを、どう考えて川手氏は両人の気違いめいた出発を、あっけにとられて眺

中に湧き起って来て、 も結びつけることが出来ず、しかし、分らなければ分らない 何ともえたいの知れぬ気味悪さが、 不安と焦 慮に、居ても立ってもいられ 黒雲のように心

は、 める衛生展覧会場へ、惶-自動車が科学陳列館へ着くと、 陳列館の主任に事情を話し、その案内で、 しく昇って行った。 宗像博士と中村捜査係長と 三階全体を占

ぬ心持であった。

るように、 大小様々のガラス張りの陳列台が、 クリートの柱、磨き上げたリノリューム、そこに並べられた 早朝のこととて、広い場内には、 冷えびえと静まり返っていた。 まるで水の底に沈んでい 観覧者の姿もなく、 コン

手義足や、 れらの陳列棚の間を、 、義足や、疾病模型の蝋人形などが陳列してある。三人はそ場内の一半には医療器械、一半には奇怪な解剖模型や、義 グルグルと急がしく歩き廻った。

それらのまがまがしい蝋細工の間を、三人は傍目もふらず歩 いて行く。目ざすところは、疾病模型の蝋人形なのだ。 にした内臓模型、長く見つめていると吐き気を催すような、 が這い廻っているような脳髄模型、等身大の蝋人形を韓竹割 太い血管で血走ったフットボールほどの眼球模型、無数のない 毒々しく赤と青で塗られた、四斗樽ほどもある心臓模型、

> ある。 それらの陳列棚の中に、一際目立つ大きなガラス箱があっ 上部と四方とを全面ガラス張りとした長方形の陳列台で

にその方へ近づいて行った。 なガラス箱の前に立った。 宗像博士は、遠くからそのガラス箱を見つけると、 そして、三人はその寝棺のよう 真^まっ 直 ぐ

るような蝋人形である。 十分見分けられない程であるが、 れて、全裸の姿を曝していた。 ガラス箱の中には、 等身大の若い女が、腰部を白布に蔽わ 遠い窓からの薄暗い光線では、 しかし、 何となく生きてい

型らしくもないじゃありませんか。 って行った方が、ふさわしい位だ」 「どうして、こんなものを陳列するのですか。 美術展覧会の彫刻室へ持 別に 病気の模

した体で、オズオズと、 博士が主任を顧みて訊ねた。すると、 主任は如何にも恐縮

驚いた位なんです。若しなんでしたら、 内に運び込まれたばかりで、つい今し方蔽い布を取って見て ることに致しますが」 むものです。模型師の道楽なんですね。この人形も今朝暗い 「いつの展覧会にも、こういう完全な人形が一つ位まぎれ込 別の模型と置き換え

みなんか、職人の仕事とは思われぬ程ですね」 によく出来ているね。それに非常な美人だ。 「イヤ、それにも及ばないだろうが、しかし、この人形は実 と弁解しながら、中村警部をチロチロと横目で眺めた。

ろしい病毒の吹出物、 病の蝋人形というも

くふくれ上った心臓の模型などは、健康者を忽ち病人にして

恐ろしい心理的効果を持っている。

しまう程の、

展覧会などの蝋人形の効果から思いついたものであった。

疾

のには、それ程のスリルがあるのだ。

ニコチンやアルコールの中毒で、黄色

何々ドラッグ商会の例の不気味な蝋人形は、もともと衛生

たが、やがて、何を発見したのか、警部が頓狂な声を立てた。 博士と中村警部とは、熱心にガラス箱の中を覗き込んでい

ろをごらんなさい。腕にも、腿にも」「オヤッ、この人形には産毛が生えている。ホラ、顎のとこ

銀色に光る、目に見えない程の産毛を見分けることが出来た。ようやく薄暗い光線に慣れた人々は、裸体人形の全身に、

ケットから拡大鏡を取出して、ガラス箱の表面の或る一点を覗りであったが、宗像博士は、ふと何かに気づいたらしく、ポー三人は余りの薄気味悪さに、黙りかえって顔を見交すばか

だ。

き込んだ。

「中村君、宀寸ここを覗いてごらんなさい」

離れて、嗄れた声で叫んだ。いた係長は、覗くが否や、はじき返されたように、その側を、いた係長は、覗くが否や、はじき返されたように、その側を、おわれるままに、レンズを受け取って、ガラスの表面を覗

「アア、三重渦状紋だ」

「君、この蓋を開けて下さい」

になりながら、ポケットの鍵で、ガラス箱の蓋を開いた。博士が呶鳴るまでもなく、主任もそれに気づいて、もう真青

「人形の肌に触ってごらんなさい」

飛びのいた。 のと思うと、悲鳴のような叫び声を立てて、って見た。触ったかと思うと、悲鳴のような叫び声を立てて、 主任はオズオズと、人差指を人形に近づけ、その腹部に触

ったからである。そして氷のように冷たかったからである。人形の肌は、まるで腐った果物のようにブヨブヨと柔かか

着想に、流石の犯罪専門家達もあっけにとられてしまったのガラス箱に入れて、衆人の目に曝すという、余りにも奇怪な三人は暫くの間言葉もなく茫然と顔見合せていた。死体を

のに、こんな手数をかけたのですね」なんかも念入りにルージュが塗ってある。蝋人形らしくする「ごらんなさい。この死体には全身に化粧が施してある。唇

中村係長が感に堪えたように口を切った。

が、まざまざと瞼の裏に浮かんで来るように感じられた。ながら、絵筆を執って、悪魔の美術品製作に余念のない有様った二人のさし向い、ギラギラと目を光らせ、唇をなめずりしたのだ。彼が人なき部屋、ほの暗き燈火の下で、死体とたった。犯人は死体化粧によって、そこに一つの芸術品を創造如何にもそれは死体とは考えられぬ程艶めかしい色艶であ

を持った奴が、外にある筈はないからだ。ように見える三重渦状紋である。こんな気違いめいた怪指紋箱の表面に残されていた悪魔の指紋である。あの怪物の顔の子さんであることは明かであった。何よりの証拠は、ガラスの事情を考え合せて、この艶めかしい死体こそ、捜索中の雪博士も警部も、川手雪子の顔を知らなかったけれど、種々

り固まって、精神に異状を来たしているとしか考えられませんなのは初めてですよ。気違い沙汰だ。この犯人は復讐にこ「恐ろしい犯罪だ。僕は永年犯罪を手がけて来たけれど、こ

- 1.

中村警部が沈痛な面持で呟いた。

じゃありません」
でありません」
なずば抜けた復讐が、並々の犯罪者なんかに思いつけるもの
陳列されているのを見る父親の心持はどんなでしょう。こんれたばかりか、その死体が、しかも裸体の死体が、展覧会にこれほど効果的な復讐があるでしょうか。自分の娘が惨殺さ「イヤ、気違いというよりも寧ろ天才です。邪悪の天才です。

闘志に、爛々と輝き初めたかと見えた。いを禁じ得ない体であった。鋭い両眼は、まだ見ぬ大敵への士は今、この稀代の大悪人、絶好の敵手を見出して、武者震宗像博士は、犯人を讃美するような口調でさえあった。博宗像博士は、犯人を讃美するような口調でさえあった。博

ょう| 続きをしなければなりません。それも一緒に電話をかけましが電話をかけましょう。それから、僕としては直様検死の手念のために川手氏にここへ来て貰ってはどうでしょうか。僕「ところで、この死体は雪子さんに違いないと思いますが、鶯

すぐそこへ人をやるのですね」した人形製作者を取調べることです。事務所の帳簿を調べて、「それと、もう一つ大切なことがあります。この死体を出品中村警部はそう云って、係員に電話の所在を訊ねた。

博士が注意すると、警部は、肯いて、

すぐ調査に着手させましょう」「如何にもそうでした。よろしい。電話の序に刑事を呼んで、

科学陳列館は、直ちに一般観衆の入場を禁止して、現 場保と云い捨て、そそくさと階下の電話室へ降りて行った。

列館の玄関に押しかけるという騒ぎとなった。(本書し、それにつづいて、耳の早い新聞記者の一団が、陳課、鑑識課の人々、裁判所の一行、所轄警察署の人々と次々氏が自家用車を飛ばして駈けつけたのを先頭に、警視庁捜査声に囁き交しながら待つうちに、やがて、真青になった川手存に分め、博士と捜査係長と数名の係員とが、ボソボソと小

も検出されなかった。 一つ がった。例の怪指紋は宗像博士が発見したものの外には一つ がった。例の怪指紋は宗像博士が発見したものの外には一つ たが、雪子さんの死因が毒殺らしいこと、死後八九時間しか の指紋検出、訊問と、取調べは型通りに進んで行っ のに相違ないことを証言した。それから警察医の検死、 出手氏は、死体を一目見ると、目をしばたたきながら、雪

と見ると、すぐさま傍らにいた中村捜査係長に囁いた。に、惶しく一枚の名刺がとりつがれた。博士はそれをチラッーその取調べの最中、現場に立合っていた宗像博士のところ

あなたも来ませんか」
国んだのでしょう。別室を借りて報告を聞こうと思いますが、ろまで追っかけてくる程だから、恐らく何か大きな手掛りをンチスの件で至急に会いたいというのです。態々こんなとこ「助手の小池君がやって来たのですよ。例のカフェ・アトラ

ね」「アトランチスというと、木島君が手紙を書いたカフェです

「それは耳よりだ。是非僕も立合わせて下さい」れません」れません」をうです。あの手紙を白紙とすり換えた奴が分ったかも知

受けることにし、小池助手をそこに通すように頼んだ。 警部はそこにいた係員に耳打ちして、階下の応接室を借り

緊張に青ざめて待ちうけていた。 二人が急いで応接室に入って行くと、背広姿の小池助手が、

先生に呼ばれてここへ来られたという返事でしょう。それで、 のお宅ではないかと思って、電話をかけますと、川手さんは 「先生、又大変なことが起ったらしいですね。……川手さん

事務所へ知らせて置く暇がなくて……ところで、 「ウン、突然ここへ来るようなことになったものだからね。 用件は?」

先生のお出先がやっと分ったのです」

博士が訊ねると、小池はグッと声を落して、

「犯人の風体が分ったのです」

٤ 得意らしく囁いた。

「ホウ、それは早かったね。で、どんな奴だね」

ばかりのところへ飛び込んで行ったのです。 もう一度出掛けて見たのです。女給達がやっと目を覚ました 込んでいて、ゆっくり話も出来なかったものですから、 「昨夜あれからアトランチスへ行ったところが、ひどく客が 、 今 日

分ばかりいて、プイと出て行ってしまったというのです」 きりと何か書いていたそうです。それを書き終ると、ホッと フェへ行って、飲物も命じないで、用箋と封筒を借りて、 とをよく覚えていてくれました。木島君は午後三時頃あのカ したように女給を呼んで、好きな洋酒を命じ、それから二十 「それで、 すると、丁度木島君のお馴染の女給が居合せて、昨日のこ その時木島君の近くに、怪しい奴はいなかったの

かね」

間、まぶかに冠った鳥打帽を一度も脱がなかったといいます。 えてくれましたが、何でも年は三十五六位、 で、青白い顔に大きな黒眼鏡をかけていたといいます。髭は なかったそうです。服装は、黒っぽい背広で、カフェにいる 「いたのですよ。女給はよく覚えていて、その男の風采を教 その男が、木島君が手紙を書き終った頃、隣の席へ移って 小柄な華奢な男

来て、何だか慣れなれしく木島君に話しかけ、 酒を命じて、木島君に勧めたりしていたそうです。恐らくそ のシェリー酒の中へ毒薬を混ぜたのではないでしょうか」 別にシェリー

した話だけでは、そのまま信じる訳にも行かぬが……」 「イヤ、女給の話だけじゃありません。僕は動かすことの出 「ウン、どうやらそいつが疑わしいね。しかし女給の漠然と

来ない証拠品を手に入れたのです」 「エッ、証拠品だって?」

つめた。 博士も中村警部も、 思わず膝を乗り出して、相手の顔を見

のステッキを持って来て、二人の前にさし出した。 「そうです。ごらん下さい。このステッキです」 小池はそう云いながら、部屋の隅に立てかけてあった黒檀 見れば、

その握りの部分全体に、厚紙を丸くして被せてある。 指紋だね」

「ここです。ここをごらん下さい」 「そうです。消えないように、十分用心して来ました」 丸めた厚紙をとると、下から銀の握りが現われて来た。

取出して博士に渡した。博士はそれを受取って、示された部 小池は握りの内側を指さしながら、ポケットから拡大鏡を

分に当てて見る。警部が無言で横からそれを覗き込む。

「オオ、三重渦状紋だ!」

木島助手が持帰った靴箆に残っていたのと、 寸分違わぬお

化けの顔が笑っていた。

「このステッキは?」

「その黒眼鏡の男が忘れて行ったのです」

「そいつはアトランチスの定(連かね」

「イイエ、全く初めての客だったそうです。木島君が帰ると、

りに来ないかも知れません」 も、ステッキを取りに来ないということです。 間もなくそいつも店を出て行ったそうですが、 多分永久に取 今朝になって

なのだ。 アア、小柄で華奢な黒眼鏡の男。そいつこそ稀代の復讐鬼 お化けのような三重渦巻の怪指紋を持った悪魔なの

やって来たのです。 このステッキを先生にお調べ願いたいと思いまして、 「とりあえず、それだけ御報告しようと思って。それから、 そいつの足取りを調べて見ます。そして、 もう風采が分ったからには、 悪魔の巣窟を 何としてで 急いで

「ウン、抜け目なくやってくれ給え」

突きとめないで置くものですか。では、

僕、

これで失礼しま

博士に励まされて、若い小池助手はいそいそと陳列館を出

て行った。

は中村係長の承諾を得て、黒檀のステッキを研究室に持帰り、 っていた人々は、それぞれ引取ることになったが、宗像博士 それから間もなく、死体陳列事件の取調べも終り、そこに集

> 物のステッキで、 拡大鏡によって綿密な検査をしたけれど、 はこれという手掛りも得られなかった。 製造所のマークもなく、 ごくありふれた安 例の怪指紋の外に

子さんと木島助手の殺害犯人が同一人であることは、 その内臓から検出された毒物と、 その前日、 り毒物の嚥下によることが明かとなった。 瞭になった訳である。 同じ性質のものであったことも判明した。これによって、 たが、その結果をここに記して置くと、 雪子さんの死体は直ちに大学に運ばれ、 木島助手の死体も同じ場所で解剖されたのだが、 雪子さんのそれとが、 彼女の のみならず、 翌日解剖に附され 死因 一層明 全く 雪

ろうと主張した。そして、それには一々確かな拠り所があっ えがない、恐らく何者かが工場の名を騙って納入したのであ 驚くばかりであった。 べたところ、工場主は、そういう形のガラス箱はまったく たので、係長もたちまち疑念をはらし、 ついては、中村係長自身その工場に出向いて、 なお、雪子さんの死体を蝋人形として出品した人形工場に 犯人の用意周到さに 厳重に取り調

手掛りといえば、 受取った陳列館員の記憶によると、人夫は都合三人で、 ガーゼに紐をつけて、そこに当てていたということであった。 を取って行った人夫は、左の目が悪いらしく、 ような汚らしい男であったが、中でも親分らしい送。状に判 して終った。やはりある運送店の名が騙られていた。それを れたことは云うまでもない。しかし、それも何等得る所なく 死体入りのガラス箱を陳列館に運び入れた運送店が調べら それが唯一の手掛りであった。 四角く畳んだ

第三の餌食

が出来た。
更に一層白さを増していたことによっても、十分察することあのよく肥っていた人が、げっそりと痩せて、半白の髪が、のであったかは、それから四日の後、雪子さんの葬儀の日に、最愛の雪子さんを失った川手氏の悲歎が、どれほど深いも

知に混って、火葬場まで見送りをするつもりなのだ。 知に混って、火葬場まで見送りをするつもりなのだ。 宗像博士と小池助手の姿が見えた。雪子さんの保護を依頼さが、川手家の門内に火葬場への出発を待ち構えていた。玄関が、川手家の門内に火葬場への出発を待ち構えていた。玄関が、川手家の門内に火葬場への出発を待ち構えていた。玄関が行われ、正午頃には雪子さんの「骸を納めた金ピカの葬儀車」が行われ、正午頃には雪子さんの「骸を納めた金ピカの葬儀車」が行われ、正午頃には雪子さんの「骸を納めた金ピカの葬儀車が行りない。

めることは出来ないのだ。つづけていたが、今日までのところ、まだその行方をつきといか出助手はその後、例のアトランチスの奇怪な客の捜索を

を着けんばかりに接近して、その黒塗りの表面を凝視し始めのか、博士の顔が饿かに緊張の色をたたえ、葬儀車の扉に顔くその観音開きの扉を眺めていたが、やがて、何を見つけたなままに、金ピカ葬儀車のすぐうしろに 佇んで、見るともな宗像博士は、集っている人々に知合いもなく、手持不沙汰

た。

るんだよ。見たまえ、これだ。君はどう思うね」「小池君、この。漆の表面にハッキリーつの指紋が現われてい

見ていたが、見る見るその顔色が変って行った。博士が囁くと、小池助手は、指さされた箇所をまじまじと

つあるようですぜ」 「先生、なんだかあれらしいじゃありませんか。渦巻きが三

「僕にもそう見えるんだ。一つ調べて見よう」

(、『)は「いない」。 (はつ道具の革サックを取出し、その中の小型拡大鏡を開いくです。 博士はモーニングの内ポケットから、常に身辺を離さぬ探

拡大されて、覗き込む二人の目の前に浮上った。 艶々とした黒漆の表面に薄白く淀んでいる指紋が五倍程にて、扉の表面に当てた。

小池助手が思わず声高に呟いた。「やっぱりそうだ。靴箆のと全く同じです」

して仕方がありません」でしょうか。なんだか、すぐ身辺にあいつがいるような気が「この会葬者の中に、あいつがまぎれ込んでいるんじゃないのだ。復讐鬼の執念は、どこまでも離れようとはしないのだ。アア、又してもあのえたいの知れぬお化けの顔が現われた

青ざめた顔で囁いた。
小池助手はキョロキョロと、あたりの人群を見廻しながら、

だ。そうだとすると、迚も調べはつきやしないよ。街路で信この指紋は、車がここへ来るまでに着いたと考える方が自然印になる黒眼鏡なんかかけてはいないだろうからね。それに、しても、僕等には迚も見分けられやしないよ。まさかあの目「そうかも知れない。だが、あいつがこの中に混っていると

がめられぬように、ここへ指紋をつけることなど、訳はないから手を触れることだって、度々あるだろうし、誰にも見と号待ちの停車をしている間に、自転車乗りの小僧が、うしろ

ところへ指紋をつけたんでしょう。まさかもう一度死体を盗「そう云えばそうですね。しかし、あいつ何の為に、こんな

んだからね

み出そうというんじゃないでしょうね」

ぷりな奴だろう」せつける為に、指紋を捺して置いたのさ。なんて芝居気たっせつける為に、指紋を捺して置いたのさ。なんて芝居気たっ戦さ。僕が葬儀車の扉に目をつけるだろうと察して、僕に見じゃないか。そうじゃないよ。犯人の目的は、ただ僕への挑「そんなことが出来るもんか。僕達がこうして見張っている

の不気味な前兆を意味していたのであった。この葬儀車の指紋は、同じ日の午後に起るべき、ある奇怪事と、犯人の真意は必ずしもそんな単純なものではなかった。宗像博士は事もなげに笑ったが、あとになって考えて見る

は、もう告別式会場のA斎場に安置されていた。火葬、骨上げと順序よく運んで、午後三時には、雪子さんの御霊の自動車が、川手邸を出発したのが午後一時、電気炉による行われて行った。葬儀車とそれに従う見送りの人々の十数台をれはさて置き、当日の葬儀は、極めて盛大に、滞りなく

のは、最愛の妹に死別して涙も止めあえぬ川手妙子さんの可る家族や親戚旧知の人々の中に、一際参拝者の注意を惹いたったが、斎場の内陣に整列して、参拝者達に挨拶を返していも、夥しく、予定の一時間では礼拝しきれない程の混雑であ事業界に名を知られた川手氏のことぬ、告別式参拝者の数事業界に名を知られた川手氏のことや、

ク 憐な姿であった。

姿は、参拝者達の涙をそそらないではおかなかった。で、ハンカチを目に当てながら、今にもくずおれんばかりのりの美人、帽子から、靴下から、何から何まで黒一色の洋装今ではたった一人の愛嬢である。顔立ちも雪子さんにそっく妙子さんは故人とは一つ違いのお姉さん、川手氏にとって、

へ倒れてしまった。たためか、ヨロヨロとよろめいたかと思うと、バッタリそこき出そうとして一歩前に進んだとき、悲しみに心も乱れてい愈々引上げようと、人々がざわめき始めた頃、妙子さんも歩予定の四時を過ぎる三十分、やっと参拝者が途切れたので、

自宅に帰ると、彼女は何よりも独りきりになって、思う存連れ込まれて、別段の事もなく自宅に帰ることができた。は、傍らにいた親戚の婦人に抱き起され、そのまま自動車にみ、我先に側へ駈け寄って、介抱しようとしたが、妙子さんそれを見ると、人々は彼女が脳貧血を起したものと思い込

が着いているのに気づいた。かる時、ふと我が姿を見ると、右の頬に黒い煤のようなもの駈け込んだが、そこに備えてある大きな化粧鏡の前を通りか分泣きたいと思ったので、挨拶もそこそこに、自分の部屋に自宅に帰ると、彼女は何よりも独りきりになって、思う存

に腰かけて見ないではいられなかった。と思うと、俄かに恥かしく、そんな際ながら、つい鏡の前たのかしら」

くて、何か人の指の痕らしく、細かい指紋が、まるで黒いイ鏡に顔を近寄せて、よく見ると、それはただの汚れではな

-17

妙子さんの顔は、 ンキで印刷でもしたように、クッキリと浮き上っていた。 「マア、こんなにハッキリと指の痕がつくなんて、妙だわ」 と思いながら、 二重瞼の両眼が、飛び出すのではないかと見開 、つくづくその指紋を眺め入っている内に、 見る見る青ざめて行った。 唇からは全く血

かれた。そして「アアア……」という、訳の分らぬ甲高かれた。 ちて、絨 毯の上に倒れ伏してしまった。 鳴を上げたかと思うと、彼女はそのまま、 椅子からくずれ落 い悲

の気が失せ、

そのいやらしい呪いの紋を現わしたのである。 ある。復讐鬼の恐るべき三重渦状紋は、遂に人の顔にまで、 その指紋には、三つの渦がお化けのように笑っていたので

ていたのである。 頬には、まだ拭われもせず、 つけて見ると、彼女は気を失って倒れていた。そして、その 妙子さんの部屋からの、ただならぬ叫び声に、人々が駈け 悪魔の紋章がまざまざと浮上っ

||が入っていた。 グの内ポケットに手を入れると、 いたのだが、シガレット・ケースを出そうとして、モーニン 手氏は、まだ居残っている旧知の人達と、 だが、 騒ぎはそればかりではなかった。丁度その頃、 そこに全く記憶のない封筒 客間で話をして 父の

い訳には行かぬ。 手紙が入っているらしい様子、恐ろしいからと云って、 たばかりで、 安封筒、 オヤッと思って、取出して見ると、どうやら見覚えのある 封はしてあるが、表には宛名も何もない。それを見 もう川手氏の顔色は変っていた。 しかし中には 見な

思 い切って封を開けば、 案の定、 いつもの用紙、 態と下手

> くつき纏ってい に書いたらしい鉛筆の筆蹟。あいつだ。あいつがまだ執念深 めてあった。 るのだ。文面には左のような恐ろしい文句が

ところで二幕目だがね、 川手君、どうだね。復讐者の腕前思い知ったかね。だが、 本当の復讐はまだこれからだぜ。序幕が開いたばかりさ。 それももう舞台監督の準備はすっ

かり整っている。さて、 二幕目は姉娘の番だ。 はっきり期

娘と同じ目に遭うのだ。 日を通告して置こう。本月四日の夜だ。その夜、 今度 の背景はすばらしいぜ。 姉娘は妹

り数えて待っているがい

云うまでもない、 それが済むと三幕目だ。三幕目の主役を知っているかね。 君自身さ。 真打ちの出番は最後に極って

いるじゃないか。

復讐者より

われぬ、一方ならぬ騒ぎとなった。この二つの椿事が重なり合って、川 手邸は葬儀 の夕べとも

鼎座して、善後策の密議に耽るという騒ぎであった。 庁からは中村捜査係長がやって来る。それから川手氏と三人 ばならなかったし、それに引続いて、 思われぬ、 たけれど、感情の激動のために発熱して、 の宗像博士が、 妙子さんは、 人々の介抱によって、 川手氏の急報を受けて再び駈けつける、 葬儀から帰ったばかり 間もなく意識を取戻し 医師を呼ばなけれ

ない。そして、一方では妙子さんの頬に怪指紋の烙印を捺し、 犯人は恐らくA斎場の式場にまぎれ込んでいたものに違い

な手早さで、あの封筒を辷り込ませたものに違いない。一方では川手氏に接近して、その内ポケットに、揖摸のよう

ものは、川手氏の親戚旧知の限られた人々のみではなかったく行われたものであろう。すると、その時、場内に居合せた式が終って、妙子さんが倒れた時のどさくさまぎれに、素早何でも普通の場合にできる業ではない。これはきっと、告別しかし、妙子さんの頬に指型を押しつけるなんて、いくら

か。

りに、 引きつづき宗像研究室の手で捜査が行われていたが、 たし、 ままに、 池助手が探り出した事実の外には、 その中には、 には主人の川手氏は勿論、 の一人一人を訪問 中村警部はそこへ気がつくと、川手氏の記憶や名簿をたよ 一方カフェ・アトランチスに現われた怪人物については、 宗像博士や小池助手の指紋まで集めたのであったが、 忽ち四十何人の人名表を作り上げ、部下に命じて、 一日一日と日がたって行った。 三重渦状紋など一つもないことが 指紋を取らせることに成功した。それ 同家の召使達は漏れなく入ってい 何の手掛りも発見されぬ 確められた。 最初小 そ

魔術師

川手氏の邸宅は、妖雲に包まれたように、不気味な静寂に日がやって来た。四日の夜がすぐ目の前に近づいて来た。そして、間もなく、復讐鬼のいわゆる第二幕目の幕開きの

子さんの冥福を祈ることにかかり果てていた。絶って、妙子さんを慰めることと、仏間にこもって、なき雪日夜底知れぬ恐怖に打震えていたし、川手氏も一切の交際を閉されていた。妙子さんはあれ以来ベッドについたきりで、

さて、当日の四日には、予め川手氏の依頼もあって、同邸

の内外には、十二分の警戒陣が敷かれた。

部屋の外には、宗像博士自ら、小池助手を引きつれて、徹宵門と裏門と塀外とを固めることになったし、邸内妙子さんの先ず警視庁からは六名の私服刑事が派遣され、川手邸の表

見張りを続けることにした。

明かし、小池助手は二つの窓の外の庭に椅子を置いて、このなかった。博士はそのドアの外の廊下に安楽椅子を据えて夜をが庭に面して開いている外には、たった一つの出入口しかな妙子さんの部屋は、屋敷の奥まった箇所にあり、二つの窓

不安らしく話しかけた。りしながら、廊下の宗像博士の前を通りかかる度に、何かとでもまだ安心しきれぬ体で、妙子さんの部屋に入ったり出た早い夕食を済ませて、一同部署についたが、川手氏はそれ

方面からの侵入者を防ぐという手筈であった。

すね、ここに第二の関門があります。たった一つのドアの外ことですよ。若し仮りにあいつが邸内に入り得たとしてもでのまわりには事に慣れた六人の刑事が見張っています。そのおが二重の鉄の箱に包まれているのも同然ですからね。お邸「御主人、決して御心配には及びませんよ。お嬢さんは、謂博士は笑いながら、妙子さんの安全を保証するのであった。

あるのです。このドアもそのうち僕が鍵をかけてしまう積りが見張りをしている。しかも窓は全部内側から掛金がかけてには、こうして僕が頑張っていますし、窓の外には、小池君

「併し、若し隠れた通路があるとすれば……」

ですよ」

川手氏の猜疑は果てしがないのである。

たまるものですか」たのお建てになった家じゃありませんか。抜穴なんかあってたのお建てになった家じゃありませんか。抜穴なんかあって井にも床板にも、少しの異状もなかったのです。ここはあなで、お嬢さんの部屋を隅から隅まで調べましたが、壁にも天「イヤ、そんなものはありやしません。さい前僕と小池君と「イヤ、そんなものはありやしません。さい前僕と小池君と

かす積りです」 娘の傍を離れる気になれません。この部屋の長椅子で夜を明ちつきましたよ。しかし、わたしは、今夜だけはどうしてもませんね。イヤ、あなたのお話を聞いて、いくらか気分が落「アア、それも調べて下すったのですか。流石に抜目があり

されば、僕達も一層心丈夫ですよ」の守りがつく訳ですからね。あなたがこの部屋の中にいて下「それはいいお考えです。そうなされば、お嬢さんには三重

して、ドアに締りをした。まま黙りこんでしまったので、博士は預って置いた鍵を取出はずむ筈もなく、やがて、川手氏は長椅子の上に横になったを開いたままにして博士と話し合っていたが、この際会話のにつづく控えの間の長椅子に腰をおろし、暫くの間は、ドアーそこで川手氏は、そのまま妙子さんの部屋に入って、寝室

夜が更けるに従って、邸内は墓場のように静まり返って行

った羨子である。った。町の騒音ももう聞えては来なかった。女中達も寝静ま

った様子である。

を歩哨のように行きつ戻りつしたり、睡気を追っぱらうのに助手が、これも煙草を吸いつつ、椅子にかけたり、椅子の前み込んで、ギロギロと、鋭い目を光らしていた。庭では小池宗像博士は、強い葉巻煙草をふかしながら、安楽椅子に沈

十二時、一時、二時、三時、長い長い夜が更けて、そして、

夜が明けて行った。

一生懸命であった。

かけた。
「博士はドアに近づくと、軽くノックしながら川手氏に声をの警戒陣に辟易して、第二幕目の開幕を延期したものらしい。とうとう何事もなかったらしい。流石の復讐鬼も、二重三重宗像博士は安楽椅子からヌッと立上って、大きな伸びをした。年前五時、廊下の窓に清々しい朝の光がさしはじめると、

ませんか」 「もう夜が明けましたよ。とうとう奴は来なかったじゃあり

んだ。それでも返事がない。 返事がないので、今度は少し強くノックして、川手氏を呼

|おかしいぞ

こ黄につったまた、身体中をブレブレきをにされて、固く長すると、アアこれはどうしたというのだ。川手氏は長椅子でドアを開けて、室内に入って行った。(博士は冗談のように呟きながら、手早く鍵を取出し、それ

博士はいきなり飛びついて行って、先ず猿轡をはずし、川椅子に縛りつけられていた。その上、口には厳重な猿、轡だ。に横たわったまま、身体中をグルグル巻きにされて、固く長

手氏の身体をゆすぶりながら叫んだ。

たのです。そして、お嬢さんは?」 「ど、どうしたんです。いつの間に、 誰が、こんな目に合せ

の間をさし示すばかりだ。川手氏は絶望の余り、 物を云う力もなかった。 ただ目で次ぎ

ているので、 博士はその方を振り返った。間のドアが開いたままに 妙子さんのベッドがよく見える。 だが、そのべ になっ

ッドの上には、誰も寝てはいないのだ。 博士は寝室へ駈け込んで行った。余程慌てていたと見え、

大きな音を立てて椅子の倒れるのが聞えた。

「お嬢さん、 ゙お嬢さん………」

ったのである。 だが、いない人が答える筈はない。寝室は全くの空っぽだ

早く川手氏の縛めを解くと、 博士は青ざめた顔で再び控えの間に戻って来た。 そして手

「一体これはどうしたというのです」

と叱責するように訊ねた。

「何が何だか少しも分りません。ウトウトと眠ったかとおも

うと、 ちに、気が遠くなってしまいました。それからあとは何も知 しょう。口と鼻の上を何かで圧えつけられているなと思うう 突然息苦しくなったのです。 妙子は攫われてしまったのですか」 あれが麻酔剤だったので

ないのだ。 川手氏は無論それを知っていた。だが、聞かずにはいられ

「申訳ありません。しかし、僕の持場には少しも異状は

なか

あいつは窓から入ったのかも知れません」

ったのです。

りません。妙子は?

ーテンを開き、 博士は云い捨てて、窓のところへ飛んで行くと、サッとカ 掛金をはずして、 すりガラスの戸を上に押し

上げ、庭を覗いた。

'小池君、 お早うございます」 小池君」

ある。 何としたことだ。小池助手は別状もなく、そこにいたので そして何も知らぬらしく 間の抜けた挨拶をしたので

「君は眠りやしなかったか」

ある。

「イイエ、一睡も」

「それで、何も見なかった

「何もって、何をですか」

「馬鹿ッ、妙子さんが攫われてしまったんだ」 博士はとうとう癇癪玉を破裂させた。

も、ちゃんと内側から掛金がかけられ、 った。彼が犯人を見逃したのではない証拠には、窓は二つと だが、よく考えて見ると、小池助手に落度のある筈はなか 少しの異状もなかっ

たからである。

締りにも別条はない。アア、愈々お化けだ。 調べて確めてある。ドアには外から鍵がかかっていた。 出て行ったのであろう。 り出来る筈がないではないか。 でもない限り、 とすると、あいつは一体全体、どこから入って、どこから 密閉された部屋に忍び込んだり、 室内に抜け穴なんかないことは十分 お化けか幽霊で 抜け出した

び出すことが出来たのだ。妙子さんは血の通った人間だ、隙か二分の隙間から抜け出たとしても、妙子さんをどうして運

間などから抜け出せるものではない。

なければならぬ。ない。あらん限りの智恵を絞って、このお化じみた謎を解かった様子であった。だが、、徒らに途方に暮れている場合では流石の名探偵宗像博士も、これには全く途方に暮れてしま

った。云うまでもなく、外部を固めている六人の刑事に、昨と門とを開かせると、気違いのように門の外へ飛び出して行博士はふと思いついたように、慌しく女中を呼んで、玄関

門や塀を越えたものは決してなかったと確信に満ちて答えたということである。彼等は異口同音に、外からも内からも、邸を取りまく高塀のどの部分にも、全く何の異状もなかっただが、その結果判明したのは、表門にも裏門にも、その外夜の様子を訊ねるためだ。

名探偵の失策

の

であった。

髄の盲点という奴かも知れない。物理上の不可能はあくまで「おかしい。どうもおかしい。僕は何か忘れているんだ。脳

邸の門を入ったり出たり、そうかと思うと、モーニングの裾博士は拳骨で、自分の頭をコツコツ殴りつけながら、川手

不可能だ_

回っこ丿しこ。 をひるがえして、コンクリート塀のまわりを、グルグル歩き

限 廻ったりした。

一つ発見することが出来なかった。
下、庭園の隅々までも這い廻った。しかし、足跡一つ、指紋二時間程、まるで煤掃のように、真黒になって天井裏や縁の博士と助手と六人の刑事とが、夫々手分けをして、たっぷり明るくなるのを待って、再び屋内屋外の捜査が繰返された。

ことであろう。 人目をくらました賊のことだ。恐らくその手配も徒労に終る市に非常線が張られたのだが、狭い邸内でさえ、煙のようにこの事が警視庁に急報されたのは云うまでもない。忽ち全

サッサと玄関を出てしまった。 博士で、 もなく、 げることになった。主人の川手氏は、 ような顔で、簡単な挨拶をすると、 敗軍の将宗像博士は、非常な不機嫌で、一応事務所 殊更詫びごとをいうでもなく、苦虫をかみつぶした 絶望と悲歎のために半病人の体であったし、博士はこになった。主人の川手氏は、博士の失敗を責める力 小池助手を引きつれて、 だ引上 -22-

モジモジするばかりである。ただ、気拙ずそうに、博士の横顔をチロチロと盗み見ながら、の不機嫌な先生を、どう扱っていいのか見当もつかなかった。呼吸さえしていないかと疑われるばかりだ。小池助手は、こ目を閉じて、一言も口を利かない。まるで木彫の像のように、自動車を拾うと、博士はクッションに凭れたまま、じっと

「オオ、そうかも知れない」博士は突然カッと目を見開き、ところが、自動車が事務所への道を半ば程も来た時である。

ッと血の気がのぼって、目の色も俄かに生々と輝いて来た。と独言をいったかと思うと、今まで青ざめていた顔に、サ

博士はびっくりするような声で呶鳴った。「オイ、運転手、元の場所へ引返すんだ。大急ぎだぞ」

「何かお忘れものでも……」

小池助手がドギマギして訊ねる。

たことに、今やっと気附いたんだ」「ウン、忘れものだ。僕はたった一つ探し忘れた場所があっ

「それじゃ、あの賊の秘密の出入口がおわかりになったのでりつけて、車の方向を変えさせた。 名探偵は、そういう間ももどかしげに、再び運転手を呶鳴

すか」
「それじゃ、あの賊の秘密の出入口がおわかりになったので

いなんて、実にひどい盲点に引っかかったもんだ」の目の前にいたんだ。アア、俺は、今までそこに気がつかなを気附いたのさ。あいつは、妙子さんと一緒にちゃんと僕達「イヤ、賊は出もしなければ、入りもしなかったということ

味が、少しも分らなかったからである。 小池助手は目をパチパチとしばたたいた。博士の言葉の意

て見て、

「目の前にいたといいますと?」

のだ」
のおいまうな場所があるものだよ。習慣の力だ。一つの道具がないような場所があるものだよ。習慣の力だ。一つの道具が世の中には、すぐ目の前に在りながら、どうしても気の附かかし、どう考えてもその外に手品の種はないのだ。小池君、「今に分る。ひょっとしたら僕の思い違いかも知れない。し

小池助手は益々面喰った。聞けば聞く程訳が分らなくなる

るまでは、具体的な表現をしない人であった。よく知っていた。宗像博士は、その推理が確実に確かめらればかりである。しかし、彼はこれ以上訊ねても無駄なことを

玄関へ駈け込んで行った。や、博士は自らドアを開いて自動車を飛び出し、風のようにやがて、車が規定以上の速力で、川手邸の門前に着くや否

していた。と凭れたまま、ものを考える力もなくなったように、茫然とと凭れたまま、ものを考える力もなくなったように、茫然と客間に入って見ると、川手氏は、そこの長椅子にグッタリ

妙子さんの部屋の前まで来ると、博士はドアの把手を廻し気抜けしたように立上って、博士と小池助手の後につづいた。23. 川手氏は、異議も唱えなかった代り、さして熱意も示さず、「十つ見落していたものがあるんです」

を云っているのであろう。ったあとの部屋へ、誰が鍵なぞかけるものか。博士は一体何と、落胆の溜息をついた。既に妙子さんが誘拐されてしまたらなあ」

る。まま、その上に腹這いになって、川手氏に話しかけたのでありゴロリと横になった。そして、不作法にも、モーニングのみ、昨夜まで妙子さんの寝ていた大きな寝台の上に、いきなー部屋に入ると、博士は次の間を通り越して、寝室に飛び込

になりました_ 「御主人、このベッドはまだ新しいようですね。いつお買い

の男はどうしたのだ、 っけにとられて、 余りにも意外な博士の態度や言葉に、川手氏はますますあ 急には答えることも出来なかった。 気でも違ったのではないかと、 怪しみ 一体こ

ı,

さえした。

博士は駄々ッ子のように繰返す。「エ、いつお買入れでした」

けさせたのです」 のですから、 「つい最近ですよ。以前に使っていたのが、急にいたんだも 四日程前に、 家具屋にあり合せのものを据えつ

た髭面の男が、 所を指図したのですが、何でも左の目にガーゼの眼帯を当て んでしたかね。たしかにその家具屋の店のものでしたか」 「サア、そいつは……。 しきりと何か云っていたようです。 わしは丁度居合せて、据えつける場 無論見知

「ウン、そうでしょう。で、それを持込んで来た人夫をごら

たことがあるのだ。嘗て雪子さんの死体を入れた陳列箱を、 ではなかったか。 衛生展覧会へ持込んだ人夫の頭が、丁度それと同じ風体の男 がないだろうか。我々はどこかで、同じような人物に出会っ アア、左の目にガーゼを当てた男。読者は何か思い当る所

らぬ男ですよ」

「オオ、やっぱりそうだったか」

仰向きになって、ベッドの裏側を調べていたが、突然、恐ろりますの僅かの隙間に這い込むと、自動車の修繕でもするように、 博士は唸るように云うと、ベッドから降りて、今度はその 恐ろ

しい声で呶鳴り出した。

らんなさい。彼奴の手品の種が分りましたよ。アア、なんと「御主人、僕の想像した通りです。ごらんなさい。ここをご いうことだ。 今頃になって、 やっとそこへ気が附くなんて…

||手氏と小池助手は、急いでベッドの向側に廻って見た。

「どこですか」

「ここだ、ここだ。ベッド をもっと壁から離してくれ

ここに仕掛けがあるんだ」

身が現われ、博士はそのまま起き上って、 が、すると、その下から仰向きに横たわっている博士の上半 いたベッドの側面を指し示した。 二人はいわれるままに、ベッドを押して、壁際から離した 今まで壁に接

い箱のようになっています」 「ここに隠し 蓋があるんです。 ホラネ、 これを開けば中は広 -24

が開いた。つまり、ベッドのクッションの部分を、上部の三 は巧妙な隠し戸になって、幅一尺、 シーツをめくり上げて、 ベッドの側面を強く圧すと、それ 長さ一 間 程 の、 細長

分の一程の、 頑丈な箱のように作られているのだ。 薄い部分にとどめて、その下部は全体が一つの 無論 人間が潜 ĥ

ためだ。その広さは二人の人間を隠すに十分である。 「巧く造りやがったな。 外から見たんでは、 普通のベ

ッドと

ちっとも違やしな 小池助手が感心したように叫んだ。

うであったが、 よく見れば、 普通のベッドよりは、 しかし、 その側面には複雑な襞のある毛織物 いくらか厚味があるよ

一寸見たのでは少しも分らないように出来ていた。。。、巧みに錯覚を起させるようなカムフラージュが施され、

に違いない。横取りして、予め造らせて置いたこの偽物を持ち込んだの横取りして、予め造らせて置いたこの偽物を持ち込んだの恐らく、復讐鬼は、家具屋から運ばれる途中で、ベッドを

この中に隠れていたのでしょうか」「すると、これが運び込まれた時から、あいつは、ちゃんと

は、しょ。川手氏が、もう驚く力も尽き果てたように、投げやりな調

ていたに違いありません。お嬢さんは、それとも知らず、悪ません。いずれにせよ、昨夜は、早くからこの中に身を潜め「そうかも知れません。 或 はあとから忍び込んだのかも知れ子で訊ねる。

博士は無慈悲な云い方をした。魔と板一枚を隔てて、ここへお寝みになったのです」ていたに違いありません。お嬢さんは、それとも知らず、悪

うんことうのたけに、るほこんでしてのようないましている。「そして、あいつは真夜中に、そこから忍び出し、あなたを

っていたのです」。自分もここへ入って、逃げ出す時刻の来るのを、我慢強く待あんな目にあわせた上、お嬢さんをこの箱の中へ押し込み、

「では、今朝になってから……」

せん」
て、お嬢さんを抱いて、ここから逃げ出したのに違いありまて、お嬢さんを抱いて、ここから逃げ出したのに違いありまです。賊はその間に、廊下や玄関に誰もいない折を見すましから、ここは開けっ放しにして、庭の捜索などやっていたのさんとが、この部屋の中に隠れているとは思わないものです「そうです。僕達は非常な失策をしました。まさか賊とお嬢

「しかし、逃げ出すと云って、どこへですか。一歩この邸を

走ることは出来ますまい。それに、刑事さん達も、まだ門の出れば、人通りがあります。まさか明るい町を、女を抱いて

──川手毛が舟こ客うな本で支引して。外に見張りをつづけていたんだし――」

川手氏が腑に落ちぬ体で反問した。

つ為めにですね。しかし……」は、まだ邸内のどこかに潜伏しているんじゃないか。夜を待があったのかも知れません。イヤ、ひょっとすると、あいつ方では、この二重の包囲を脱出する、何か思いもよらぬ計略「そうです。僕もそれを考えて安心していたのですが、賊の

「だが、妙子はどうして救いを求めなかったのだ」博士も確信はないらしく見えた。

え切った目で宗像博士を見つめた。 川手氏はハッとそこへ気づいたらしく、真青になって、脅

「妙子はわしと同じように猿轡をはめられていたのでしょう ユラ

か。それとも……」

ただ御無事を祈るばかりです」ないのですから。しかし、お嬢さんの生死は保証出来ません。れなかったことは確かですよ。どこにも、血痕などは見当ら

「何とも申せません。しかし、少くとも無残な兇行が演じら

博士は正直に云った。

んでは消えて行った。れている光景や、毒薬の注射をされている有様などが、浮かれている光景や、毒薬の注射をされている有様などが、浮か川手氏の物狂わしい脳裏を、妙子さんが賊の為めに絞殺さ

「若し邸の中に隠れているとすれば、もう一度捜索して下さん。ルディーネース

「僕もそれを考えているのです。しかし、念の為めに、門前る訳には……」

に見張りをしている刑事に、よく訊ねて見ましょう。まだ二

人だけ私服が居残っている筈です」

助手と川手氏とが、 そういうと、博士はもう部屋の外へ走り出していた。 慌しくそのあとにつづく。 小池

掃除人夫

はなかったですか」 何か大きな荷物を持った奴が、ここから出たという様なこと ふかしながら、ジロジロと町の人通りを眺めていた。 「君、その後、不審な人物は出入りしなかったでしょうね。 門前に出て見ると、背広に鳥打帽の目の鋭い男が、 煙草を

博士がいきなり訊ねると、刑事は不意を打たれて、目をパ

チパチさせた。

為めに見張りを命ぜられていたのだから、 邸内に潜んでいて、逃げ出すようなことがあってはと、念の この刑事は、早朝邸内の大捜索が終ったあと、万一犯人が 若し不審の人物が

「イイエ、誰も通りませんでした。あなた方の外には誰も」 刑事は、宗像博士が彼等の上役中村捜査係長の友人である

出入りすれば、見逃す筈はなかった。

ことを、よく知っていた。

間違いないでしょうね。本当に誰も通らなかったのですか」 博士は妙に疑い深く聞き返す。

決して間違いありません。僕はその為めに見張りをしてい

たのです」 刑事は少し怒気を含んで答えた。

ませんよ。彼等は皆外から入って来て、 しかし、犯人がそういうものに変装して逃げ出すことは出来 いのですか。それは、 「エ、何ですって? そういう連中まで疑わなければならな 例えば新聞配達とか、郵便配達とかいうようなものは?」 郵便配達も、新聞配達も通りました。 用事をすませると、

すぐ出て行ったのですからね」 「しかし、念の為めに思い出して下さい。その他に外から入

ったものはなかったですか」

たよ。 掃除人夫です。塵芥車を引っぱって、塵芥箱の掃除に来まし りに、ジロジロと博士を見上げ見下していたが、 か思い出したらしく、いきなり笑い出しながら、 ならないのですか」 「オオ、そういえば、まだありましたよ。ハハハハハハ 刑事は、何というつまらない事を訊ねるのだと云わぬ ハハハハハハハ、掃除人夫のことまで申上げなければ やがて何事 ばか -26-

博士は刑事の揶揄を気にもとめず、「イヤ、大変参考になります」 生真面目な表情で答え

のですか」 「で、その塵芥箱というのは、ここから見えるところにある

方へ曲って行きましたから、 のでしょう 「イヤ、ここからは見えません。掃除人夫は門を入って右の 多分勝手元の近くに置いてある

「それじゃ、君は、 そこで掃除人夫が何をしていたか、

も知らない訳ですね」

「エエ、 知りません。 僕は掃除人夫の監督は命じられていま

せんからね

ドクドと訊ねているのだと云わぬばかりである。 刑事はひどく不機嫌であった。何をつまらないことを、 昨夜の徹夜 ク

で、神経がいらだっているのだ。

「で、その人夫は、ここから又出て行ったのでしょうね」

塵芥車と昨夜の犯罪とに、どんな関係があるというのだろう。 「無論出て行きました。塵芥を運び出すのが仕事ですからね」 博士は我慢強く、 掃除人夫のことにこだわっている。 一 体

゙その塵芥車には蓋がしてあったのですか」

゙゙サア、どうですかね。 多分蓋がしてあったと思います」

「人夫は一人でしたか」

「二人でした」

根掘り葉掘り訊ねるのか、その意味がおぼろげに分って来た ただならぬ不安の色が現われた。博士がなぜこんなことを、 そこまで問答が進むと、仏頂面で答えていた刑「どんな男でしたか。何か特徴はなかったですか」 面で答えていた刑事の顔に、

を思い出したらしく、 今度は真剣な調子で答えた。

のだ。彼は暫らく小首をかしげて考えていたが、

鳥打帽を冠って、 なガーゼの眼帯を当てた四十ぐらいの大男でした。二人とも いました。もう一人は、 「一人は非常に小柄な、子供みたいな奴で、黒眼鏡をかけて 薄汚れたシャツに、カーキ色のズボンをは アア、そうだ、どっちかの目に四角

それを聞くと、 小池助手はハッと顔色を変えて、 今にも掴

ていたと思います」

みかからんばかりの様子で、 刑事を睨みつけたが、 宗像博士

は別に騒ぐ色もなく

「君は犯人の特徴を、 と穏かに訊ねた。 すると、 中村君から聞いていなかったのですか」 刑事の方が真青になって、 俄か

に慌て出した。

れた奴は、 「そ、それは聞 黒眼鏡をかけた小柄な男だったということは いていました。アトランチス・カフェへ現わ 聞

いていました。しかし……」

「そ、それも、 「それから、 衛生展覧会へ蝋人形を持込んだ男の風体は?」 今、 思い出しました。 左の目に眼帯を当てた

奴です」

リじゃありませんか」 「すると、二人の掃除人夫は、犯人と犯人の相棒とにソック

出す奴ばかり見張っていたものですから。 れに、あいつらは外から入って来たのです。 しかし、まさか掃除人夫が犯人だなんて、…… ……偶然の一致じ 僕は中から逃げ ż -27-

ゃないでしょうか」 刑事は、 ひたすら自分の落度にならないことを願うのであ

った。

やがてそれ

こを逃げ出し、 妙子さんの自由を奪って、どこかへ隠して置いて、 と考えられないこともない。今朝あなた方が邸内を捜索して は急いでそれを確かめて見なければならないのです。犯人は ったのですからね いる間に、 「偶然の一致かも知れない。そうでな 犯人がひとりで逃げ出すような隙は、 改めて妙子さんを運び出す為に戻って来た、 いかも 知 れ な いくらもあ 独りでこ

「隠して置いたといって、お嬢さんを塵芥箱の中へですか」

塵芥箱の塵芥の中までは探さなかったのですからね。 飛なことを考える奴です。それに、 突飛な想像です。 しかし、 あいつはいつも、 我々は今朝の捜索の時、 、思い切って突 サア、

緒に行って、調べて見ましょう」

いだ。 人々は博士のあとに従って、 博士と刑事のあとから、 門内に入り、勝手口の方へ急 青ざめた川手氏と小池助手と

がつづく。

いてある。 問題の塵芥箱は、炊事場の外の、コンクリート塀の下に置 黒く塗った木製の大きな箱だ。 これなれば、 人 間

一人十分隠れることが出来る。 博士はツカツカとその塵芥箱の側に近づいて、蓋を開いた。

池君、 「すっかり綺麗になっている。 一寸見てごらん」 だが、 あれはなんだろう、 小

のが落ちている。 たその底に、少しばかり残った塵芥に混って、 云われて、 小池助手も箱の中を覗き込んだが、ジメジメし 四角な白いも

「封筒のようですね

手紙が入っているらしい。 見覚えのある廉封筒だ。 彼はそういいながら、 宛名も差出人もないけれど、 手を入れて、拾い上げた。どこやら 中には

「中を見てごらん」

士の指図に従って、 小 池助手は封筒を開き用箋を取出

「オヤ、ここにインキで指紋が捺してあります」

簡単な文章の終りに、署名のかわりのように、

ッキリと

つの指紋が現われているのだ。

嬢さんはここに隠してあったのです」 「やっぱりそうだ。川手さん、僕の想像した通りでした。お 博士は急がしく例の拡大鏡を取り出して、その上に当てた。

そこには、あのお化けのような三重渦状紋が、

用箋の

か

らニヤニヤと笑いかけていたのである。

小池助手が、気を利かして文面を読み上げた。

「川手君、 俺の字引に不可能という文字はない のだ。

ずいぶ

れば、俺も二重の妙案をひねり出すばかりさ。 ん厳重な警戒だったね。しかし、君のほうで二重の警戒をす

ながら、ベッドと塵芥箱に気附かなかったとは、名探偵の名折宗像大先生によろしく伝えてくれ給え。あれほど捜索をし れですぜと伝えてくれ給え。 尤 も俺は誰しも見逃しそうな盲

点と云う奴を利用したんだがね。

み上げて来る。 恐ろしい場所で、 子にはいつか逢えるよ。一つ探して見たまえ。そして、 な顔をするか。それを思うと、俺は心の底からおかしさがこ 君はとうとう一人ぼっちになってしまったねえ。だが、妙 川手君、 君が娘の無残なむくろと対面した時、どん これが真の復讐というものだぜ。今 ある

川手氏の目が、 った。 助手は途中で、幾度も朗読をやめようかと思ったが、 先を先をと促すものだから、 やっとのことで

い知るがよい」

は心理学者ですよ。 完全に敗北しました。だが、何という恐ろしい奴だ。あいつ 「川手さん、何と云ってお詫びしていいか分りません。僕は あいつのいう通り、 僕達は盲点に引っか

々と逃げ去った腕前は、ゾッと怖くなる程です。かったのです。それをちゃんと予知して、少しも騒がず、悠

命をかけても、必ずあいつをやッつけます。やッつけないでそして、僕はあいつを捉える迄は、この戦いをやめません。いずれにせよきっとその隠し場所を発見してお目にかけます。恐らく、もう生きてはいらっしゃらないかも知れませんが、しかし、僕はこの恥辱を雪がねばなりません。お嬢さんは

寧ろ我れと我が心に誓うもののように、烈しい決意を示すの宗像博士は、満面に朱を注いで、川手氏にというよりは、

おくものですか」

であった。

お化け大会

それから又十分ほども後であった。頃、警視庁の中村捜査係長が、おくればせに駈けつけたのが、「宗像博士が、塵芥車のトリックを発見したのが八時三十分

云うまでもない。 察署、派出署、交番などに、犯人逮捕の指令が飛んだことはために、すぐさま警視庁に引返したが、あらためて全市の警中村警部は、宗像博士から委細を聞き取ると、捜査手配の

である。だが、彼等が逃出してから既に一時間、何しろ魔術上、塵芥車という大きなお荷物があるのだから、発見は容易今度は犯人と共犯者の風体もよく分っているのだし、その

の塵芥車でも発見するのが関の山であろう。ない。とすると、折角の非常指令もあとの祭である。空っぽを変え、妙子さんを攫って、姿をくらましてしまったに違い筈はない。恐らくは、邪魔な塵芥車はどこかへ捨てて、風体除人夫の姿で塵芥車を引っぱって、ノロノロ町を歩いている師のような素早い奴のことだから、まさか今頃まで、元の掃

布区内でも、市中とも思われぬ場末めいた感じで、附近には から電話があって、塵芥車が発見されたという知らせである。 場所は、川手邸から三町とは離れていない、神社の森のな 場所は、川手邸から三町とは離れていない、神社の森のな まさか森の中へ捨てた訳ではあるまい。一体どうして、ど こへ運び去ったというのであろう。 車を呼ぶまでもなく、教えられた道を、走るようにして、ど こへ運び去ったというのであろう。 案の定、それから三十分程もすると、主人を慰める為に川 案の定、それから三十分程もすると、主人を慰める為に川

れ、側に制服の若い警官が立っていた。去られたということで、そのあとに目印の小さな杭が立てら、神社の森の中へ入って見ると、塵芥車はもう警察署へ運び広い空地などもあり、子供達の遊び場所になっている。イ区内でも、 市中とも思れれぬ場末めした原して、附近には

じきあとから、ここへ来ると云っていました」「警視庁の中村警部から聞いてやって来たのです。中村君も「博士は名刺を出して、警官に話しかけた。

「ア、そうですか。お名前はよく承知して居ります。今度の

事件には御関係になっているんだそうですね」

丁寧な口を利いた。 若い警官は、 有名な民間探偵の顔を、まぶしそうに見て、

「で、塵芥車の外に何か発見はありませんでしたか」

うことですが、そういう様子も見えません。狭い境内のことは分りませんし、被害者をどこかへ隠したのではないかとい 中や縁の下なども調べたのですが、これという発見もありま ですから、土を掘ったりすれば、すぐ分る筈ですし、社殿の 何の手掛りもありません。ごらんの通りの石ころ道で、 「さい前から、 一通りこの森の中を捜索したのですが、 足跡 全 く

「君一人でお調べになったのですか」

せんでした」

中村君が来られたら、そうお伝え下さい」 「イヤ、有難う。僕はこの辺を少しぶらついて見ますから、 イイエ、 署の者が五人程で手分けをして、調べたのです」

どこという当てもなく、ブラブラと歩き出した。 博士は警官に挨拶をして、小池助手と一緒に神社を出ると、

「オヤ、小池君、あすこに見世物が出ているようだね」 暫らく行くと、博士がそれに気附いて、助手を顧みた。

う お化け大会と書いてあります。例の化物屋敷の見世物でしょ 「エエ、そうのようですね。のぼりが立ってますよ。アア、

化物屋敷なんて随分久し振りだ。「ホウ、妙なものが出ているね。 かるのかねえ」 東京にもこんな見世物がか 行って見ようじゃない か。

まい」

「近頃なかなか流行しているんです。

昔は化物屋敷とか八幡

称して、色々新工夫をこらしているそうです」 の藪知らずとか云ったようですが、この頃はお化け大会と改

話しながら歩く内に、二人は大きなテント張りの小屋掛け

の前に来ていた。

それには、ありとあらゆる妖怪変化の姿が、 て来そうに、物恐ろしく描いてある。 て、その間から、 い飾りつけである。上部にはズラッと毒々しい絵看板が並び、 小屋の前面は、 狐格子の辻堂などが覗いている。さも物凄い格子の辻堂などが覗いている。 張り子の岩組みと、一面の竹藪になってい 今にも飛びつい

た木戸番の若者の胸から上が見えている。 オンを当てて、嗄~声をふりしぼり、 前には黒山の人だかりだ。その群衆の頭の上に、 上を呶鳴っている。 夢中になって客寄せの 若者は口にメガフ 台にのっ

手な字で、何かゴタゴタと書いてある。 段々近づいて見ると、 木戸の上に、 大きな貼紙をして、 下 -30-

大懸賞

賞金五円を贈呈致します。 れしお客様には、入場料金を全部返却の上、 本お化け大会入口より出口まで無事御通過なさ

を出していたんじゃ、 「オヤ、 変な見世物だねえ。五十銭の入場料で、 興行主は損ばかりしていなけれゃなる 五円の賞金

が、 博士が思わず独言のように云うと、 それを聞きつけて、話しかけた。 群衆の中の一人の老人

るでしょう。みんな中途で引返すんでさあ。ラ、ごらんなさい。入口からああしてゾロゾロ見物が出て来「それが、そうじゃねえんですよ。座元は丸儲けでさあ。ホ

あっしゃ、昨日から気をつけて見ているんだが、無事に出るのです」

ないのに、ベラベラと喋るのだ。 江戸っ子らしい老人は、ひどく話好きと見えて、聞きもし

「で、お爺さんは中へ入って見ないんですか」

って見せた。 小池助手がからかい顔に訊ねると、老人は顔の前で手を振

ように、 すると、宗像博士は何を思ったのか、その言葉を引きとるがらね。何なら、お前さん方御見物なすっちゃどうだね」「御免、御免、五貫も出して胸の悪い思いをするこたあねえ

と、笑いもしないで云うのである。「どうだ、小池君、一つ入って見ようじゃないか」

「エ、先生お入りになるんですか」

の顔をまじまじと見つめた。したんじゃないかしら。小池助手はあっけに取られて、博士供みたいにお化けの見世物を見たがるなんて、先生はどうか、犯人の捜索はどこへ行ったのだ。それを捨てて置いて、子

て来たまえ」 「少し思いついたことがあるんだよ。……マア、黙ってつい

戸口の方へ歩き出していた。博士はそう云ったかと思うと、群衆を押し分けて、もう木

立上る骸骨

そうというのではないかしら」「若しかすると、先生はこの化物屋敷の中で、妙子さんを探意味もなく見世物なんかへ入る人ではなかった。ありそうであった。博士は非常に実際的な規則正しい性格で、に、呆気にとられたが、ふと気がつくと、それには何か訳がに、呆気にとられたが、ふと気がつくと、それには何か訳がい、地助手は、名探偵とも云われる人の、余りの子供らしさ

とは出来まい、どちらの方角も町続きだから、やがてはげし暗い早朝とは云え、まさか若い女を抱いて遠くまで逃げるこ当っているかも知れない。妙子さんを運んだ塵芥車はすぐ近との好きな、芝居がかりの殺人鬼のことだ。 或 はこの想像がこの想像が、小池助手をギョッとさせた。見せびらかすこ

ない。という風に考えて来ると、 くなる人通りの中を、怪しまれないで逃げおおせるものでは いかに突飛に見えようとも、

博士の想像は、 博士が木戸へ近づいて入場料を払うと、 どうやら当っているらしくも思われる。 木戸番の若者は妙

れが無事に通り抜けたという証拠になるのですよ。二枚揃 「中で紙札を二度渡しますからね。出口で返して下さい。そ つ

な笑い顔で注意を与えた。

てなくちゃいけませんよ」

場内に入ると、夜も同 とは云え、 二人はそれを聞き流して木戸を入って行った。テント張り 天井はすっかり厚い黒布で蔽ってあるので、 然の暗さであった。 その薄暗い中に、

る。 或は右に或は左に、或は往き或は戻り、やっと人一人通れ見通しも利かぬ竹藪の迷路が続いているのだ。 る程 どではなくても、 の細道が、 何町となくつづいている。 往きつ戻りつの道の長さは驚くばかりであ 全体の面積はさほ

いを繰り返すことがない。出鱈目に歩くよりも、結局はずっそうすると、仮令無駄な袋小路へ入っても、二度と同じ間違 の手を、藪の垣から離さないで、どこまでも歩いて行くんだ。 までもどうどう廻りをするばかりで、果しがないからである。 かと迷った。若し間違った道に入り込んでしまったら、いつ 道が分れている箇所 迷路の歩き方を知っているかい。それはね、右なら右 に出ると、小池助手はどちらを選ぼう

グングンと歩いて行く。 博士は説明しながら、 右手で竹藪を伝って、先に立って、 小池助手は、 成程そういうものかな

と早く出られるのだよ」

あと思いながら、そのあとを追うのである。

けで、 なのだ。 部分が見えるけれど、 ら、痩せ細った手がニューッと出て、それから徐々に、 かな隠し電燈の光を受けて、或は横わり、或は佇み、或は蹲ぎ ない。何かしら、ゾーッとするような、えたいの知れぬ物体 すと、何とも形容の出来ない、鼠色のいやらしいものが地上 た大きなものを踏んづけるのである。ギョッとして目をこら めどもなく流れ出すという、念の入った仕掛けもあった。 のように片目のつぶれた女の幽霊が現われ、見ていると、 まり、或は空からぶら下っていた。あるものはからくり仕掛 に横わっているのだ。どうやら顔らしい部分や、手足らしい のまんまるに飛び出した目から、タラタラと真赤な血が、 或時はまた、見物は闇の通路で、何かしらグニャグニャし 長い竹藪の間、々には、 ゆっくりと動いていた。 無論人間ではない。 ありとあらゆる魑魅魍魎 。 古池になぞらえた水 溜の中か と云って動物でも

スーッとその肩に負ぶさって、 で笑い出す仕掛けもあった。 ある場所 では、 真に迫った首吊り女が、 両手でしがみつき、 見物の 頭 の上から、

かった。よく見ていると滑稽でこそあれ、心から怖いというていたとしても、屈強の男を走らせる程の恐怖は感じられな ようなものではなかった。 だが、それらの人形が、 どれ ほ ど巧みに、いやら

うね」 ありゃ 先生、 な つまらないじゃありませんか。ちっとも怖くなんか どうしてこんなものを見て逃げ出すんでしょ

「マア、終りまで見なければ分らないよ。それに僕達はただ ものがあるんだ。

人形一つでも見逃す訳には行かないよ」 慰みに入って来たんじゃない。 大事な探し

藪の迷路を抜けて、黒板塀のようなものに突き当った。 に出くわすとは、 立止り立止り、歩いている内に、 やがて竹

二人はそんなことを低声に云い交しながら、お化けや幽霊

小さな潜り戸がある。 「オヤ、また袋小路かな。イヤイヤ、そうじゃない。ここに 開けてお入りくださいと、貼り紙がし

てある」

る。 如何にも、 黒板塀の上に、 ひどく下手な字の貼り紙が見え

て入るというのは、 「そうですね。一人きりだったら、 「君、少し凄くなって来たじゃないか。真暗な中で戸を開け 何だか気味の悪いものだね」 一寸いやな気持がするか

てこけおどしな真似をするんだろうと、 しかし、二人はまだ心の中ではクスクス笑っていた。なん おかしくて仕方がな

も知れませんね」

黒布が張ってあるらしく、針の先程の光もささぬ如法暗夜でがあるばかりであった。天井も左右の壁も、板を重ねた上に ある。 は別に恐ろしいものがいる訳ではなく、ただ文目もわかぬ闇 たりした。造りものの化物などよりは ネオン・サインのように鮮かな青や赤の環が現われたり消え かった。 博士を先に、二人は戸を開いて中に入った。だが、そこに 目の前 に何かムラムラと煙のようなものが動 この網膜のいたずら いたり、

「こりゃ暗いですね。歩けやしない」

行った。 二人は手を壁に当てて、 足で地面をさぐりながらあるいて

く人間の心理を掴んでいた」 界との縁を断つ仕掛けなんだ。そうして置いて、全く別の夢 通路が、 の世界を見せようというのだね。 「昔パノラマという見世物があってね、そのパノラマへ入る やっぱりこんなだったよ。 パノラマの発明者は、 この闇が、 つまり現実世 うま

そうではないらしい。何かが蹲まっているのだ。 感じられた。やっぱり網膜のいたずらかと疑ったが、 手さぐりで五間程も進むと、左側の闇に、何か白いものが どうも

二人の方へ突き出した。その手に紙の束を持っているのが、 骸骨がスーッと立上ったのである。そして、いきなり右手を 人間が縫。包を着ているのでもない。本物の骨格模型である。 有様は、怖いというよりも、 のように、白い骨が浮き上って、ポツンと胡坐をかいている 「ナアンだ。骸骨ですよ。骸骨が胡坐をかいているんですよ」 だが、二人が立止って見ているうちに、妙なことが起った。 何も見えぬ黒暗々の中に、この世のたった一つの生きもの 小池はその側に近づいて、骨格に触って見た。絵ではない。 異様に謎めいて不気味であった。

それが木戸番の云った証拠の紙札であることは、 があって、遠くから声を聞かせているのに違いない。 妙な嗄れ声で笑っているのだ。どこかにラウド・スピーカ すぐに分

噛み合した。

と同時に、

骸骨の口が

゚パックリと開いて、

カチカチと歯を

どうやら見分けられた。

の方が、却って不気味な程であった。

-33-

わばこれが第一の関所であった。 を受取る勇気がなくて、逃げ出してしまうかも知れない。 ったが、気の弱いものは、黒暗々の中で、 つかも知れない。 謂 骸骨の手からそれ

はじめた。 ずつそれを受け取って、 博士と小池助手とは、 さらに前方への手さぐり足さぐりを 無論怖がるようなことはなく、一枚

道はない。 それから少し行くと正面 、行き止りになっているのだ。 :の壁に突き当った。 右にも左にも

あとへ戻るのかしら」

い板塀のようじゃありませんか」 「その辺に、又戸があるんじゃない でしょうか。 やっぱり黒

「オヤッ、

「そうかも知れない」

「アア、あった、 博士は正面の板をしきりとなで廻していたが、間もなく、 あった。ドアになっているんだよ。 押せば

開くんだ」

拍子に、何かしらマグネシュウムでも焚いたような、 されてしまった。 一瞬で、ドアはバネ仕掛けのように、彼の鼻先にピッタリ閉ラした光線が、パッと小池助手の目をくらませたが、それも と呟きながら、そのドアを押して中へ入って行った。 ギラギ その

かない。 ことか、ドアは誰かがおさえてでもいるように、びくとも動 博士を追って中へ入ろうと、押しこころみたが、どうした

ませんか」 「先生、戸が開かなくなってしまいました。そちらから開き

その声がドアを漏れて幽かに聞えて来たが、 博士の方では

> 中へ放り出されて、 それどころではなかった。 クラクラと眩暈がしそうになっていたの 真暗闇から突然太陽のような光の

らしのない恰好で立っている一人の男が現われて来た。 行くように、 うになって、何が何だか少しも分らなかったが、 らくは闇と光との転換の余りの激しさに、 て行くと、 何かしらギラギラと目を射る、非常な明るさであった。 あれは俺じゃないか」 その向うに、目を大きく見開いて、 目の前のギラギラした後光みたいなものが消え 網膜 か、靄が薄れていい。 口を開

違わない男であった。 髯といい、 した顔になっていたが、眼鏡といい、口髭といい、三角の顎 ギョッとして見直すと、その男はもう他所行きの モーニングといい、 宗像博士自身と一分一厘 取りすま ŧ

じゃない 者を買被ったのであった。の闇の中を歩いて来ただけに、 場所が化物屋敷の中だけに、そして、今の今まで、 何 だか魔法にかけられたような、 かと怪しまれるような、 博士はついこの見世物の考案 一種異様の心持であった。 それとも気でも狂ったの 文字通り

は、 少し落ちついて、よくよく見れば、 大きな鏡の壁に過ぎないことが分って来た。 博士の正面 にこ あるもの

世物は普通の化物屋敷なんかと違って、なかなか味をやりお「ナアンだ。鏡だったのか。しかし、それにしても、この見

仕掛けが、しつらえてあったのだから。この妙な小部屋には、まだまだ博士をびっくりさせるようなだが、ナアンだ鏡かと、軽蔑するのは少し早まり過ぎた。

側がやっぱり鏡で、そこに実物の五倍ほどもある大入道のよとそこにも同じ自分の姿があった。後を振返れば、ドアの裏ヒョイと右を向くと、そこにも博士自身がいた。左を向く

うな博士の、

あっけに取られた顔が覗いていた。

も不思議な魔法の部屋なのである。 り六角筒の内面が、少しの隙間もなくすっかり鏡で張りつめい、その上下の隅々に電燈が取りつけてあるという、いとり六角筒の内面が、少しの隙間もなくすっかり鏡で張りつめい鏡であった。そして、博士を取りまく壁は不規則な六角形にばかりではないのだ。天井も一面の鏡であった。床も一面イヤイヤ、こう書いたのでは本当でない。鏡は四方にあっ

くと、 なり、二十四人になり、四十八人になり、じっと鏡の奥を覗 めたりして見せた。 波形をしていて、人の姿を一丈に引き伸ば 形の凹面鏡になっていた。 いう影を重ねて映っているのだ。 の面に互に反射し合って、一人の姿が六人になり、十二人に しかも、それらの鏡は、 ある部分は先にも記したように、 遙かの遙かの薄暗くなった彼方まで、
はる そして、それらの雑多の影が六角の各々人の姿を一丈に引き伸ばしたり、二尺に縮 またある部分は 必ずしも平面鏡ばかりではなかっ それを六倍すれば何千人、 実物を五倍に見せる円 恐らくは何百と 鏡の面 が複雑 な

われぬ不安定の感じであった。

の壁に影を投げるのである。更にその上に、天井と床とが、また各々に反射し合い、方々

に、赤ん坊のような驚異を感じないではいられなかった。物に動ぜぬ法医学者も、このすさまじい光景には、理窟ぬきめられたのは、全く初めての経験なのだ。世間を知りつくし、った。しかし、これ程よく出来た鏡の箱に、ただ一人とじこ博士はそういう鏡の部屋というものを、想像したことはあ

上げれば、同時に千人の手が上がり、歩けば同時に千人の足のように平べったい顔なども、幾十となく交っている。手をの中には、五倍の大入道の顔、胡瓜のような長っ細い顔、南瓜博士が笑えば、千の顔が同時に笑うのだ。しかも、それら

が動くのだ。

井戸の底まで、 それら二 こちらを睨みつけている。 上も下も無限の彼方に続いていて、 でもしたような、 かぬ闇となって消えているのだ。 てぶら下っている博士が、下の方から見上げている。そして、 天井を見上げると、そこには逆立ちをした博士が、じっと 様の逆の姿が、 数限りもなく重なり合って、末は見通しも利 大地が消えてなくなったような、 無限の空にまで、 床を覗けば、そこにも足を上にし つまり、前後左右は勿論、 まるで大空に投げ出され 奥底知れぬ六角の 云うに云

博士はふと、こんな見世物を興行させて置くのは人道問題無限に走る外はないという、奇怪千万な錯覚が起るのだ。ためには、それらの何千という人々を、掻き分け押し分け、姿が無限に続いているのである。この恐ろしい場所を逃れるどちらを見ても、行き止りというものがなく、自分自身の

-3

だと思った。博士のような思慮分別のある中年者でさえ、 た

イヤ、泣き出すばかりでなく、 屋にとじこめられたなら、恐怖のために泣き出すに違いない。 まらない程の不安を感じるのだから、若し女子供がこの鏡 中には気が違ってしまう者も

あるかも知れ

な

らタラーリタラーリと膏 汗を流すではない 寄席の芸人が物真似をする、 無神経な蝦蟇でさえ、 いて、どことなく物凄い妙な口上が、耳元に浮かんで来た。 させた話を読んだことがあった。そして、それと関聯して、 博士は嘗て何かの本で、人間を鏡の部屋にとじこめて発狂 鏡に取りかこまれた恐怖には、 蝦蟇の膏売りの、滑稽なようで か。 全身か

卍。巴となって歩き廻るのだ。ホホイロンムサタスがグルグルと、大グラウンドでのマス・ゲームのように、 こかに出口はないかと歩き廻った。 る気はしなかった。大急ぎで六角の鏡の面に触りながら、ど 流石の宗像博士もこの恐怖の部屋には、そのまま佇んでい すると、千人の同じ博士

開かないし、出口も見つからぬ。 めて置こうとでもいうのだろうか。 何という残酷な仕掛けだろう。 見物が気の違うまで閉じこ 入口のドアは閉まったまま

う、 けがしてあるのだ。 のドアには、一人だけ中に入ると、あとから見物が入らぬよ さい前ドアが素早く閉まったのには理由があ ある時間、 押しても引いても開かなくなってしまう仕掛 そして、 一人ぼっちでこの魔の部屋 つ たのだ。 の恐 あ

出口がどこにあるんだか分らない。 こいつは気味が悪いよ。 そのドアをもう一度押し 鏡の部屋なんだ。 それに

怖を味わせようという訳なのだ。

「どうしても開 博士は外の闇 かないんです。 の中にいる小池助手に、 さっきから押しつづけている 大声に呼びかけた。

んですけれど」 、君ここへ入っても驚い ちゃい け な いよ。 僕 は 何

どこもかも鏡ばかりなんだ。この部屋には僕と同じ奴が千人 以上もウヨウヨしているんだぜ。 知らずに飛び込んだものだから、 ひどく面喰ってしまった。 そして、 僕と同じように、

と、奴らも口を開いて笑うんだ」 今物を云っているんだ。ハハハハハハハ、アア、僕が笑う

か。この戸はどっか狂ったのじゃないでしょうか。入口へ戻 って、人を呼んで来ましょうか」 気味が悪いですね。そして、出口が分らないの です

じゃ僕は先に出て待っているからね」 「アッ、開いた。開いた。君、やっと鏡 の壁が口を開 いたよ。 -36-

は例によって、黒暗々の闇である。して、人一人通り抜けられる程の 如何にも、六角形の一つの面が、 隙間が出来た。 機械仕掛でクルッと廻転 その向う側

って来たら、こんな不気味な部屋へ一人残して置かない 緒に向うへ出ようと考えたからである。 博士はそこを出ようとして、躊躇した。若し小池助手が入

「僕の方は開きませんよ。どうしたんだろう」 しかし、 化物屋敷の考案者は、そこに抜かりが なかった。

しかし、 小池助手が入口のドアを、外からドンドンと叩く音がした。 いっかな開きはしないのである。

仕方がないので、博士は先に鏡の部屋を出て、 外の暗闇に

と同時に、 音を立て、 入ったが、 「先生、どこにいらっしゃるのです。開きましたよ。ドアが 自然に塞がされてしまった。そして、殆んどそれ 部屋の中から幽 すると、今まで開いていた隙間が、 かな小池助手の声が聞えて来た。 カタンという

仕方がない、暫くそこに我慢していたまえ」 「出口はここだ。しかし、自然に開くのを待つ外はないのだ。

開きましたよ」

大声に呶鳴るのであった。 博士は今出たあたりの壁をコツコツと叩いて聞かせながら、

轢死者の首

開いて、小池助手がフラフラと逃げ出して来た。 闇 の中に佇んで暫らく待っていると、やっと目の前の壁が

がして」 ってましたよ。そうでないと、今にも気が変になるような気 「驚きました。 ' 実にいやな気持ですね。 僕は半分は目をつむ

物凄くなるんだからね」

「なる程。

これじゃ、

み

んなが逃げて帰る筈だ。

進めば

進 ぞむ

ものである。そこに漂う何かしら隠微な魂が高い話を抑えつけの中を歩きだした。真の闇というものは、人の声を低くする 二人はボソボソと囁き交しながら、 またしても壁伝い に闇

囁き声にしてしまうものである。 少し驚いたでしょう。 だが、これはまだホン

て、

がおためですぜ。気絶なんかされちゃ困りますからね の序の口ですよ。本当に怖いのはこれからです。引返した方 闇の中から低い嗄れ声が響いて来た。恐らくは骸骨の場合

思わず立止った。 の先に真黒な奴が 踞 まってでもいるような気がして、二人は と同じように、どこかにラウド・スピーカーがあって、 が遠くから喋っているのであろうが、 闇の中だけに、 つい鼻 誰か

ていうのは、すこし卑怯じゃないか」 「ハハハハハハ、ひどくおどかすねえ。 それに、 帰れ帰れっ

「そうですね。人を喰ったものですね」

感じさせるのは、 こす側の人々であった。それに、肝腎の死体捜索という大目 ど、この二人は、不気味であればある程、却って好奇心をお 並々の見世物でなくて、 的があるのだから、場内を一巡しないでは意味をなさぬ訳だ。 気になるのであろうが、博士達は引返さなかった。 の経験で、これが世の常の化物屋敷でないことが分ったけれ 手探り足探りで歩く程に、 大多数の見物は、この辺でとどめを刺されて、 謂わば予期しなかった儲けものであった。 大人の二人にも、 やがて徐々にあたりがほの明る かなりのスリルを 愈々引返す 鏡 の部屋

くなって来た。

「また竹藪があるようだね」

ても鬱蒼 れ目があって、幅一間奥行二間ほどの、 がら辿って行く内に、ヒョイと右側を見ると、その竹藪に切 あった。その部分だけ薄青い電燈がついているので、 如何にも、 たる竹藪の細道であった。 黒布のトンネルのような通路を出ると、またし そこをガサガサ云わせな 藪に囲まれた空地が ハッキ

のようなものを着て、 そこに一人の女が大の字にしばりつけられてい リ見えるのだが、空地の真中に大きな十字架が建っていて、 両腕から乳の辺まで、 その胸の部分だけが、前に括り合わさ 肌が現われている。 る。 青い 獄衣

「磔刑人形ですね

そして、その鋒鋩が女の両の乳の下を、抉っている。 気を催すほどの、無残な有様であった。 ここに細叙することを憚るほどの、見るものはたちまち吐き の襷をかけて、長い鎗を左右から女の両腋につきつけている。 その十字架の両側には、チョン髷に結った二人の男が、 それは 繩

狐のように逆立て、 目は真赤であった。 女の美しい顔は、 唇はドス黒く見えた。眉をしかめ、 濃い藍色であった。恨めしげに見開 口を大きく開いて、 わめいている形相 目を いた の

物凄さ。

なしていることだろう。 出るような、聞くも無残な声で叫ぶのである。一度聞いたら、 男の手が動いて、 マイクロフォンとラウド・スピー 一月も二月も耳に残るような恐ろしい声で、わめくのである。 しかも、ここにも異様なからくり仕掛けがあった。二人の 何ということだ。 鎗の鋒鋩がグイグイとそこを抉った。 磔刑女は、ゾーッと歯ぎしりが カーを、 何と巧みに使いこ する

合った。 は胸が悪くなった。 お化や幽霊を怖がらなかった二人も、流石にこの生人形に お互の顔色が青くなっていることを認め

先生、 なんてひどい見世物でしょう」 早く通りましょう。 これでは見物が逃げ戻る筈です

ょ。

じゃないかな」 いつものお化け大会だぐらいに思って、 「管轄の警察の手落ちだね。こんなものを許すなんて。多分 よく調べなかったの

ŧ ものは知死期の痙攣に震え、あの死の恐怖、大手術の恐怖を、或ものは断末魔のうめきを立て、十本の指に空を掴み、ある 様々の空地があって、そこにありとあらゆる無残なもの、血腥たれからの長い竹藪の細道には、 或は右に或は左に、大小 ればならない。それらの内の、 生人形の塗料を光らせて、真に迫って、並んでいたのである。 する恐怖が、次から次へと、ほの暗い照明の中に、 まざまざと見物の目の底に焼きつけようとしてい いもの、一口で云えば、解剖学教室の最も怖ろしい光景に類 その光景の悉くを描写する事は、 、恐らく十分すぎるであろう。 最も手軽な一例を記すだけで 読者の為めに避けなけ たのである。 毒々しい ある

二本の鉄路が流れ出している。 死体ではない。六つ程に分れて転がっている死体だ。 の草原、今汽車が通過したばかりという心持である。 い女の死体が、転がっている。 左手にトンネルが魔物のような真黒な口を開き、 その線路と草原とのあちこちに、今轢断されたばかりの若 そこにはやや広い空地があって、背景は暗く繁った森林、 レー 無論それらは一つに ル の土台を除い その中から 連 て、 面

と、 れど、 しさ。 切り離された首だけが、見物に最も近い草の上に、チョコ レールも、青い草も血に染まっている。夫々の切口の 何かしら白いものを中心にした真赤な輪であった。 切口を土につけて立っていた。 藍色に青ざめているけ

顔の小皺の一本まで、生けるが如き生々しさ。生人形とはよ生人形というものは、いつの世、何人が発明したのであろう。本一本植えつけ、歯は本当の琺瑯義歯を入れるという、この桐の木に彫刻をして、胡粉を塗り、塗料を塗り、毛髪は一

くも名づけたものである。

はユラユラと揺れているかとさえ疑われた。 め巧みさで描き出していた。まだ反動が鎮まらないで、生首て、そこへ据わったばかりという心持を、どんな名画も及ば通過したばかり、そして、レールからコロコロと転がって来じっと目を閉じていた。アア、何という生々しさ。今汽車が轢死者の首は、美しい眉をしかめ、口を苦悶にゆがめて、

「先生、先生」

小池助手が青ざめた顔で、乾いた唇で、強く囁きながら、

博士の腕を捉えた。

あとは口に出すのも恐ろしいように、云い渋った。を見て下さい。こんな人形ってあるでしょうか。若しや……」「先生、僕の目がどうかしているんでしょうか。よくこの首

「そういえば、そうですね。しかし、僕はなんだか、本当のるものだと云っても、こんなに違う筈はないよ」いるんだが、少しも似ていないよ。生顔と死顔とは相好が変「妙子さんではないかというのだろう。僕もそれに注意して

はありそうだぜ」

ョロキョロと動いた。いたのである。涼しい黒目勝の目だ。その黒目が右に左にキいたのである。涼しい黒目勝の目だ。その黒目が右に左にキを裏書でもするように、生人形の首が、パッチリと目を見開小池助手がそこまで囁いた時であった。まるで、その言葉人間の首のような気がして……」

仕掛にしては、少し出来すぎている。 二人はギョッとして、一歩あとにさがった。例のからくり

出来なかった。顔は二人とも紙のように青ざめていた。者も、勇敢なその助手も、動悸の早まるのをどうすることも立てないでニヤニヤ笑ったのである。一瞬間、流石の法医学現われた。そして、笑ったのである。草原の上の生首が声をクムクと動いて、やがて、紫色の唇が開き、白い歯がニッと呆然と立ちすくんでいる二人の前で、生首の口辺の皺がム

て、首だけ出しているんだよ」「これは君、生きた人間だよ。若い女が土の中へ全身を埋めしかし、やがて、宗像博士は笑い出した。

「なる程考えたものだねえ。これ一つでも入場料だけの値打ら、大抵の見物は腰を抜かしてしまうであろう。り思い込んでいた轢死女の首だけが、ニヤニヤ笑うのを見たいるのであろうが、それにしても、何という突飛な、人騒が埋めて、身体が冷えぬような設備をして、そんな真似をして埋めて、身体が冷えぬような設備をして、そんな真似をして無論その外に考え方はなかった。恐らくそこに木の箱でも

手は何かしら、うしろに異様な物の気配を感じて、ハッと振轢死の場面を立去ろうと、二三歩あるいた時である。小池助まだ青ざめた顔で、乾いた唇で、そんなことを話しながら、はよっぽど変り者に違いありませんね」「僕はこんな気味の悪い見世物は始めてですよ。この興行主

,ると、線路の上に転がっていた、血みどろの腕が、まる

向

それが見る見る柵を越して、 ちらへ近づいて来るのが見えた。 で爬虫類ででもあるように、スーッと草原の上を這って、こ 通路の方まで這い出して来たの しかも、恐ろしいことには、

|ワアッ!|

である。

ではない。 面を這い出して来るなんて、どんな大人にも気味のよいもの からくり仕掛けと分っていても、 小池助手は思わず声を上げて、博士の肩にしがみつい 青白い腕ばかりが、 暗い地

すると、 又してもいつもの嗄れ声が、どこからともなく響

い て来た。

腕はお客さんに咬みつくかも知れませんぞ」 いと賞金はとれませんよ。だが、用心して下さい。 「お客さん、これが二枚目の紙札ですよ。これを持って出な 死びとの

束の小さな紙札が握られている。 又しても、陰気な脅し文句だ。見れば、死人の指には、一

だね」 れを受け取れば、 「なるほど、 なるほど。よく考えたものだねえ。 我々は完全に関所を通過したことになる訳 しかし、こ

を掴むと、その指から二枚の紙札を抜き取った。 博士はそんなことを呟きながら、 腰をかがめ て、 人 形

「なる程、

、大きな判が捺してあるね

い前のと同じように、二枚とも自分のポケットに納めた。 それからまた、幾つもの思い切って無残な場面を通りすぎ 博士は立上って、感心したように紙札を眺め ていたが、 さ

て、

さしもに長い竹藪も終りに近いところまで辿りついた。

本物の死体なんて、なかったじゃありませんか」 「先生、とうとうおしまいのようですね。しかし、どこにも

の中に、 小池助手は失望の面持である。あれだけ夥しい死びと人形 一つも本物が混っていないなんて、 却って不自然な

ような気さえした。

けひどく薄暗いじゃないか」 「だが、まだここに、何だか物々しい場面があるぜ。ここだ

博士はそこの柵の前に立って、じっと奥の方を見つめ てい

た。

て見通しである。その部屋一杯に、色褪せた萠黄の古蚊帳が荒屋が建っていた。六畳一間きりの屋内は、戸も障子もなく。 吊ってある。光と云っては、その蚊帳の上に下っている青い そこには、竹藪に囲まれ雑草の生い茂った空地に、一

かせぬ程の暗さである。 「なんだろう。蚊帳の中に何かいるようじゃないか」

カヴァーをかけた五燭

の電燈ばかり。

すぜ。アア、 「いますよ。よく見えないけれど、何だか裸体の女のようで 真裸体です。それでこんなに暗くしてあるんでサッ゚ルサビカ

すよ 「なにをしているんだろう」

の腕

杯流れています。 **朴流れています。血です。裸体に剥がれて、惨殺された女で「殺されているんですよ。顎から胸にかけて、黒いものが一**

惨殺された女で

「五体は揃っているようだね」

すよ

「エエ、そうのようです」 |髪は断髪じゃないかい|

蚊帳の中は殆んど見す

断髪ですよ」

肉づきのいい、若い女だね

が浮上って来た。 話している内に、 少しずつ目が慣れて、 蚊帳の中の女の姿

調べて見ましょうか」

「ウン、調べて見よう」

うな感じが、 二人は意味ありげな目を見交した。何かツーンと痺れるよ 小池助手の背筋を這い上った。

が古蚊帳の裾に手をかけると、 を踏み分けて、荒屋の上に上って行った。そして、先ず博士 二人は柵を越えて、無言のまま中に入り、膝を没する雑草 それをソッとまくり上げた。

底の人魚のように横わっていた。二人は這うようにして、そ 青い豆電燈 の生々しい生人形の側へ近づいて行った。 荒屋 の 縁側に上って、古蚊帳をまくると、天井に仕掛けた 「の幽かな光を受けて、全裸の美女が、まるで水の

「どうもそうらしいね」

「エエ、この顔は妙子さんにそっくりです」

るように感じられた。それを我慢しながら、グッと押して見 ていた。彼はオズオズとその青ざめた肌に指を当てて見た。 小池助手の鼻の先に、ふっくらとした美女の肩がもり上っ 氷のような冷さが、指の先から心臓まで伝わって来

> ると、美女の肩が、、靨のように凹んで行った。 ゴムのように柔かいのだ。 柔かいのだ。

り、匂を嗅いだりしていた。ハンカチには黒い液体が滲んでめた黒いものに押し当て、それを目の前に持って来て眺めた 博士は、ハンカチを取り出して、ベットリと美女の胸 を染

いる。

「君、懐中電燈をつけてごらん」

スイッチを押し、その光を博士のハンカチに当てた。 今まで青い電燈の下で、黒く見えていたハンカチの汚点が、 小池助手はポケットから、小型の懐中電燈を取り出して、

赤黒い血の色に変った。

博士は無言のまま、ハンカチを助手に渡すと、胸の傷痕を

調べた。

「心臓を抉られている。だが……」

博士は出血量が案外少いことを不審に思っているらしく、

なお死体の全身を眺め廻していたが、

で来てから、 「アア、やっぱり絞殺されていたんだ。そして、ここへ運ん 舞台効果を出すために、心臓を抉ったのに違い

ない」

Ł 独言のように 呟 ゴいた。

「そうらしい。でなければ、あんなに易々とベッドの中へ隠 「昨夜、寝室で絞殺されたのでしょうか」

化物屋敷のテントに忍び込み、この蚊帳の中の生人形と置き 神社の森の中へ引っぱって来た。それから、死体を担いで、 したり、塵芥箱の中へ隠したり出来ない筈だからね。……犯 人は、今朝まだ薄暗い内に、これを塵芥車にのせて、そこの

換えたのだ。心臓を抉ったのは、ここへ来てからに違いない。

帳の中といううまい条件が揃っていたからだ。この中へ置け いたのだろう。この場面を選んだのは、電燈も薄暗いし、蚊 我々のように蚊帳をまくって見る見物なんかありやしな 最初からここへ死体を隠すつもりで、見当をつけて置

いから、急に発見される心配はないと思ったのだ」

ば、

まうのですからね。……でも、 「それに、 大抵の見物は、ここまで来ないで、逃げ帰ってし 見世物小屋の人達に、 よく見

つからなかったものですね」

も、この場面のすぐうしろから、 寝ていたのだろう。それに、 「犯人がここへ来た頃は、まだ夜が明けたばかりで、みんな 何も正面 テントの裾をまくって忍び の入口から入らなくて

「早速、川手さんと中村係長に知らせなければなりませんね」 「ウン、電話をかけることにしよう。……だが、小池君、ち

込めば、訳はないんだからね

るんだ。懐中電燈をつけた序に調べて置こう」 ょっと待ち給え。さい前渡された二枚の紙札が何だか気にな

して来た生腕とから受取った、 紙札というのは、例の暗闇のなかの骸骨と、 化物屋敷通過証ともいうべき くさ 叢むら を這い出

手のかざす電燈の光の中で、 博士はその二枚の紙片を、ポケットから取り出し、 丁寧に調べて見た。 小池助

換券」「第二引換券」と筆太に記され、その真中に「丸花興行 部之印」という大きな赤い判が、ベッタリと捺してある。 紙片は二枚とも同質同形で、その表面には、夫々「第 — 引

二枚とも表面を調べ終ると、

博士はそれを裏返して、懐中

電燈の光に照らして見た。

「アア、やっぱりそうだ。君、これを見たまえ」

と捺した指紋である。 いた。偶然についたのではなくて、 二枚とも、紙片の真中に、 黒い指紋がハッキリと現われて 指の腹に墨をつけて、 態

博士は胸のポケットから、 小型拡大鏡を出して、 紙片の上

に当てて見た。

「三重渦状紋だ、 「例のいたずらですね 悪魔の紋章だ」

「しかし、あの骸骨や、 「我々を嘲笑しているのだよ」 、人形の腕が、 これを持ってい たのは

あるというのは。……若しや、あいつ、 変ですね。丁度僕らの受取った札に、 ロしているんじゃないでしょうか」 あいつの指紋が捺して まだこの中にウロウ

た。 小池助手は異様に声を低くして、じっと博士の顔を見つめ

る黒いものは……」 「そうかも知 れ ない。 君、 あ ħ は何だろう。 あの藪 の 中にい

博士の 目は、 蚊帳を通して、 荒屋のうしろの竹藪 に注がれ

ていた。

「エッ、

黒いものですって?」

んな人の目につかぬところに、 「ホラ、 あすこだ。海坊主のような真黒な奴だ、まさか、こ 化物の人形が置いてある筈は

ない」 博士は、荒屋の背後の竹藪の中を、 殆ど光線の届かぬ闇の中だ。そう云われて見ると、 目で知らせながら囁い 何か

そこに、闇よりも濃い影のようなものが、 朦朧と立っている

の怪物も、 ように感じられる。 博士は刺すような眼光で、 身動きもせず、こちらを見つめている様子だ。 殆んど三十秒ほども、 それを睨みつけている。闇の中 蚊

「君、来たまえ」

帳を隔てて、

息づまるような睨み合い

がつづいた。

博士はそう囁くと、 いきなり蚊帳をまくって、 荒屋の裏の

藪の中へ飛び込んで行った。

ガサガサと竹の揺れる物音。

「そこにいるのは誰だッ」

異様な笑い声が響いて来た。クックックッと、口を押えて忍 博士の叱りつけるような重々しい声に応じて、闇の中から

とも云えぬいやな感じの音響であった。そして、又ガサガサ び笑いをしているような、まるで怪鳥の鳴き声のような、 と竹が鳴って、 黒い怪物は素早く藪の中へ逃げ込んだ様子で 何

「待てッ」

ある。

闇の中の盲目滅法な追跡が始まった。

をかき分けながら、音のする方へ急いだ。 小池助手も、 博士のあとを追って、蚊帳を飛び出し、 竹藪

り過ぎた迷路 厚い竹藪の壁を押し分けて向うに出ると、そこは以前に通 の中で、 両側に藪のある曲りくねった細道がつ

「どちらへ逃げました?」

づいていた。

'分らない。君はそちらを探して見てくれたまえ」

博士は云い捨てて、 迷路を右へ走って行く。 小池助手は左

の方へ突進した。

黒い怪物は影も見えず、 であった。もう自分がどの辺にいるのかさえ見当がつかない 右に折れ左に折れ、いくら走っても際限のない竹藪 宗像博士がどの辺を追跡しているの の 細道

か、それさえ全く分らぬ。

分らない。何かしら黒い人影が感じられるばかりだ。 した。重なり合った竹の葉をすかして見ても、 ふと立止ると、厚い竹藪の向側に、ガサガサと人の気配が 薄暗 くてよく

「先生、そこにいらっしゃるのは先生ですか」

ガサと身動きして、クックックッと、 声をかけても相手は答えなかった。答える代りに、又ガサ あの何とも云えぬ不気

味な笑い声を立てた。

がて気を取りなおして、いきなり竹藪をかき分けながら 小池助手は、それを聞くと、ギョッと立ちすくんだが、 や

「先生、ここです。ここです。早く来て下さい」 と叫び立て、顔や手の傷つくのも忘れて、藪の向側へくぐ

りぬけた。

ごっこが始まるのだ。 か、影もない。そして又、 だが、くぐりぬけて見廻すと、怪物はどこへ逃げ去ったの 八幡の藪知らずの、 際しもな い鬼

「小池君

ヒョイと角を曲ると、 向うから宗像博士が走って来た。

「どうだった。あいつに出会わなかったか」 「一度声を聞いたばかりです。 確かにこの迷路のどこかにい

るには違いないのですが」

-43-

しかし、こちらがそこまで行く間に、先方はどっかへ隠れて「僕も声は聞いた。竹藪のすぐ向側に立っているのも見た。

しまうんだ」

- 専士は三人のものに、事の子畑を語り、圣勿逮捕の手云いの叫び声を聞きつけて、様子を見にやって来たのだ。三人の男が近づいて来た。見世物小屋の人達である。さい前二人が立話をしている所へ、ガサガサと人の気配がして、

をしてくれるように頼んだ。 博士は三人のものに、事の仔細を語り、怪物逮捕の手伝い

をよこしてくれるように頼むことにする。見てくれたまえ。僕は近くの電話を借りて、中村君に警官隊「小池君、じゃ、君はこの人達と一緒に、出来るだけ探して

人が外へ逃げ出すことはなかろう。ナアニ、もう袋の鼠も同外は明るいのだし、大勢の見物が集っているんだから、犯

た。 |士は云い捨てて、 惶 しく迷路の彼方へ遠ざかって行っ

迷路の殺人

それから間もなくの出来事である。

薄暗い竹藪の、とある細道を、黒い影法師のようなものが、

フラフラと歩いていた。

ツを着、真黒のズボン下を穿き、黒い靴下、黒い手袋、頭もよく見ると、そいつは、ぴったりと身についた真黒のシャ

た犯人の一人とすれば、あの背の高い方の、ガーゼの眼帯を何者とも判断がつかぬけれど、若しこれが妙子さんを誘拐しの奥から、鋭い両眼が要心深くあたりを見廻している。無論ただ、黒布の目の部分だけが、細くくり抜いてあって、そ顔もすっぽりと黒布で包んだ、全身黒一色の怪物であった。

よく知っているに違いない。が、迷路の要所要所に、捜索の網の目を張っていることも、行ったことも、又、小池助手の指図で、十人余りの小屋の者黒い怪物は、宗像博士が警官隊を呼ぶために電話をかけに

当てていた男に違いない。

笑い声さえ立てながら。に、ゆっくりと歩いている。例のクックックッという幽かなに、ゆっくりと歩いている。例のクックックッという幽かない。さも自信ありげだが、彼は少しも慌てている様子がない。さも自信ありげ

るのだ。しかも、その包囲陣は徐々に彼の身辺に縮められてい形だ。しかも、その包囲陣は徐々に彼の身辺に縮められてい左からも聞えて来る。黒い怪物は、今や四方から包囲されたる。竹の葉をかき分ける音が、前からも 後 からも、右からもを立てながら、右往左往しているのが、手に取るように聞え

く歩いていた。 く歩いていた。 く歩いていた。な恰好をしたりして、暗の中を呑気らしていれば、しかし、まだせせら笑っていた。冗談らしくピョ

吊り女の幽霊である。 角を曲ると、頭の上に白いものがぶら下っていた。例の首

黒布で包んだ顔の中から、二つの細い目が、何か陰気なけだ怪物はそれを見上げて、又クックックッとせせら笑った。

-44

捜索の人達がガサガサと物音

竹藪の向うのあちこちでは、

霊の方で身震いするかも知れない。 ものの目のように光っている。この黒い海坊主を見ては、 幺幺

通の見物にするのと同じ恰好で、 のあとを追うように、スーッと舞い下って来た。そして、 怪物がそのまま歩き出すと、 からくり仕掛けの幽霊は、 うしろから、 彼の黒シャツ そ

な笑い声を立てながら、 怪物は予期していたと見えて、少しも驚かなかった。 そのか細い幽霊人形の手を払いのけ 又妙

の肩にしがみついた。

ようとした。

の手はグングン彼の頸をしめつけて来た。 だが、どうした事か、幽霊の両手は、いくらふりほどいて 黒い怪物の肩から離れなかった。 もがけばもがく程、 そ

悪夢の中の突拍子もない光景であった。 知れぬ奇怪なものに感じられた。現実の出来事というよりは、 藪の中では、 女幽霊が、 影法師の背中に、長い髪の毛をふり乱した、 それは実に異様な光景であった。 負ぶさるようにしがみついているのだ。暗闇の竹 それが滑稽に見えるどころか、何ともえたいの り乱した、白衣の青ざめた細い両眼の外は黒一色の

りほどこうとあせった。 としたらしく、今度は本気になって、 痩せ衰えた女幽霊の余りの力強さに、流石の怪物もギョッ 力まかせにその手をふ

だが、幽霊の両手は、 呼吸もとまれとし めつけて来る。 愈々力をこめ て、 頸をしめつけて来

「き、貴様ッ……」

人形ではなくて、 怪物は遂に悲鳴を上げた。うしろにしがみついている奴が、 生きた人間であることを悟ったのだ。 幽霊

> であることを悟ったのだ。 に化けて、彼の通りかかるのを待ち受けていた、 追手の一人

いの組打である。 恐ろしい格闘が始まった。 女幽霊と海坊主との、 死もの狂

て、力の弱っていた怪物は、 れてしまった。 戦いはあっけなく終りをつげた。 たちまち幽霊の為に組み伏せら 頸をしめつけられ

「オーイ、捕えたぞ。ここだ、ここだ、 早く来てくれ

から、急に捉える見込みはないと悟って、 ただ追い廻していたのでは、相手は真黒な保護色の怪物だ 幽霊が小池助手の声で呶鳴った。 咄嗟の機智、 彼は

を捉えてしまったのだ。残虐飽くなき復讐魔を組み敷いてし 首吊り幽霊の衣裳をつけ、長髪の鬘を冠って、 まったのだ。それにしても、 敵の虚を突いたのであった。 小池助手は得意であった。 見かけ程にもない弱い奴だ。 博士の留守の間 に、 人形に化 早くも怪物 けて

薄闇の中とはいえ、 い。彼は怪物の顔を見た。はっきりとその素顔を見たのだ。 った。顎が、口が、鼻が、そして目が、次々と現われて来た。 彼はいきなり覆面の黒布に手をかけて、ビリビリと引き破 接近しているので顔。容が分らぬ程ではな

体どんな顔をしているのだろう。

かしら世にも悲痛な響きが籠っていた。 い叫び声がほとばしった。 一目見るや否や、 小池助手の口から、 その調子には、 何とも云えぬ恐ろし 極度の驚きと、 何

ウヌ、 俺の顔を見たな」

黒い怪物がうめくように云って、 組みしかれたまま、

めいて、バクッと物を裂くような音がした。 クネと身体を動かしたかと思うと、闇の中にパッと青い光が閃

して、 り落ちていた。彼は顔の前に垂れ下った長い髪の毛を振り乱 それと同時に、幽霊の胸から、真赤な血のりがポトポトと ンとのけぞったが、そのままにれて、 パッタリう 滴た た

の前に垂れると、 いたばかりの小型のピストルを握っている。 組みしかれていた黒い怪物は、 ゆっくりと起き上った。 引裂かれた黒布を元通り顔 右手には今火を吐

しろに倒れてしまった。

「クッ、クッ、クッ……」

った。 助手の死体を踏み越え、素早く竹藪の向うに姿を隠してしま 彼は又あの奇妙な笑い声を立てた。 そして、可哀想な小池

声を聞きつけたからである。 せききって駈けつけて来た。 それ と引達 いに、反対 の方角から、 小池助手の恐ろしい叫び声と銃 二人の小屋の者が、 息

ていた。胸からは白衣を染めて真赤な血が流れ出していた。とに、その幽霊の裾からは、二本の足がニューッと突き出し 彼等はそこに女幽霊 の転 がっているのを見た。 不思議

やがて、 暫くは 何が何だか分らず、呆然として立ちつくしてい 一人がそれと気附いて、幽霊の長髪をかき分けて見

る。 待伏せしていたのかも知れない。アア、もう脈が止まってい 「オイ、これは あいつにやられたんだ。 さっきの探偵さんだぜ。 あいつはピストルを持っている 幽霊に化けて曲 「 者 を

> 二人は恐怖に耐えぬもののように、 竹藪の重なり合った闇

の中を見廻した。 「それは一体どうしたというのです」

゙あなたのお連れの方が、 見上げると、そこに宗像博士が立っていた。

曲者の為に撃たれたのです」

跪いた。 博士は咄嗟にそれと察したのか、「エッ、小池君が?」 日本のか 転がってい る幽霊 の 側に

て行ったんだね。 「オオ、 アア、もう駄目だ、心臓の真中をやられている。 小池君、この様子では、あいつを見つけて組みつい そして、こんな目に会ってしまったんだね。 よしッ、

小池君、この仇はきっと取ってやるよ。君と木島君と二人の 仇は俺が必ず討って見せるよ」

の前に静かに脱帽するのであった。 博士は両眼にキラキラと涙の玉を浮べて、 小池助手 ر ص -46-

鏡 の魔術

台の自動車を飛ばして駈けつけたのは、 ちであった。 中村捜査係長が制服私服合せて十二名の部下を引連れ、三 それから二十分程の

陣容を整えた。 を防ぐ為に、 係長は宗像博士から委細を聞き取ると、敏速に兇賊逮 小屋掛けの四方の見張りに立て、 半数の警官は賊がテントを潜って逃走するの 残る半数を二 捕 の

中心地点に進ませることにした。 隊に分け、小屋の入口と出口とから、綿密な捜査をしながら

魑魅魍魎は、昼間の化物となって、到る所に滑稽なむくろを曝鬱な小屋の中が明るくなって行った。それにつれて、場内の命じて、直ちに取りはずさせることにしたので、見る見る陰化物屋敷全体を薄暗くしている天井の黒布は、小屋の者に

しはじめた。

白昼の藪の間を進んで行った。と十数名の小屋の若い者とが、隊伍を組んで、切り開かれたを通っても出口に達することができるようになった。警官隊が藪の迷路も、行き止りの袋小路が全部切り払われ、どこ

など殆んど感じられなかった。ると、どの場面もいたずらに毒々しく醜怪なばかりで、凄味に捜索しながら、前進したが、天井の黒布が取り払われて見裏口から入った一隊は、無残人形の場面を、一つずつ綿密

いていた。もなく、その首の生えていた部分に、ポッカリと黒い穴があもなく、その首の生えていた部分に、ポッカリと黒い穴があ地中に身を潜めた生ける生首は、どこへ逃げ去ったのか、影裏口から三つ目の舞台は、例の轢死女の場面であったが、

「オイ、あの奥に何だかいるようだぜ」

ぎらこには例の模造赤煉瓦のトンネルが真黒な口を開いているのこには例の模造赤煉瓦のトンネルが真黒な口を開いているの一人の警官が同僚を顧みて囁いた。指さすのを見ると、そ

横歩きを始める。

ピストルは七人の真中に狙いを定めたまま

その辺一体は、竹藪の茂みになっていて、何となく陰気であ天井から光が射すとは云っても、トンネルの中は真暗だし、

る。

ら、、、) ここのにについるのでででででででででいる人形の手や足を蹴ちらしながら、つながんばかりにして、オズオズと柵を乗り越え、汽車の線ー三人の警官、それに小屋の若者四人、七人の同勢が、手を

から、どこにも逃げ道はありやしませんよ」「このトンネルは一間ばかりで行き止りになっているんです

若者が警官達に囁く。

中を覗き込んだ。 やがて、人々はトンネルの前二間程に近づくと、暗い穴の

そこに突立っているのだ。た。よく見ると、壁と同じ色をした影法師のようなものが、のだが、その行き当りの壁の中に、細い二つの目が光っていトンネルの内部は、すっかり黒い塗料で塗りつぶしてある

それを見ると、人々は思わずギョッと立止った。

「危いッ、ピストルを持っているぞッ」

ッと例の不気味な笑い声を立てながら。来た。右手には油断なくピストルを構えながら、クックック人々のひるむ前に、黒い怪物は、浮き出すように前進して

怪物の足が線路を越えた。今度は柵の方へと、蟹のようににじり寄って来る。七人の方が却って押され気味である。トンネルを出ると、大胆不敵にも、ジリジリと警官の方へ

きになった。そして、通路を人なき方へと、矢のように走り、アッ、柵を越えた。越えたかと思うと、クルリとうしろ向た。

-4

「ウヌ、待てッ」

「逃がすもんか、畜生」

、湿り近く、ほこりに。かけ声だけは勇ましく、逃げる一人を追う七人、すさまじ

い追っ駈けが始まった。

「クックックッ……」

怪物は走りながらも、まだ嘲笑をやめなかった。

い通路へ飛び込んで行った。その正面には、列の鏡の部屋が無残人形の幾場面を過ぎて、怪物は両側を黒布で張った細

るものか。

あるのだ。い通路へ飛び込んで行った。その正面には、例の鏡の部屋が

行き当りの黒板塀のドアを引きあけ、とうとう鏡の部屋に辷ような黒い姿がよく見える。彼はそこを一息に駈け抜けて、その通路も、天井の蔽いが取去ってあるので、怪物の躍る

り込んだ。

いていたからだ。ピストルの筒口が、今にも火を吐くぞとばかり、不気味に覗とこちらを睨みつけていたからだ。イヤ、目だけではない。くんでしまった。ドアが細目に開いて、怪物の白い目がじっ七人の追手は忽ちドアの前に殺到したが、そこで又立ちす

一人の若者が囁き声で、妙案を持出した。「向うの出口から廻って、はさみ撃ちにしたらどうでしょう」

これも惶しい囁き声の指図だ。若者は通路の壁を押し破っこの事を伝えてくれ。出口の方を固めてくれるようにね」「よし、それじゃ、君は向うへ廻って、あちらにいる警官に、

の隙間から警官達を威嚇しているけれど、やがて背後の入口(愈々怪物は袋の鼠となった。彼は今、何も知らないで、戸

て、鏡の部屋のうしろ側へ飛び出して行った。

て見物しているのだ。その中を、どう逃げ終せることが出来った弥次馬の大群が、テントのまわりをグルッと遠巻きにし人の警官が見張りをしているばかりか、事件を聞きつけて集鏡の部屋は逃げ出すことが出来たとしても、小屋の外には六から、別の警官隊が殺到するのだ。滾背に敵を受けては、いから、別の警官隊が殺到するのだ。滾背に敵を受けては、い

ないで、呑気らしく笑っている。「クックックッ……」怪物は又笑い出した。アア、何も知らつけながら、息を殺して時の来るのを待ち構えていた。あとに残った六人の追手は、じっとピストルの筒口を睨み

乱闘が演じられるのではないか。ないか。敵も味方も鏡に映る千人の姿となって、何千人の大ない。どうしたのかしら。オオ、今にも格闘が始まるのではしかし、賊のピストルはこちらを狙ったまま、少しも動か歩き廻っているのだ。咳払いの音が聞える。

ジリと流れた。突然、

五秒、十秒、十五秒……追手達の腋の下から冷い汗がジリ

鏡の部屋の中に物音がした。

何者かが

いつの方から打って出る積りかしら。ストルを構えたままだ。では、早くも計略を悟って、逆にあ静かに開き始めた。オヤッ、おかしいぞ。怪物はやっぱりピー手に汗を握って待ち構える人々の前に、鏡の部屋のドアが、

前に、遂にドアはすっかり開け放された。て来るんだな。逃げ腰になって、じっと見つめている一同のドアは段々大きく開いて行く。黒い怪物め、愈々飛び出し

人々はギョッとして、思わずあとじさりを始めた。

は、敵ではなくて味方であった。味方も味方、当の怪物の発すると、オオ、これはどうした事だ。そこに立っていたの

ですか」
「オヤ、あなた方何をしているんです。あいつはどうしたの見者の宗像博士その人であった。

らなかったのですか。つい今し方まで、そのドアの隙間から、「オオ、宗像先生、あなたはその部屋で、曲者をごらんにな博士の言葉に、警官達は開いた口が塞がらなかった。

我々にピストルを突きつけていたんですぜ」

ていたばかりでね」いないのです。ただ、このピストルがドアの把手にぶら下っみ撃ちにする積りで、入って来たのだが、入って見ると誰も「僕もここにあいつが隠れていると聞いたものだから、はさ

げて、一同に示した。博士はそういいながら、紐で結びつけたピストルを取り上

のです」のです」の方に筒口が向くようにして置いて、素早く逃げてしまったの方に筒口が向くようにして置いて、素早く逃げてしまったすよ。あいつはピストルをここにぶら下げて、丁度あなた方あいつ自身が、ここにいるのだという錯覚を起していたので「あなた方は、このピストルの筒口が覗いているのを見て、

博士の顔を見つめていた。 人々は余りのことに、それに答える力もなく、呆然として

た。ひょっとしたら、鏡の壁に何か抜け穴でも出来ているのにいたんですが、誰もここから逃げ出すものを見かけなかっ「しかし、おかしい。僕はもうさい前から、向うの戸口の外

じゃないかと思うくらいです」

しかし、遂に黒い怪物は、どこにも姿を現わさなかった。てしまって、隅から隅まで、何度となく探し廻った。隠れそうな場所は、悉く打毀し、迷路の竹藪もすっかり倒し怪物の奇怪な消失に、又改めて大捜索が繰返された。人の

あった。 六人の警官をはじめ、まわりを囲む群集が、何よりの証人でと云って、テントの外へ逃げ出さなかったことは、見張りの

どんな抜け道も、どんな隠れ場所も発見されなかった。一枚一枚壁からはずされて行った。しかし、そのあとには、「像博士の提案によって、鏡の部屋が取り毀され、大鏡が

魔力を持っていたのであろうか。でなくて、人間を全く影も形もないように吸い取ってしまうあの不気味な鏡の部屋は、一人を千人にして見せるばかり

して、ゾーッと肌寒くなる思いをしたのであった。えぬ破片を、六方から、サーッと吸い取って行く光景を幻想そこへ入った人間を、先ず粉々に打ちくだき、その目にも見人々は、六角の鏡の部屋が、奇術師の魔法の箱のように、

-49-

復讐第

つかないと云っていた。 議なことに、復讐を受けている川手氏自身さえ、全く見当がその執拗残酷な復讐鬼の正体は少しも分らなかった。不思

- ただ分っているのは、そいつが世にも恐ろしい三重渦巻の^ アッス リ゚マラズ゚゚゚ リッス

の直前には、殺人の予告ででもあるかのように、必ず人々の魔は到るところにその怪指紋を残して行った。殊に復讐行為で、まるでお化けが笑っているように見える三重渦状紋。悪指紋を持っていることであった。三つの渦巻が三角形に並ん

を血だらけにして倒れていた。 生人形と置き換えられ、 姉娘の妙子さんは、 体模型陳列室に、その生けるが如きむくろを曝す憂き目を見、 目の前に曝しものとした。妹娘雪子さんは、 前にそのお化指紋が現われるのであった。 二令嬢を誘拐し、惨殺し、 復讐鬼は魔術師のような不思議な手段によって、 場所もあろうにお化け大会の残虐場面の 竹藪に囲まれた一つ家の場面に、 しかもその美しい死体を、 衛生展覧会の人 川手氏 衆人の 胸 の

復讐鬼の嘗ての脅迫状によっても明かであった。苦しめ悲しませ、復讐を一層効果的にする為であったことは、もない。先ずその二令嬢を惨殺したのは、川手氏を思うさまった。復讐鬼の真の目的は、川手氏にあったことは云うまでそして、この次は、一家の最後の人、川手氏自身の番であ

に耽っていた。 儀を終ると、奥まった一間にとじこもり、人を避けて物思い人ところを知らぬのであった。殆んど人任せで妙子さんの葬流石の実業界の英雄も、まるで思考力を失ったかのように、為川手氏は愛嬢を失った悲歎と、我身に迫る死の恐怖の為、

は、明かに探偵の失敗であったが、忽ちに悪魔のトリックをぬ。今はこの聡明な私立探偵だけが頼りなのだ。妙子の場合悉く断っているのだけれど、博士だけには会わぬ訳には行か、葬儀の翌早朝、宗像博士の来訪が取次がれた。他の来客は

に対抗し得る者が、外にあろうとは考えられないのだ。はなかったか。この人をおいて、あの魔術師のような復讐鬼看破し、死体のありかを探し当てたのは、宗像博士その人で

身の失策を心から詫びるのであった。応接間に通されると、宗像博士は鄭道に悔みを述べ、彼自

がないのです」

・今度こそあの怪指紋の主を捉えないでは、僕自身に申訳をあいつの為に奪われているのですから、彼らの復讐の為にければなりません。それに、僕としては、可愛い二人の助手りません。あなたの依頼がなくても、僕の名誉の為に戦わな尽したいと思います。こうなっては、もう職業としてではあ「この申訳には、第三の復讐を未然に防ぐ為に、僕の全力を

思う存分にあなたの智慧を働かして下さい。害者だ。費用の点はいくらかかっても僕が負担しますから、あなたは二人の助手を奪われたのですねえ。お互に、同じ被「有難う、よく云って下すった。わしは二人の娘をなくし、

ですから、娘達の敵を取るためには、わしの全財産を擲二人の娘の菩提を帯って、余生を送りたいと思っています。これを機会に事業界からも引退したいと思うのです。そして、も興味はありません。今もそれを考えていたところですが、わしはこの世に何の楽しみもなくなったのです。もう事業に二人きりの娘が二人とも、あんなことになってしまって、

お察しいたします。おっしゃるまでもなく、僕は当分の間

警視庁の中村君とも聯絡を取って、

出来るかぎりの手段をつ

っても惜しくはありません。君に一切をお任せしますから、

<

、して下さい」

-5

それについて、一つ御相談があるのですが」外の仕事は放って置いて、この事件に全力をつくす考えです。

声になって、宗像博士はそう云って、一膝前に乗り出すと、殆んど囁き

つの最終最大の目的であることは分り切っているのですから三の復讐です。つまりあなたに対する危害です。それがあい「川手さん。今さし当って予防しなければならないのは、第

ね。

僕達は、昼も夜も絶間なく、あいつに監視されているものと魔手は、我々の身辺に迫っているかも知れません。これからこうしてお話ししている内にも、魔法使のようなあいつの

安全な方法がないという結論に達したのです。日頭を絞ったのですが、結局あなたに身を隠して頂く以外に、で、僕は第三の復讐を予防する手段について、今朝から一して、行動しなければならないのです。

ほかはないのです。のですからね。見えぬ敵と戦うためには、こちらも身を隠すのですからね。見えぬ敵と戦うためには、こちらも身を隠すって、そうでもするより安全な道はないのです。なにしろ、ょうし、僕にしても採りたくない手段ですが、この場合に限まを隠すなんていうことは、あなたもお好みにならぬでし

捜索に全力を注ぐことが出来る訳ですからね。二重の仕事に、力をわける必要がなくなって、ただ復讐者の存分働けるというものです。あなたの保護と賊の逮捕という、そうして、あなたに安全な場所へ移って頂けば、僕は思う

それについて、

一つ考えていることがあるのですが」

「あなたの替玉を作るのですよ。影武者ですね、丁度持ってして、一層声を低め、殆んど聞き取れぬ程に囁くのであった。引き寄せて、川手氏に近づき、その耳に口をつけんばかりに博士はそこまで云って、ジロジロと辺りを見廻し、椅子を

置いて、謂わば囮にする訳です。そして、近づいて来る賊をう豪のものですよ。その男をこのお邸へ、あなたの身代りにを的に引受けてもいいという男があるのです。柔道三段とい来いの人物があるのです。相当の報酬を出して下されば、命

待伏せしようというのです」

「そんな男が本当にあるのですか」

川手氏は少し大人げないという面持で、気の進まぬ調子で

あった。

気がつかないかも知れません」んなされば分ります。うまくやれば召使の方達も、替玉とは、「不思議とあなたにそっくりなのです。マア一度会ってごら

題じゃありませんか」「それにしても、わしが身を隠す場所というのが、第一、問

という、まるで戦国時代の土豪の邸とでもいった用心深い建土塀の外にはちょっとした堀があって、跳橋まで懸っているが、全体が土蔵造りで、窓にも縁側にもすっかり鉄板張りのな老人が、盗難を恐れる余り、そんな妙な家を建てたのです売りに出ている妙な一軒家があるのです。ある守銭奴のよう「イヤ、それも心当りがあるのです。山梨県の片田舎に、今丁度

僕はそこの主人がなくなる前、ある事件で知合いになって、

物なのです。

建物といい、あなたの一時の隠れ場所には持って来いなのでその城のような邸に泊ったこともあるのですが、場所といい、

す。

泊るようなつもりで、鞄一つで行けばいい訳です。くことが出来ます。家具調度も揃っていますし、マア、宿にいずれゆっくり取極めるとして、今日からでもそこへ落ちつすが、その人達も僕はよく知っていますから、売買のことは現在は、その地方の百姓の老夫婦が留守番をしているので

うのです」で、こんなお誂え向きな話は、滅多にあるものじゃないと思で、こんなお誂え向きな話は、滅多にあるものじゃないと思あり、あなたの替玉になる男を知っていたから思いついたの実はこういうことをお勧めするのも、その城のような家が泊るようなつもりで、「鞄〕一つで行けばいい訳です。

るのも、大人げないような気もしますからねえ」「一つ、考えて見ましょう。何だかそれ程にして逃げ隠れす

ら耳へ囁き交されたのである。かったけれど、これらの会話は凡て、用心深く、お互の耳か川手氏はまだ乗気にはなれない様子であった。一々記さな

宗像博士は、それを受取って、蓋を取ろうとしたが、何を運んで来た。漆器の蓋のついた大型の煎茶茶碗である。川手氏が考え込んでいる所へ、若い女中が二度目のお茶を

は一つもなかった。

に見つめるのであった。それから、思ったのか、ふと手を止めて、その黒い漆器の表面

「ちょっと」

ットから例の拡大鏡を取出して、二つの蓋の表面を仔細に点窓の光線にかざしながら、つくづくと眺めた上、今度はポケーと云って、川手氏の茶碗に手をのばし、その蓋を取って、

検しはじめるのであった。

川手氏は早くも恐ろしい予感に脅えて、サッと顔色を変え「その蓋に何かあるのですか」

ながら、上ずった声で訊ねた。

「あの指紋です。ごらんなさい」

ない三重渦状紋が、二つの蓋の表面に一つずつ、はっきりとレンズを覗き込んだ。アア、お化けが笑っている。まぎれも恐ろしいけれど、見ぬ訳には行かぬ。川手氏は顔をよせて、

浮き上っているではないか。

告である。ぐずぐずしている訳には行かぬ。悪魔の触手は、だ。妙子さんの葬儀がすむか済まぬに、もう第三の復讐の予二人はあきれた様に顔を見合せた。ア、何という素早い奴「態々捺したのです。そして、我々を嘲笑っているのです」

使達残らずの指紋を取って見たけれど、無論三重の渦巻など紋をつけたのか、まるで見当もつかなかった。念のために召使達に一人一人質問した。だが、いつの間に、誰がそんな指ない。宗像博士は自身台所へ出向いて行って、そこにいる召直ちにお茶を運んだ女中が、取調べられたのは云うまでも

b, を捺して逃げ去ったものとしか考えられなかった。 ということは、 締りには少しも異状はなく、どこからどうして忍び込んだか いたのを、 問題 賊は の茶碗は、 今取出してそのまま応接室へ運んだというのだか 夜 の内に台所へ忍び込んで、 少しも分らなかった。屋外にも賊の足跡らし 昨夜すっかり拭き清めて茶箪笥に入れ 茶箪笥 をあ しかし戸 け て置

既にして川手氏の身辺に迫っているのだ。

いものは全く発見されなかった。

しみを忘れることが出来まいと思いますから、「旁」あなたのにはなくなった娘達の思い出がこもっていて、いつまでも悲れてはもう一刻もここにいる気がしません。それに、この家にしましょう。臆病のようですが、こんなものを見せつけら「宗像さん、やはりお勧めに従って、一時この家を去ること

間を知りつくした五十男を、まるで子供のように臆病にして川手氏は遂に我を折った。三重渦巻のお化けの恐怖は、世おっしゃるようにする決心をしました」

しまったのである。

なっています」 あるのです。電話さえかければ、すぐにもやって来ることにたの替玉になる男も、実は用意をして、ある場所に待たせて僕は思う存分あいつと一騎討が出来るというものです。あな僕も安堵しました。あなたさえ安全な場所へお 匿 いすれば、ちゃんとその手配をして置いたのですが、御同意下さって、「実を云いますと、無理にもこの計画を実行して頂く決心で、

で、簡単に用件を済ませた。ある番号を呼出して、第三者には少しもそれと分らぬ話し方歯士はひそひそと囁いて、部屋の隅の卓上電話に近づくと、

しながら、ツカツカと部屋の中へ入って来たのだ。ンバネスを着たまま、しかもその襟を立てて顔を隠すように異様な人物が入って来た。ソフトをまぶかく冠ったまま、イーそれから二十分程もすると、書生の案内で、その応接間へ、

で案内するようにといいふくめてあったので、この異様な身予め玄関番の書生に、こういう人が来るから、怪しまない

しまった。そして、薄暗くなった部屋に電燈をつけてから、いう窓のブラインドをおろし、御丁寧にカーテンまで閉めてされていた鍵で、唯一の入口へ締りをした。それから、窓と書生がドアを閉めて出て行くと、宗像博士は、主人から渡なりのまま、無事に玄関を通過することが出来たのである。

川手氏に向い、すると、その人物が、いきなり外套を脱ぎ、帽子をとって、

異様な人物に何か合図をした。

「初めてお目にかかります。よろしく」

と頭を下げた。

っくりそのままの人物が、眼前一二尺のところに佇んで、ニから羽織から、羽織の紐や襦袢の襟の色までも、川手氏とそ恰好といい、容貌といい、髪の分け方、口髭の大きさ、着物 53-1に、その人物を眺めた。アア、これはどうしたことだ。突然川手氏は思わず椅子から立上って、あっけにとられたよう

うのであった。 宗像博士は双生児のような二人を見比べて、得意らしく笑さえどちらが本当の川手さんだか迷うくらいですからね」 「ハハハ……、如何です。これなら申分ないでしょう。僕で

コニコ笑いかけているのだ。

きな男です。た通り、柔道三段の豪のもので、こういう冒険が何よりも好に近の人は近藤という僕の知合のものです。さっきも申上げ

げるから、一つうまくやってくれ給え。つまり今日から君が、ところで近藤君、お礼のことは僕が引受けて、十分に差上

見ればどこか違ったところがあるんだから、召使にはすぐ分るべく近づけないように。いくら似ていると云っても、よくじこもって、一切客に会わないことにするんだ。召使いもな川手家の主人なのだ。兼ねて打合せて置いた通り奥の間にと

うに、その都度何かで顔を隠す工夫をするんだ。屋を薄暗くして、女中などにも正面から顔を見合わさないより憂鬱症に罹ったという体にするんだね。そして、昼間も部マア、お嬢さんがあんなことになられたので、悲しみの余

るからね。

呑み込んでいるよと云わぬばかりに、胸を叩いて答えた。(博士が例のひそひそ声で注意を与えると、新しい川手氏は、積りだが、それまでのところを、一つうまくやってくれ給え」のうちに僕が来て、召使達に事情を話し、よく呑み込ませる無論そんなことが永続きする筈はないから、いずれ一両日

これなら女中共だって、なかなか見分けはつきませんよ」「これは不思議だ。声までわしとそっくりじゃありませんか。ったこともある男です。お芝居はお手のものですよ」「マア、私の腕前を見ていて下さい。青年時代には舞台に立

異様な旅行者

間もなく、

応接間の窓のブラインドやドアが元のように開

纒めた重要書類と当座の着換えを詰めたスーツ・ケースを、物の川手氏であったことは云うまでもない。同氏は咄嗟に取を辞去した。ソフト帽と外套の男が、替玉と入れ替わった本人物とは、偽物の川手氏をあとに残して、さりげなく川手邸かれ、宗像博士と、ソフト帽と外套の襟で顔を隠した異様の

外套の袖に隠すようにして下げていた。

った、宗像博士の自動車に乗り込んだ。 二人は書生に送られて、玄関を出ると、門前に待たせてあ

「丸の内の大平ビルまで」

「近藤さん、サア、これからが大変ですよ。色々意外なこと博士の指図に従って車は動き出した。

もあるでしょうが、驚いてはいけません。一切僕にお任せ下

さるんですよ」

博士は川手氏を近藤さんと呼ぶのだ。

は、どうした訳ですか。汽車は新宿駅からでしょう」「お任せします。だが、山梨県へ行くのに、丸の内というの

に指を立てて「シーッ」と制しながら、と川手氏が不審を起して訊ねると、博士はいきなり口の前

だか、あなたにもお分りになるでしょう」これから目的地へ着くまでに、探偵という商売がどんなものあなたを賊の目から完全に隠す為めの手段なのですからね。幾つも起る筈ですから、びっくりなさらないように。みんな「だから、お任せ下さいというのです。これから妙なことが

と、何か意味ありげに囁くのであった。

横着けになった。博士は運転手に賃銀を支払うと、外套で顔それから二十分程のち、車は大平ビルディングの表玄関に

階段を登ろうともせず、 グの中へ入って行ったが、エレヴェーターに乗ろうともせず、 を隠した川手氏の手を引くようにして、いきなりビルディン ただ廊下をグルグル廻り歩いた末、

いつの間にか建物の裏口へ出てしまった。 見ると、 そこの道路に大型の自動車が一台、 人待ち顔に停 大急ぎでその

自動車の中に飛込んだ。 車している。博士は川手氏を引っぱりながら、

「怪しい奴は見なかったか」

「別にそんなものはいないようです」

運転手が振向きもせず答える。

「よし、それじゃ云いつけて置い た通りにするんだ」

車は静かに走り出した。

ガラス戸を閉め切って、さて、 博士は手早く、 窓のブラインドをおろし、運転席との境の 面喰っている川手氏の方に向

き直った。

罪者が用いる籠抜けというのはこれですが、探偵も犯罪者も、 時には同じ手を使うものですよ 「近藤さん、 これが尾行をまく、ごく初歩の手段ですよ。 犯

あったとしても、大丈夫です。 たとしても、 こうして置けば、仮令お宅から我々をつけて来た者があっ 或は又、 あの自動 車 の運転手が敵の廻しもので

さえ忘れなかった。

この車の中で変装をするのです。探偵というものは、 は僕の部下も同様のものですから、先ず心配はありません。 段を施さなければなりません。今度は変装です。この運転手 なにしろあ しかし、 普通一般の悪人を相手なればこれで十分ですが、 いつは神変自在の魔術師ですからね。 まだまだ手 走って

> るのですよ」 いる自動車の中で、姿を変えなければならない場合が往々あ

ませんか。では失礼して、 っとこちらを向いて下さい」 んの面影を出来るだけなくしてしまおうという訳です。構い のスーツ・ケースを開いて、先ず髭剃りの道具を取り出した。 -近藤さん、あなたの口髭を剃り落すのです。 博士は小声に説明しながら、予め車内に置いてあった大型 お顔に手を当てますよ。 つまり川手さ サア、

がままになっていた。あの恐ろしい復讐鬼の目を逃れる為と 内の屋敷町をグルグルと廻っていた。 あれば、 車は予め命じられていたと見えて、 川手氏は博士の用意周到なやり口に、感に堪えて、される 口髭を落すくらい、何の惜しいことがあろう。 徐行しながら、 麹町区

を泡だらけにしながら、 を剃り落してしまい、 から車内を覗かれる心配はない。安全至極な移動密室である。 博士はチューブから石鹸液を絞り出して、川手氏の鼻の下 剃りあとにメンソレータムを塗ること 手際よく剃刀を使って、 見る見る髭

今度は僕の番です」 せんか。 「エッ、 「ウフフフ……、 君まで何もそんなことをしなくっても あなたもその髭を剃るのですか。惜しい 大変若返りましたよ。 サア、 これ じゃ でよし、 ありま

るではないか。 この特徴のある美髯をなくしては、 川手氏はびっくりして、博士の立派な三角型の顎髯を見た。 宗像博士の威厳にも関す

通行者 -55-

左右と後部の窓のブラインドがおろしてあるので、

いくら変装をしても、 「ところが、この髯は一目で僕という事が分りますからね。 髯があっちゃ何にもなりません。

あなたにだけ明しましょう。ごらんなさい、これです」 です。これは僕の取って置きの秘密ですが、この際ですから、 しかし、剃り落すのじゃありません。剃らなくてもいいの

髯が、 れた。次には口髭に爪を当てると、それも美しく剥がれてし きむしり始めた。すると、驚くべし、 まるで顔の皮を剥ぎでもするように、いきなりメリメリと引 云うかと見ると、博士は揉上げのところを指でつまんで、 見る見る顔を離れて行き、そのあとに滑かな頬が現わ あの立派な三角型の美

せん。 ね。普通に註文したんでは、 随分苦心をしたものです。 「つけ髯とは見えなかったでしょう。これを作らせるのには ある鬘師と僕との合作なんですが 迚もこんな見事なものは出来ま

まった。

狙った訳です。 れぬ苦労をするものですよ」 るように、 髯を貯えたと見せかけ、宗像といえばすぐに三角髯を聯想す ることにしたのです。 考え及ばないでしょう。僕はそこへ目をつけて、逆手を用 武者の男が、逆に無髯の人物に変装出来るなんて、ちょっと つけ髯で変装するということは、よくありますが、こんな髯 この三角髯は、僕の謂わば迷彩なのですよ。無髯の探偵が 世間の目を慣らして置いて、実はその逆の効果を ハハハ……、 数年前から、態と目につき易いこんな 探偵というものはいろいろ人知 い

よっては、 川手氏は益々あっけにとられてしまった。なる程その道に 外部から想像も出来ない苦心のあるものだと、感

嘆しないではいられなかった。

えながら、今度はスーツ・ケー 取り出して、 博士は十年も若返ったような、のっぺりとした顔に微笑を湛 膝の前に拡げた。 スの中から、 変装用の衣服を

の請負師という訳です」
うけおいしましている。
強はその親分さい。あなたは印半にの職人になるのですよ。僕はその親分 「近藤さん、これがあなたの分です。ここで着更えをして下

まで揃っている。博士の分は、茶色の古い背広に、 で、いかさま土方の親分といった服装である。 ッカーボッカー、模様入りの長靴下、編上靴 川手氏の分は、 古い印半纒に紺の股引、 破れたソフト帽子 ソフト帽など 廉サッ 手なニ

めてスーツ・ケースの中へおし込まれた。 を済ませた。今まで身につけていた着物や外套は、 二人は車の中で、窮屈な思いをしながら、どうやら着更え 一つに纒

乱暴になるからね。悪く思っちゃいけないぜ」 「サア、これでよし。近藤君、これから口の利き方もちっと

見つからぬ様子で、破れソフトの下から、 るばかりであった。 親分が云い渡すと、 子分の川手氏は、 急には答える言葉も 目をパチパチさせ

忽ち方向を変えて、 博士が境のガラス戸を開けて、運転手に声をかけた。 矢のように走り出す。 車は

東京駅へ直行してくれ給え」

「もういいから、

て、車を降り、遠方へ出稼ぎに行く職人といった体で、構内 へ入って行った。 やがて、駅に着くと、二人は銘々のスーツ・ケースを下げ

博士は川手氏を待たせて置いて、

三等切符売場の窓口に行

き、沼津までの切符を二枚買った。

ったのですか」 「オヤ、こりゃ沼津行きじゃありませんか。 山梨県じゃなか

川手氏は切符を受け取って、けげん顔に訊ねる。

「シッ、シッ、何も訊かないという約束じゃないか。 サア、

丁度発車するところだ。急ごうぜ」

博士は先に立って、改札口へ走り出した。

発車間際の下、関行き普通列車に間に合って、二人は後部三

等車の片隅に、つつましく肩を並べて腰かけた。

ゴットンゴットン各駅に停車して、横浜へついたのは、 ŧ

う正午に近い頃であった。 「この次の駅で、少し危い芸当をやりますからね。足もとに

気をつけて下さいよ」

るでもない。 やがて保土ヶ谷。だが停車しても博士は別に立上ろうとす博士は川手氏の耳に口を寄せて囁いた。

然としている。一体どんな芸当をしようというのだろう。 車掌の呼笛が鳴った。ガクンと動揺して汽車は動き始めた。 川手氏が気遣わしげに訊ねると、博士は目顔で、背いて、平

「サア、降りるんです」

く。二人とも足がもつれて、「危く転がるところであった。 先ずスーツ・ケースを投げ出して置いて、サッとプラット・ ジへ走った。そして、もう速力を出し始めている車上から、 フォームへ飛び降りた。川手氏も手を引かれたままそれに続 矢庭に立上った博士が川手氏の手を取って、後部のブリッ

「一体これはどうした訳です」

れる程念を入れなければなりません。 とは考えられませんが、ああいう敵に対しては、 つの手なんですよ。まさかここまであいつが尾行していよう 「イヤ、驚かせてすみませんでしたね。これも尾行をまく一 無駄と思わ

中で車掌に云えばいいんですよ」 入って来たようです。向うへ渡りましょう。 をつけることは出来ません。オオ、丁度向うから上り列車が り越す訳ですから、いくらくやしがっても、 あの汽車に我々の敵が乗っていたとすれば、 こうして置いて、今度は東京の方へ逆行するんです。 まんまと一駅乗 ナアニ、切符は もう我々のあと

ので、博士は普通の口を利いた。 ガランとしたプラット・フォーム。 あたりに聞く人もない

八王子への線に乗替え、八王子で再び目的の中央線に乗替えばサホサッテ゚ロと東神奈川である。二人はそこで下車して、今度は駅引返すと東神奈川である。二人はそこで下車して、今度はそれから反対側のフォームに渡り、上り列車に乗って、二 57-る。その大迂回の為めに、乗替えの度に時間をとり、 た。つまり、 の聯絡を利用して、まんまと中央線に方向転換をしたのであ ついた頃にはもう日が暮れかけていた。 東海道線に乗ったと見せかけ、桜木町八王子線 甲^こ 府ふ **へ**

をウンとゆるめる場所があります。僕らはそこで土手の下へ せん。N駅の少し手前で汽車が急勾配にさしかかって、 飛び降りる予定なのです。これが最後の冒険ですよ。 なければなりませんよ。しかし、決して危険なことはありま 「サア、やがてN駅です。今度こそ思い切った放れ業を演じ

何もそれ程にしなくてもとお思いでしょうが、必ずしもあ

とで敵の耳に入らないとも限りません。 かということを記憶していて、 知っている人が見れば疑います。そして、どこの駅で降りた て いつの尾行を恐れるばかりじゃありません。いくら変装をし いても、 あなたはただ口髭がなくなっただけですからね。 人に話せば、 それがどんなこ

要りません」 ることが、 のですよ。 中途で飛び降りるというのは、 我々の知人が居合わさないと、どうして断言出来ましょう。 博士は川手氏の耳に口をつけて、こまごまと説明するので 当り前なれば、 それに汽車の速度が決して危険がないまでににぶ ちゃんと確かめてあるのですから、 N駅で下車するのですが、丁度そのN駅に 必ずしも無駄な用心ではな 少しも心配は

ていた。冒険にはお誂え向きの時間である。 あった。幸い、日もとっぷりと暮れて、窓の外は真暗になっ 「ボツボツ、ブリッジへ出ていましょう。今に急勾配にさし

なかった。 二人は何気なく、鞄を下げて、 車掌の姿もなく、こちらを注意している乗客も見当ら 後部のブリッジへ忍び出た。

かかりますから」

の速度が目に見えて減じて行った。 「サア、ここです」 やがて、 黒煙に混って、 トンネルを知らせる短い汽笛が鳴り響くと、 火の粉が美しく空を飛んで行く。 ボッボッボッという機関 汽車

まん丸な肉団となって、サーッと地上へ。印半纒の川手氏も 投げ出された。つづいて博士の手が鉄棒を離れると見るや、 博士の声を合図に、二つのスーツ・ケースが闇の土手下へ

おくれず、闇の中へ身を躍らせた。

肉団とが、相前後して、 線路の土手の草の上を、 コロコロと転がり落ち、 二つのスーツ・ケースと、二つの 下の畑に折

暫らくして闇の中に低い声が聞えた。

り重なって倒れた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫です。飛び降りなんて、存外訳のないものですね」 川手氏は数十年来経験せぬ冒険に、腕白小僧の少年時代を

思い出したのか、ひどく上機嫌であった。

右に折れた山裾に、 「すぐその向うに細い村道があるので、そこを二三丁行って、 二人は闇の中に、 例の城郭が建っているのです」 ムクムクと起き上り、塵を払って、

とした森の中へ入って行くと、 ツ・ケースを下げると、 雑木林を過ぎて、 右に折れ、 畑を踏んで村道に出た。 行手の木の間に、 雑草を踏み分けて、 チロチロと こんもり -58-

燈火が見えた。

「あれですよ」

「なる程、山の中の一軒家ですね」

に つくりにも、何かしら天守閣を思い出させるようなところがの不思議な建物が見え始めた。なるほど城郭である。屋根の ある、高い土塀も見えて来た。 ように眺められた。 れているのが、 しばらく行くと、 かめしい門があって、 ぼんやりと、 森の切目から、 その前に堀の跳橋が吊り上げら まるで夢の中の不思議な城門の なお近づくと、 夜目にも白い土蔵づくり 土塀の一ヶ所

「お気に召しましたか」

二人はそんな冗談を云い交して、低い笑い声を立てた。

恐怖城

入りであった。
が置けないし、その上護衛の役も勤まると、川手氏も大気に極淳、樸な田舎者、これなら身の廻りの世話をして貰うにも気た。夫婦とも見た目こそ頑、丈な老人であったが、気だては至い邸にたった二人で留守番をしている老人夫婦に引合わされい邸にかのような一軒家に到着すると、川手氏は先ず、広その城郭のような一軒家に到着すると、川手氏は先ず、広

にせせらぎ、樹間に呼び交う鳥の声も、浮世離れてのどかで黄ばんだ若芽のふくらみも暖かく、吊橋の下の小川は軽やか蔵造りの白壁も明るく、それを取りまく雑木林の枝々には、もなく経過した。陽春の山住いは憂いの身にも快かった。土川手氏が城郭の不思議な掛人となってから、四五日は何事

なることもあった。 なごみ、時には、何か保養の旅にでも出ているような気分にうとて忘れられぬ悲しみを持つ川手氏も、環境の激変に心も夜ともなれば、老夫婦の語る山里の物珍らしい物語、忘れよべられ、退屈すれば、うらうらと日ざしの暖かい庭の散歩、三度の食膳には、老夫婦が心尽しの、新鮮な山の珍味が列

ないので、石油の台ランプを使っているのだが、それも吹き天井の高い寒々とした十二畳の座敷、ここには電燈の設備がいり安心し切っていたのだけれど、それとは別に、広い城郭低いの朝晩、何とはなしに怪談めいたゾクゾクするような雰囲気が、ひしひしと身にせまるのを覚え始めた。 最初それに気附いたのは、五日目の夜更けのことであった。 最初それに気附いたのは、全く考えなかった。その点はすった。あれ程の用心をしたのだから、復讐鬼がこの山中まで追っれて、川手氏は身辺に何となく気がかりな空気を感じ始めっれて、川手氏は身辺に何となく気がかりな空気を感じ始め

ているように思われる。 遠すぎる。しかも二人ではなくて、三人四人の声が入り混っ物語でも交しているのかと想像したが、それにしては人声が一間隔てて老夫婦の部屋があるので、彼らが老の寝覚めの消して寝についた、全くの暗闇である。

ない。確かにどこかこの建物の中の遠くの方で、意味は少しというのはただ事でない。幻聴かしら、イヤイヤ、幻聴ではしか人が住んではいないのに、そんな多人数の話声が聞える(何町四方人家のない山中、この城郭には自分を混ぜて三人

あびせられたような怖れを感じないではいられなかった。る。五十男の川手氏も、それを聞いていると、ゾーッと水をも聞き取れぬが、ボソボソという話声がいつまでも続いてい

沼の精、童話の国の魑魅魍魎の類であろうか。
さか今どきそんなものが、人里近いこの辺に棲んでいる筈であった。では、山の奥からさまよい出した一部ではあるまいか。山賊共かのことにしているのだが、若しやその開かずの部屋の奥の方に、ことにしているのだが、若しやその開かずの部屋の奥の方に、もない。では、山の奥からさまよい出した一部との地域がある。では、山の奥からさまよい出した一部との地域がある。では、山の奥からさまよい出した一部との地域がある。では、山の奥からさまよい出した一部との地域がある。では、山の奥からさまないのではある。山賊共の地域が、一方には、山脈には、一方には、一方には、一方には、一方には、大口に近いるの様、一方には、大口に近いるのでは、大口に近い路をしている。

こまるほどではない。彼は枕許の手燭に火をつけて、小用にうに臆病にしてしまった。しかし、頭から蒲団を被ってちぢ闇と静寂と山中の一軒家という考えが、川手氏を子供のよ

いと見え、グッスリ寝入っている。見たが、二人は山慣れた健康者、夜半に目を覚ますこともなるのために廻り道して、一間隔てた老夫婦の部屋を覗いて

起き上った。

か、それとも、川手氏などには馴染のない小動物が住んでいと、星もない真暗闇、大樹の「梢」がカサコソと動くのは、夜鳥窓の外はすぐに大樹の茂みである。小障子を開けて空を見る「広い冷い廊下を踏んで、ガランとした昔風の便所に入った。

の笑い声を聞いたのである。にしみる。その静寂の中に、突然、実に突然、川手氏は人間、そうしていると、心が澄んで、夜の静けさがしんしんと身

るのか。

うにいつまで笑いつづける、まがう方なき女の笑い声であっの声であった。低いけれども、おかしくて耐らないというよ丁度便所の壁の外の辺、女の、恐らくは若い女の忍び笑い

朝になるのを待って、老夫婦にその由を告げると、ひどく笑 気のせいでなければ、大方いたずら猿めが迷い込んでいたの で、行手の闇から、足音も立てず、 れば四つ五つの幼児である。それが、目にもとまらぬ素早さ 小さなものであった。 る廊下の闇で、 益々不気味なことには、手燭をかざして、急ぎ足に通り過ぎ 調べて見る勇気もなく、 であろうと、一向取合ってはくれなかった。 女の笑い声は、 人の話声は、堀の小川のせせらぎを聞き誤ったのではないか。 われて、山住いに慣れない人はよくそんなことを云うものだ。 ったのだ。重ね重ねの怪異に、その夜はまんじりともせず、 川手氏の袖の下をくぐり、うしろの闇の中へ姿を消してしま Ш 手氏 はゾーッと背筋 夜の鳥が鳴いたのであろう。 スーッと何者かにすれ違ったのである。 ゜しかし、人間には違いない。子供とす そのまま寝室へ逃げ帰った。 がしびれるように感じて、外 矢のように走って来て、 廊下の小坊主は、 すると へ出て

-60-

開かれていた。

「なった懐中時計が裏返しになっていた。同じ卓上の手帳がスの位置が明かに変っていた。紫檀の大きな「卓」の上に置い込んで、自室に帰って見ると、床の間に置いたスーツ・ケー不思議なことが起った。川手氏が老人達の部屋で暫らく話してが、怪異はそれで終った訳ではない。翌日は昼間から、

一度なれば川手氏の思い違いということもあるだろうが、

ると、ちゃんとその位置が変っている。もう思い違いではな の位置をよく記憶して置いて、 二度三度同じことが起った。今度は念の為めに、色々な品物 暫らく部屋を開けて帰って見

広い邸内を二階も下もすっかり調べて見たが、 戸をあけて家捜しをして見ましょうと、その翌日は、三人で そんなにおっしゃるなら、御得心の行くように、邸中の雨 別に怪し いこ

い物の影はなかった。

いるのだ。そして、川手氏を驚かせようと、企んでいるの

い。この城郭の奥の方には、

老夫婦も知らぬ何者かが住んで

だ。

ともなかった。どの部屋にも人の住んでいたような気配は見

が行かなかった。何かしら身近に、人の匂が感じられた。妖と、老夫婦は笑い話にしてしまったが、川手氏はどうも納得 えぬのだ。 それごらんなさい。やっぱり猿かなんかのいたずらですよ

気とでもいうようなものが、ひしひしと身に迫るのを覚えた。

すると、その晩のことである。

こそ鳥の鳴き声か人 も知れない。 小用に起きた。今夜もひょっとしたら、あの笑い声がするか 話声を聞いた。 川手氏は深夜また目が覚めて、どこからか漏れて来る人の 川手氏は覚悟をきめて耳を澄ましていた。 そして、前の晩と同じように、手燭をつけ 間の声か聞き分けてやろう。 今度 7

い声だ。 蔽って、身体を曲げて、忍び笑いをしているような、あの笑 もない梢に、 窓から覗いた空には、やっぱり星がなかった。 川手氏は目の前に、 カサコソと不気味な音がしていた。 又してもあの笑い声だ、 その若い女の白い顔が見えるよ 若い女が、袂 そよとの風 で口を

うな気がした。

そこには一むらの南天が黒く押黙っているばかりで、 暗な庭の声のしたと思われる箇所へ手燭をさしつけた。 うに、廊下の端の雨戸の、枢をはずし、ソッと引き開けて、 めて置いた通り、 今夜こそ正体を見現わさないでおくものか。 恐らくは今の間に逃げ失せてしまったのであろう。 川手氏は急いでそこを出ると、音のせぬよ かねて心に定 人らし

直した痕ではない。 妙なものが、 上っている。 壁の表面にボーッと白く燐のような光がさしていたのである。 にも薄白く、目を圧するように浮上っているのだが、その白 廊下の斜向うに、 あまる巨大な円を描いて、その部分だけが映画のように浮き オヤ、 しかし、 何だろう。ギョッとして、よく見直すと、 人の姿は見えなかったけ 、に、鈎の手になった建物の大きな白壁が、忽ち川手氏の注意を惹いた。というのは、 たしかに何かの光である。 れど、 それよりも 直径二間にも 壁を塗り その しっと

……。あまりに大きすぎてよく分からぬが…… 模様だ。どこかで見たような模様だぞ。どこで見たのかしら も知れぬ蛇だ。 うな、 その丸い光のなかに、何かしら、 だが、 妙な黒い模様が、 怪異はそれだけではなかった。 イヤ、蛇ではない。 朦朧と見えて来るのだ。 無数の蛇でも這っているよ 何だか、えたい じっと見てい 何百何千と の知れぬ ると、

きにうたれた。驚きというよりも恐れであった。 心臓の鼓動がピッタリと止まってしまうほどの、はげしい驚 吐き気を催すような深い恐怖であった。 川手氏はその巨大な模様めいたものを見つめているうちに、 ゲエッ、

円形に下部に拡がっている。お化けの顔だ。一間四方のお化ったではないか。二つは、まん丸く上部に並び、一つは、楕してあれを忘れよう。その巨大な指紋には、三つの渦巻があの指紋であることが分って来たからだ。しかも、オオ、どう無数の蛇の塊と見えたのは、何千何万倍に拡大された人間

けが山中の一つ家の庭で、

ニヤニヤと笑っているのだ。

にその名を呼んだ。 をして、老夫婦の部屋の障子を乱打しながら、狂気のよう

て決してその心配はない。旦那様は幻でもごらんなさったのねて、敵の目をくらましておしまいなすったのだから、決しくらなんでも、その三重渦巻の悪者とやらが、こんな山の中、人に、事の次第を話して、庭を調べてくれるように頼んだ。いれた、のののののののののであり、何事が起ったのかと、びっくりして飛び起きた

紋など影も形もないのであった。時には、もうそこには何の光りもなければ、巨大なお化け指二人の老人が提が気をつけて、例の白壁のところへ行って見たるれでもと、頼むようにして、やっと庭を調べて貰ったが、

でしょうと、相手にしないのである。

聯想して、 我れと我が心に作り出したのかしら。 るところへ、 それではやっぱり幻を見た 何もない白壁の上に、 あの笑い声を聞い の たものだから、 ゕ いしら。 あんな恐ろしい物の影を、 怖 い 怖 つい復讐魔を と思って い

奴が庭に隠れていることもあるまいと、川手氏は昨夜の謎を日はうらうらと暖かい日ざしを味方に、まさか真昼間怪しいその晩は解き難い謎を残して、そのまま寝についたが、翌

確めるために庭へ降りて行った。

気付いた。
気付いた。
気付いた。
気付いた。
はいのでは、ヒョッコリと新しい石碑が建っているのにたうなのにとは、の本立の奥に目をやると、そこの小高くなっが幻燈の影だったとすれば、幻燈器械はあの辺に据えつけて影もなく、それと見まがう亀裂がある訳でもない。若しあれる陽の光で、例の白壁の表面を調べて見たが、別に怪しい

して半月も一月も前からあるものではなく、 はまだ磨いたばかりの真新しい墓石であることが分った。 めじめした薄暗い中へ入って行った。近よって見ると、 誰かの墓石らしいが、庭の真中に墓地があるなんて。 あるのは、 オヤ、 川手氏はいぶかしきまま、 今まで度々庭を散歩したのに、ここにこん 少しも知らなかった。 つい木立をかき分けて、 変だなあ。 あれは どうやら なも そのじ それ のが 決

クッキリと鮮かに刻んであった。十三年四月十三日歿」とだけ、今鑿を入れたばかりのように、部分が空白になっていて、その傍のところに、小さく「昭和妙なことに、その墓石の表面には、戒 名のあるべき中央の妙なことに、その墓石の表面には、戒 名のあるべき中央の

運び込まれたものとしか見えぬのだ。

ではないか。うことだ。今日は十二日だから、十三日と云えば明日の日附ば今月ではないか。そして、十三日といえば、アア、何といんが、よいか。そして、十三日といえば、アア、何といる、待てよ。昭和十三年と云えば今年ではないか。四月といえ

-62

和十三年、四月、十三日と刻ってある。態々指を当てて、一幻覚ではない。決して読み違いではない。この通り確かに昭川手氏は気でも狂ったのではないかと、我が目を疑った。

字一字をさすって見たが、決して読み誤りではなかった。

る内に、川手氏は見る見る幽霊のように青ざめて行った。のは変ではないか。死刑囚ででもない限り……、と考えていどんな重病人でも、いつ何日に死ぬと予め分っているという墓が、こうしてちゃんと用意されているのであろうか。だが、一体これは何を意味するのだ。明日死ぬに違いない誰かの

若しかしたら、これは俺の墓じゃないのかしら。

は、 るまいか。 よって復讐魔の為めに惨殺されるのではないだろうか。俺は 手を伸ばしているのではあるまいか。そうとすれば、この墓 に誰があんな妙な真似をするものか。三重渦巻の指紋の主だ! かの計画的な悪戯であったとすれば……何者かといって、 視幻聴と思えばそうのようでもあるが、若しあれらが、 石の謎の日附の意味も分って来る。「十三日」に「歿」する人 あいつが早くもこの隠れ家を探し当てて、奇怪な復讐の触 あの深夜の笑い声といい、 外ならぬ俺自身なのだ。俺は明日中に、何らかの手段に て自分自身の墓石を見せつけられているのではあ 昨夜の白壁の怪指紋とい い、 幻 何者 外

定、そこには、いくら探しても新しい墓石なんて、影も形も目を見交しながら、兎も角急いで現場へ行って見たが、案のこの事を告げたので、二人のものは、又かと云わぬばかりに、のを、やっと我慢して、喘ぎながら母屋に引返し、老夫婦に川手氏はクラクラと眩暈を感じて、今にも倒れそうになる

まるで狐につままれたような話だけれど、川手氏自身も、ないことが確められた。

あ

の大きな石碑が、かき消すようになくなっていることを認

めない訳には行かなかった。

るのではないだろうか。こんな山の中の独居がいけないのか視覚聴覚ばかりではない、脳細胞そのものが病気に罹っていめに、視覚や聴覚に異状を来たしたのではあるまいか。イヤ、川手氏は我が耳我が目が恐ろしくなった。重なる心痛の為

を打つことにした。そして博士の判断を求め、その結果によ相談したいことが出来たから、直ぐお出でを乞うという電報|手氏はそこで、老人に話して東京の宗像博士に、火急に不安を感じた。

も知れぬ。このままここにいては、気が狂ってしまうような

の異変も起らなかったのだが……ちつけることが出来た。そして、その晩寝につくまでは別段返事である。川手氏はその返電に力を得て、やっと気分を落ー午後になって博士からの電報が到着した。明日行くという

博士が来なかったのではない。 ででもしまったように、彼は、 座敷という座敷を見て廻ったが、 るのかと、庭内を隈なく探したが、 してしまったのだ。その翌朝、 た。まるで神隠しにでも遭ったように、 っぽになっているのを発見した。 しかし、 川手氏は遂に宗像博士に会うことは出来なかった。 その日限り、 川手氏の方が城郭から姿を消 老人夫婦は旦那様の蒲団が空 早朝から庭でも散歩してい 川手氏は屋内にもいなかっ どこにも姿はなかった。 空気の中へ溶け込ん つまり四月十三

っては別の場所へ居を移そうと考えたのだ。

日限り、この世界から消失せたのであった。

ったのかと、慄然として耳を澄ますと、つい障子の外の廊下 た。何か人声らしいものを聞いたからである。また幻聴が起 に添って、世にも不思議な事の次第を観察しなければならぬ。 のような怪異が起ったのであるか。我々は暫らく川手氏の影身がような怪異が起ったのであるか。我々は暫らく川手氏の影身が その夜更け、川手氏は例によって床の中でふと目を覚まし では川手氏は一体どうなったのか。その夜中彼の身辺にど

答えはなくて、ただ泣くばかりである。

げに、いつまでも泣きつづけている。誰だと声をかけても、

の辺で、シクシクと人の泣いている声がする。さもさも悲し

と、ソッと障子を開いて、廊下の暗を覗いて見た。 すると、今夜は声ばかりではなくて姿があった。両手を目 川手氏はまた手燭に火をつけた。そして蒲団から起き上る

着物と羽織、 子供ではない。 頭は少女のようなおかっぱだ。どうもこんな山里にいそうな でボタンをかける白いネルのシャツが覗いている。男の癖に に当てて、啜り泣いている子供の姿がハッキリと眺められた。 まだ四五歳の上品な可愛らしい幼児だ。絹物らしい筒袖 袖からは、明治時代に流行した、手首のところ それに風俗が異様に古めかしくて、現代の子 の

こんな服装をした子供の姿が焼きついている。誰だろう。 はこの通りの子供を知っている。遠い遠い記憶の中に、丁度 ょっとしたら幼年時代の遊び友達の面影ではないかしら。 川手氏は夢でも見ているような気持であった。変だぞ。俺

れぬ。

と、泣いている幼児の傍に近づいて行った。 何か物懐かしい気持に支配されて、思わず廊下に立出でる

> 時分、一体どこから来たんだね」 「オイオイ、泣くんじゃない。いい子だ。いい子だ。 お前今

おかっぱの頭を撫でてやると、子供は涙の一杯湛った目で

川手氏を見上げ、廊下の奥の闇の中を指さした。

「エ、お父ちゃんとお母ちゃんが、どうかしたの?」 「お父ちゃんとお母ちゃんが……」

「あっちで、怖い小父ちゃんに叩かれているの……」 子供はまたシクシクと泣き出しながら、川手氏の手を取っ

る。 て、助けでも求めるように、その方へ引っぱって行こうとす

常識を以てしては全く信じ難い事柄であった。 父と母とがこの邸の中で何者かに打が響されているなんて、つ家に、こんな可愛らしい子供が現われるさえあるに、その 川手氏は夢に夢見る心地であった。真夜中、 この 山 、その

来ず、いつの間にか、その妖しい子供と一緒に、足は廊下の 幼児の方へ引かれて行った。 しかし、 アア、俺はまた幻を見ているのだ。いけない、いけな いけないと思えば思う程、心は却って、いたいけな 取られた手を振り放すことも出 い。

奥へ奥へと辿っていた。

敷からまた別の廊下へと、グングン進んで行く。 じているらしく、少しも躊躇しないで、 いしそうな複雑な邸内の間取りを、子供の癖にちゃんと諳ん 子供は傍目もふらず闇 の中へ進んで行く。川手氏さえ戸惑 廊下から座敷へ、

はしなかった。それよりも、遠い昔、どこかで見たことのあ るようなその子供が、なんとやら懐しく、可哀想にも思われ 川手氏は相手があまりに幼い子供なので、身の危険を感じ

て、 くままにつき従って行くのであった。 取られた手を振り払うどころか、 自ら進んで、 子供の導

「小父ちゃん、 ここ

にも、 穴蔵へ、仮令いたいけな子供の願いとはいえ、 うやら階段がついているらしい。 と口を開いていた。床板が揚げ蓋になっていて、その下にど 戒心を起す筈であった。老人夫婦さえ知らぬ、 不断の川手氏なれば、この不思議な地下道を見て、 子供が立止ったので、手燭でそこを照らして見ると、 その廊 下の突当りに、 井戸のような深い穴がポッ '地底の穴蔵への入口である。 こんな秘密の 無謀に入って 忽ち警 カリ 意外

遊ん 様の朦朧とした心理状態で、 受取れぬ無警戒な心持、謂わば空を漂っているような一種異 考えていなかった。 だが、その時の川手氏は、この出来事を現実界のものとは でいるような漠然とした非現実の感じ、 明治時代の風俗をした幼児と、 つい子供のせがむままに、 恐怖も恐怖 夢の その 中で どは

行くようなことはしなかった筈である。

穴蔵の階段を底へ底へと降りて行った。

た。

なかった。

手 燭 動 うに動かぬ空気、ジーンと耳鳴りのする死のような静けさ。 と板壁に 敷程もある地下室に出た。床はコンクリート、 かぬ。 階段を降りて狭い廊下のようなところを少し行くと、 囲まれ ている。 は、 固体のように直立したまま、 湿っぽい土の匂、 押しつめられ 四方はグル 少しも揺れ 八 畳 たよ ッ

が 置 具とてもないガランとした部屋の片隅に、 その手燭をかざして、 あたりの様子を眺めると、何一つ道 たった一つ妙な箱

いてあるのが目を惹いた。

箱に、 見ると、その蓋の表面 いとしても読まぬ訳には行かなかった。 丁度寝棺ほどの大きさの、長方形の白木の箱だ。近づいて 川手氏自身の姓名が記されていたからである。 に、 墨黒々と何か書いてある。 思いもよらぬその木 読むま

"俗"名川手庄太郎」「昭和十三年四月十三日歿. アア、それは川手氏の死体を納める為に用意され た棺棚

あった。四月十三日歿という月日さえ、

あの庭の石碑に

刻み

で

日だな。 が正しい。 して、庭の石碑の下へ埋められるのか。 つけてあった日附と、ピッタリー致しているでは アア、そうだったのか。俺はこの棺に納められるのか。 イヤ、 愈々俺はそういう事になるのかな。 もう十二時をすぎているから、 十三日といえば、 今日という方 明 そ

こにも身を隠す場所はないではないか。 こへ消えてしまったのだ。 違いない。 な。子供は ふと気附くと、 魔法使の妖術で、 今まで側にいた子供の姿が見えぬ。 四方を板で囲まれた部屋の中、 煙のように消えてしまったのに アア、これも悪夢だ

夢見るように佇んでいる川手氏の耳元に、どこからともなく、 たのとは違って、 ボソボソと多勢の人の話声が聞えて来た。いつか寝室で聞い だが、 アア、 地底の怪異はそれで終ったのではなかった。 そうだったのか、 板壁のすぐ向うからのように近々と響いて 山の魑魅魍魎はこんなところ 茫然と

か紗を通して眺めるようで、まだ身にしみて感じられなかっ

奥底も知れない程の恐怖ではあったが、それが何

川手氏は悪夢を見ているような気持で、まだ本当には驚け

に隠れて、深夜の会合を催していたのか。

こに、 覗いたが、 かりに開い さの辺に、 でもないかと、探し求めた。 川手氏は 全く想像もしなかった不思議なものを見たのである。 一目覗くと、もう身動きも出来なかった。彼はそ 声する方の壁に近づい ているのが目についた。彼は中腰になってそこを 大きな節穴が一つ、サア覗いて下さいと云わ すると、その板壁の丁度目 て、どこかに秘密の出 ぬば の 入口 高

地底の殺人

られている。 男女が、後手に縛りつけられていた。女の方は猿、轡まではめ 立派な日本座敷があって、その床の間の柱に、夫婦と覚しき をこには、現代ばなれのした、ひどく古めかしい装飾の、 板壁の向側には、夢のような一つの世界があったのである。 かけぬ異変が生じたのではあるまいか。その地下室の穴蔵の アア、これが正気の沙汰であろうか。この世に何か思いも

な丸髷の鬢のほつれ撃十五六歳であろうか、 は その前に乱れた夜具が二つ敷いたままになっている。 ところを叩き起され、 しおり、 縛られてうなだれた二人の前に、黒っぽい、袷の裾を高々と 男は三十四五 [の鬢のほつれ艶めかしい美女。二人とも寝入っている 毛むくじゃらの素足を丸出しにした四十前後と見 歳 の、 友禅の長襦袢の襟もしどけなく、髪の毛を房々と分けた好男子、女 いきなり縛りつけられたらしく、 女は二 古風 つい

> 時代の感じである。どこかへ姿を隠した、 える大男が、黒布ですっぽりと頬被りをして、右手にドキド 眼前に現われたとしか考えられなかった。 やはり明治時代の服装をしていたことを思い合せると、 光景ではない。 ンプが、 キ光る九寸五分を持ち、 の内に時間 その異様の光景を、 薄暗く照らし出している有様は、 が逆転して、三四十年も昔の世界が、 室内の調度とい 高い竹筒の台のついた丸火屋の石油ラ 夫婦のものを脅迫している体である。 い、人物の服装とい さい前の幼児が、 どう見ても現代の 突如として 一 夜

ると、ホラ、 いたずらであろうか。だが、現代にそんな草双紙めい るんだぜ。ふた目と見られぬ、 で、美しい妻女の頬を、ピタピタと叩き始めた。 があり得ようとも思われなかった。 「強情を云わずと、金庫の鍵を渡さねえか。愚図愚図 頬被りをした強盗らしい男は、 山の魑魅魍魎のあやかしであろうか。それとも狐狸 お内儀のこの美しい頬っぺたから赤い血が流れ 恐ろし いきなり手にした短刀 い顔に早変りし して た現象 の類 てしま の刃 い の

それを聞いた賊は、鼻の先で、フフンとせせら笑った。うちにはあれっきりしか現金がないんだから」ているじゃないか。さっき渡した五十円で勘弁してくれ、今「金庫の中には書類ばかりで、現金はないって、あれ程云っ

うんだぜ。サア、鍵を渡さねえか」

すると、縛られている男が、

くやしそうに目をいからせて、

盗賊の覆面を睨みつけた。

金庫の中には一万円という札束が入っているのを、ちゃんと「ヤイ、手前は俺がなんにも知らねえと思っているんだな。

縛られている主人の顔に、サッと当惑の色が浮かんだ。見込んでやって来たんだ。ウフフフフ、どうだ図星だろう」

だけは、どうあっても渡すことは出来ない」「イイエ、あれは私の金じゃない。大切な預りものだ。あれ

さねえか。出さねえというなら、どうだ、これでもか。エ、鍵を出しねえ。俺はあれをすっかり貰って行くのだ。エ、出ものであろうと、なかろうと、こっちの知ったことか。サア、「そうら見ろ。とうとう白状してしまったじゃねえか。預り

これでもか」

伸びて、そこから濡紙にインキが浸み渡りでもするように、ればその青ざめた白蝋のような頬に、一筋サッと真赤な糸が轡の中から身の気もよだつ恐怖のうめき声を立てたのだ。見の耳をうった。今までうなだれていた女が、顔を上げて、猿と同時に、ウーンと押し殺したようなうめき声が、川手氏

見る見る血のりが頬を濡らして行く。

質いざ。お頂いざし 等だ。それを皆やるから、どうか手荒な事はよしてくれ。おその手文庫の中の札入れに、確か三百円余りの現金があった違い棚の下の地袋を開けてくれ。そこに手文庫が入っている。わしの今持っているだけのお金を皆やる。ここにある。この「アッ、何をするんだ。いけない。いけない。そ、それじゃ、「アッ、何をするんだ。いけない。いけない。そ、それじゃ、

「主人は拝まんばかりの表情で懇願する。 ・主人は拝まんばかりの表情で懇願する。 願いだ。お願いだ」

賊は憎々しく云いながら、直ぐさま地袋を開いて、手文庫て置こう」

をかき探し、

札入れの中の紙幣を懐中に入れた。

程の近さに迫って、覆面の中の素顔がはっきり見えたらしく、いたが、紙幣を取り出して立上ろうとする時、賊の顔が一尺をの間、主人は賊の一挙一動をさも無念そうに睨みつけて

「オオ、貴様は川手庄兵衛じゃないか」愕然として、

と叫んだ。

か、賊の姿や声までが、十歳の頃に死に別れた父親とそっく亡父は丁度あのくらいの年輩であったに違いない。気のせいじ名前ではないか。明治時代らしいこの光景と、庄兵衛と呼アア何という事だ。川手庄兵衛といえば、川手氏の亡父と同も節穴から覗いている川手氏の方が一層の驚きにうたれた。それを聞くと、賊もギョッとした様子であったが、賊より

無残な持兇器強盗なのだ。無残な持兇器強盗なのだ。ただの泥棒ではない、兇悪しかも、その父親は泥棒なのだ。ただの泥棒ではない、兇悪頃の父親の姿を、かくまでまざまざと見せつけられようとは。時間の逆転が起るなんて、五十近い息子が、自分よりも若い気でも違ったのか、夢を見ているのか、こんな不可思議な

った。 な、怖いもの見たさの、世にも異様な興奮に引入れられて行つけて、まるで、我が心の中の奇怪な秘密でも隙見するようではいられなかった。鼻の頭が痛くなる程、板壁に目をくッー手氏はもう別世界の景色を眺めているような呑気な気持

しい様子であったが、忽ちふてぶてしく笑い出した。 川手庄兵衛と呼びかけられた賊は、一応はギョッとした.

-6

りのような気さえするのだ。

貴様が我が物顔に振舞っているのが、無体療に触ってかなわりとした面で、御主人の一人娘、この満代さんをうまくたらりとした面で、御主人の一人娘、この満代さんをうまくたらじ山本商会の使用人じゃないか。それを、貴様はそののっぺんが何もそんなに威張るこたあなかろうぜ。元は貴様も俺と同が何もそんなに威張るこたあなかろうぜ。元は貴様も俺と同いの川手さ。貴様の義理のお父つあんに使われた川手さ。だ「ハハハ……、そう気附かれちゃ仕様がない。如何にも俺は「ハハハ……、そう気附かれちゃ仕様がない。如何にも俺は

んもよい婿を取り当てたともっぱら世間の、噂だ。 世界ので、山本のとはからって帰って見れば、山本の親爺さんはなくなって、たいさいうのも、思いに思った満代さんを、貴様に取られたで、とばかり店の金を遣い込んで、いたたまれず逃げ出したが、来ねえ。丁度今から八年前、貴様も知っている通り、俺はちてんな無茶な真似をするんだな」 になったのを、いまだに恨んでいるんだな。その意趣返しに「ハハア、すると何だな、川手、貴様はこの満代が俺のもの「ハハア、すると何だな、川手、貴様はこの満代が俺のもの

ペ

タと気味悪く叩くのであった。

若し満代さんが、あのい恥をかかせやあがったな。

を恨まずにやいられなかった。ひどい違いに、俺アくやしくって、くやしくって、天道さまの上になっていたかと思うと、俺と貴様の運勢の、あんまりは俺が山本商会の主人となり、何十万の身代を自由にする身若し満代さんが、あの時俺になびいていさえすりゃ、今頃

様達の運の尽きよ。にゃならねえ。いっそ浮世を太く短くと思いついたのが、貴っとうにしていたんじゃ、一生乞食同然のみじめな暮しをせエエ、ままよ。どうせ天道さまに見離されたこの俺だ。ま

ねえのだ」

血に濡れた短刀で、満代と呼ばれた美しい妻女の頬を、ペター、大は時代めいたせりふを、長々と喋り終ると、又しても、さねえか」さねえか」で、それを待ち兼ねてやって来たのだ。サア、金庫の鍵を渡るが、この自宅の金庫の中へ納まるという目ぼしがついたのーをれから様子を探って見ると、丁度今日、一万円という現

主人の山本は、身の自由を奪われながらも、負けてはいなくれ。ぐずぐずしていると貴様の身の為にならぬぞ」に持って兎や角云われる覚えはない。サア、トットと帰っての満代を、君から奪い取ったという訳ではなし、親の眼鏡に叶の満代を、君から奪い取ったという訳ではなし、親の眼鏡に叶川手、そりゃ逆恨みというものだ。何も僕が無理やりにこ

つけて猿轡をかましてあるし、それに淋しい郊外の一軒家、「ハハハハハハ、その心配はご無用だ。女中達はみんな縛り

大勢の店員の見ている前で、

よくも俺の旧悪を喋り立て、赤

たが、貴様はけんもほろろの挨拶、イヤそればかりじゃねえ、しょうことなしに、この間恥を忍んで貴様の店へ無心に行っ

々の失敗、女房と子供を抱えて、

まるで乞食同然の身の

上さ。

かった。

暮らしているに引かえ、この俺は朝鮮で目論んだ山仕事も散

にっくい貴様達夫婦が、こうしてお 蚕 ぐるみでぬくぬくと

りの巡回の時間まで、俺アちゃんと調べてあるんだ。サア渡貴様達がいくらわめいたって、誰が助けに来るものか。お巡

「どうするんだ?」

せ、渡さねえと……」

「こうするのさ」

代の頬にスーッと二筋目の糸が引いて、真赤な血がボトボト又しても、ウームという身震いの出るようなうめき声。満

「待て、待ってくれ」

と畳の上に滴った。

主人は身もだえして、ふり絞るような声で叫んだ。

目の小抽斗の、宝石入れの銀の小匣の中だ」ぬ。鍵はこの次の間の、金庫の隣の箪笥にある。上から三つ「鍵を渡す。大切な預り金だけれど、満代の身には換えられ

「ウン、よく云った。で、組合せ文字は?」

「オイ、組合せ文字はと聞いているんだ」

「ウーン、仕方がない。ミツヨの三字だ」

めて、主人が歯がみをしてくやしがるのを、賊は小気味よげに眺

凄い口調で云い残して、賊は次の間へ消えて行ったが、やるんだぞ。声でも立てたら、満代さんの命がねえぞ」よし、それじゃ、俺が次の間へ行ってる間、大人しくしてい「ウフフフス、金庫の暗号まで満代か。馬鹿にしてやがる。

「確かに貰った。久しぶりにお目にかかる大金だ。悪くねえヤニヤ笑いながら戻って来た。

やしばらくあって、袱紗包の札束らしいものを手にして、ニ

おいで遊ばすのだ」いいたいんだが、そうはいかねえ。まだ大切な御用が残っていいたいんだが、そうはいかねえ。まだ大切な御用が残ってなあ。……ところで、これで用事もすんだから、おさらばと

「エッ、まだ用事があるとは?」

主人の山本は、なぜかギョッとしたように、賊の覆面を睨

みつける。

方の用事が、まだすんでいないというのさ」「俺ア、今夜は貴様達二人に恨みをはらしに来たんだ。その

「じゃあ、貴様は、金を取った上にまだ……」

「ウン、先きに殺したんじゃ、金庫を開くことが出来ねえか

らね」

「エツ、殺す?」

「俺を殺すというのか」「ウフフフフ、怖いかね」

「オオサ、貴様をよ。それから、貴様の大じの大じの満代さ

んをよ」

ないのか」 して、大金を手に入れたじゃないか。それだけで満足が出来「なぜだ。なぜ俺達を殺さなければならないんだ。君はそう

いうものだ。自業自得と諦めるがいいのさ。 おおせっかいをして、俺の正体を看破ったのが運の尽きと 色男、どうだね。マアそう云った理窟じゃねえか。貴様が余 がででいたこの金を使うひまさえなかろうじゃないか。エ、 作の名を云って警察へ訴えて出るだろう。そうすれば、俺は での名を云って警察へ訴えて出るだろう。そうすれば、俺は でいうものだ。自業自得と諦めるがいいのさ。

して忘れたことのねえ恋の遺恨だ。 前の意趣ばらしだ。 ころを見せつけられちゃ、 たとしたところが、 っと憎いんだ。恋いこがれていただけに、 イヤ、 そればかりじゃない。仮令貴様が俺を看破らなかっ イヤ、 貴様達夫婦がそうして仲よくし 八年前から今日が日まで、 俺ア黙っちゃあ帰られねえ。 貴様も憎い 今の憎さがどれ程 が、満代はも てい 片時と 八年 ると

か、思い知らせてくれるのだ」

ねえ川手君、どうか許してくれ。命は助けてくれ。 を立てる。 世のものとも思われぬ凄惨なうめき声を発した。 いて、狂気のように賊を見つめながら、 身を石のように固め、 も満代の頬に当てた。 一万円は俺の自由意志で君に贈与したことにする。 「待ってくれ、 云いながら山本は、 賊は憎々しく云いながら、 決して決して警察に訴えたりなんか 川手、 ハラハラと涙をこぼした。 両眼が眼窩を飛び出すかとばかり見開それと知った満代は、恐怖の絶頂に、 俺は決して君の名を口外しない。 血に濡れた九寸五分を、又して 猿轡の し 奥から、 ない。 お願い だから、 その 誓い この だ

くれ。 も死に は悪くはしない。 れない。 幸福の真只中にいるのだ。 い子供は可愛 「川手君、君もまさか鬼ではあるまい。僕の気持ちを察して もう一度、 . 切 僕は果報者だ。 俺を助けてくれ。 あの可愛い子供達や、 い 昔の朋輩の気持になってくれ」 盛りだ。 これからも出来るだけの援助はするつもり 川手君、 満代はよくしてくれるし、二人の ねえ、 商売の方も順調に行ってい まだこの世に未練がある。 察してくれ。 してくれ。そして、昔の朋輩甲この事業を残しては、死んで お願いだ。 その代り、 っ る。 死に 小さ 僕は 切

> 限 め

りに訳も分らぬ事をわめき始めた。

て 前

板壁を乱打し始めた。

地だんだを踏みながら、

声を を固

いきなり拳

Ш

手氏はもう気も狂わんばかりになって、

きれらあ。そんな甘口に乗る俺じゃねえ。 て置いて、 口を叩く暇があったら、念仏でも唱えるがいい」 「フフン、 相変らず貴様は口先がうまいなあ。 一人いい子になって置い て、 昔の朋 マア、 女を横取 が そんな無駄 聞 い りし てあ

「くどいよ。 それじゃ、どうあっても許しちゃくれないのか」 許すか許さねえか、論より証拠だ。これを見る

そして、賊はいきなり短刀を満代の胸 **^**::::.° がいい」

歌舞伎芝居の殺し場そっくりの、あのいき声が聞えて来る。しかもそれは、一 れようとしているのだ。目を閉いでも、 川手氏は最早や見るに忍びなかった。 一寸だめし五分だめし、 やらしい、陰惨な、惻々 今二人の男女が殺さ 断末魔の悲痛なうめ

それを思い 前に現われるなんて、理性では判断出来ない不思議だけれど、 行かぬ。 夢にもせよ、 川手氏は余計たまらなかった。 として鬼気の身に迫るものであった。 その残虐を敢てしている人物が我が亡き父であると思うと、 止めなければ、 め 幻にもせよ、この残虐を黙って見ている訳には ぐらしている程、 止めなければ……。 自分よりも若い父親が、 川手氏は冷静では なかった。 目の

-70-

生体埋葬

又節穴を喰い入るように覗き込んでいた。それから十分程のち、川手氏はもうわめくことをやめて、

れ程残虐であり、夫婦のものの最期は、それ程物恐ろしかっることを差控えなければならぬ。川手庄兵衛なる人物は、そその間に板壁の向側で何事が行われたかは、ここに細叙す

たのである。

かの如く、ジジジジと音を立てて、異様に明滅していた。火屋の台ランプが、風もないのに、さまよう魂魄を暗示するれていた。苦悶と絶叫のあとに、ただ死の静寂があった。丸せに倒れていた。青畳の上には、池のように真赤なものが流いま、節穴の向うには、最早や動くものとては何もなかっいま、節穴の向うには、最早や動くものとては何もなかっ

った。

「一方の、襖が慌しく明けられて、二十五六歳程でた。

「一方の、襖が慌しく明けられて、二十五六歳程でた。

「は、一方の、襖がにしく明けられて、二十五六歳程でた。

「は、一方の、襖がにしく明けられて、二十五六歳程でで。

「は、一方の、襖がにと抱きしめ、四五歳の男の子のでた。

しぼった。 取り直すと、 ろしさに、 「旦那様、 乳母らしい女は、 サッと顔色を変えて立ちすくんだが、 奥様、 倒れている二人の側に駈け寄って、 しっ 一目、座敷の様子を見ると、 かりなすって下さいまし。 旦那様、 やがて気を あまりの恐 涙声を振り 旦

から頬にかけてベットリと赤いものが。半ば開いた唇と舌とが、紫色に変っている。しかも、その額は、異様な動き方で、ゆっくりと顔を上げた。オオ、その顔!まだことぎれていなかったと見えて、機械仕掛の人形のようこわごわ肩に手をかけて、揺り動かすと、主人の山本は、

「オオ、ば、ばあやか……」

「ぼ、ぼうや、ぼうやを、ここへ……」

びでございますよ。早く、早くここへ」「坊ちゃまでございますか、サ、坊ちゃま、お父さまがお呼血走った目が、座敷の隅におびえている男の子に注がれる。

くのであった。らせ、自分は甲斐甲斐しく、主人のうしろに廻って、繩を解らせ、自分は甲斐甲斐しく、主人のうしろに廻って、繩を解、乳母は幼児の手を取るようにして、瀕死の父の膝の前に坐

にかかって、我が子を膝の上に抱き寄せた。やっと自由になった山本の右手が、おぼつかなく幼児の肩

一家を、ねだやしにするのだ。……わ、わかったか。わかってだぞ。……ぼうや、かたきを、とってくれ。……あいつの、ろしたのは、かわて、しょうべえだ。……か、かわて、かわ「ぼうや、か、かたきを、討ってくれ。……お父さんを、こ

たか。 ……ばあや、たのんだぞ。……」

た。 ٢ クリと、 そして、ギリギリと歯噛みをして、すすり泣いたかと思う 幼児の肩をつかんだ指が、 そのままうっぷして、 もがくように痙攣して、ガッ 山本は遂に息が絶えてしまっ

まで余りの驚きに、泣く力さえなくおびえ切っていた男の子 ワ | 俄かに声を立てて泣き入った。 ッと泣き伏す乳母、火のつくような赤ん坊の泣声、今

して、貰い泣きの涙を拭わなければならなかった。 目もあてられぬ惨状だ。川手氏は又しても節穴から顔を放

前に引寄せ、決然とした様子で言い聞かせた。 暫くすると、乳母はやっと気を取り直して、 男の子を我が

ろしいことだ。

の遺言を守って、仇討ちをなさらなければなりません。あい 衛でございますよ。よございますか。 たらしい目にあわせた奴は、元お店に使われていた川手庄兵 ないかも知れませんが、お父さまやお母さまを、こんなむご になりまして。 つの一家を根絶やしにしてやるのです。 「坊ちゃま。今、お父さまのおっしゃったこと、よくお分り 坊ちゃまは、まだ小さいから、 坊ちゃまは、 お分りになら お父さま

は決して浮かばれないのです。 わせてやるのです。そうしなければ、お父さまお母さまの魂 にあわせてやるのです。 逃してはなりませんよ。そいつを、 いつには坊ちゃまよりは少し大きい男の子があるってい !いております。坊ちゃまは、その子供も決して見 いいえ、 お分りになりましたか」 もっともっとひどい目にあ お父さまと同じような目

乳母の恨みに燃えるまなざしが、まだ物心もつかぬ幼児の

顔を、喰い入るように睨みつけた。すると、男の子は、その刹那 からせ、

拳を握って、廻らぬ舌で甲高く答えるのであった。 亡き父親の魂がのり移りでもしたように、幼い目をい

ちゃう 「坊や、そいつ、斬っちゃう。 お父ちゃま、 みたいに、 斬っ

アア、何という怨恨、何という執念であろう。無残の最後を る。でなくて、幼い子供が、あの様な恐しい目をする筈がな とげた父母の魂は、今この幼児の心の中に移り住んだのであ い。あのような気違いめいた表情をする筈がない。 それを聞くと、節穴の川手氏は慄然として三度顔を背けた。 アア、

るそれがはっきりと輝いて行く。 途絶え、 たらしく、そこは墨を流したような闇に変っていた。 巨大な月のように、ぼんやりと白んでいた。 だが、あれは何だろう。闇の中に直径一丈程の丸いものが、 再び節穴に目を当てると、いつの間にか、台ランプが消え 物の動く気配とても感じられなかった。 そして、 見る見 人声も

丈の月輪が輝いているのだ。 なものが垂れ下ったらしく感じられた。 節穴から目を放していた僅かの間に、 正面に白い幕のよう その幕の表面に、一

三重渦状紋が。 千倍万倍に拡大されたあの指紋が、……お化のような、あの 光の度を増すにつれて、もつれ合う無数の蛇に変って行った。 オオ、そこにはあの無数の蛇が蠢 初めは、その月の中の兎のように見えていた薄黒いものが、 いているのだ。蛇ではない、

「オイ、 川手庄太郎、 貴様の父親の旧悪を思い知ったか。 そ

して俺の復讐の意味が分ったか」

な囁き声が聞えて来た。とこからともなく、不気味な声が、まるで内しょ話のよう

本始というものだ」(一家を根絶やしにする事を、一生の事業として生きている山「俺は今、貴様の見た山本の息子、始というものだ。貴様の

のだ。 俺の両親の恨みはそんな手ぬるい事で霽れるものではない。 え待たないで、 目には目を、 捕され、 縛りにでもあったように、身動きさえ出来ない感じであった。 に感じられるのだ、 低い囁き声が、地下室全体に轟き渡って、まるで雷鳴のよう のようでもあり、うしろからのようでもあり、 「貴様の父川手庄兵衛は、 声はどこから響いて来るのか見当がつかなかった。前から 父母の恨み、 牢獄につながれる身となった。無論死刑だ。しかし、 歯には歯をだ。ところが、庄兵衛はその死刑さ 牢獄の中で安らかに病死をしてしまった。 俺の恨みは、 川手氏は全身から脂汗を流しながら、 乳母の訴えによって、間もなく逮 一体どこへ持って行けばよ しかし、 その ア

を押え押えて、機の熟するのを待った。目には目を、歯には俺はその準備の為めに、四十年の年月を費した。はやる心

を与えなくてはならぬのだ。は父母の魂が浮ばれぬ。貴様にも、父母と同じ苦しみ悲しみ歯をだ。ただ貴様を殺すのはたやすい。しかし、それだけで

るのだ」
て、第三矢は今、この瞬間、貴様の心臓を射抜こうとしていて、第三矢は今、この瞬間、貴様の心臓を射抜こうとしていのだ。第一矢は妹娘を斃した。第二矢は姉娘を斃した。そして貴様の出世が絶頂に達した今、俺の毒矢は遂に弦を離れた待った。子供を生み、その子が立派に育つのを待った。そしそこで、俺は我慢に我慢を重ねて貴様の立身出世するのを

にも知らなかった。

「は美子となどでできょう。 は美古と教育の人となって現在の地盤を築いたのだが、母はったが、しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。しかし何の罪によって入牢したかは、誰も教えてくれいた。知って秘し隠しに隠して

か」なったのか、それとも何か腑に落ちぬことでもあるというの「川手、何をぼんやり考えているのだ。恐ろしさに気が遠く

「腑に落ちぬ」

囁き声がもどかしげに聞えて来た。

焼は父の罪を知らぬのだ。今聞くのが初めてだ。証拠を見

せろ。俺は信じることが出来ない」

ちっとやそっとの恨みで、 を費して貴様に復讐を企てたことが何よりの証拠ではないか。 「ハハハハ、 証拠か。それは、この俺が、 人間がこれ程の辛苦に堪えられる 山本始が、四十年

と思うのか」 「今のは、

、お芝居をして見せたのだな」

て地底演劇をやって見せたのだ。 「そうだ。貴様に十分思い知らせる為に、多額の費用を使っ あの無残極まる貴様 の親 父

うと考えたからだ。 の所業を目のあたり見せたら、いくらぼんやり者の貴様に 俺のやり場のない無念さを、悟らせることが出来るだろ 口で話した位で、あの残虐が分るもので で

はない。

年後の今も、昨日のことのようにまざまざと思い出されるの がき廻った両親の苦悶のさまが、 俺は子供心にも、 あの父の断末魔の苦しみと、血の海にも 目の底に焼きついて、 数 十

しみが、消えてしまうと思うのか。俺の父は川手の一家を悉 貴様の親父が牢死した位のことで、この恨みが、 この 悲

生涯は父と母との復讐の為に捧げられたのだ。 く亡ぼさなくては浮ばれないと遺言した。俺はその遺言を果 したいばかりに、今日の日まで生き永らえて来たのだ。 俺の

ったかを、今こそ思い知るがいい。 川手、俺の父と母と、俺自身との怨恨がどれ程のものであ 死んでも死に切れないのだ」 俺は貴様一家を皆殺しに

「だが、若し俺が貴様の復讐に応じないといったら、どうす

「逃げるのか」

るのだ」

するまでは、

「逃げるのではない。 立ち去るのだ。 俺にはここを立ち去る

自由がある」

「ハハハハハ、オイ、 川手、それじゃ一つ君のうしろを振返

って見たまえ」

るらしい事に気附いた。そして、 物を云っていたが、][[手氏はそれまで、 この時初めて、 節穴の向うの巨大な指紋を睨 ハッと振向くと、淡い蝋燭 どうやら敵はうしろにい み つけて

の間に忍び込んだのか、二人の男が立ちはだかっているのを の光に照らされて、そこに、一間とは隔たぬ目の前に、 、いつ

発見して、ギョッと息を呑んだ。

が、小型ピストルを構えて、 二人だ。一人は一方の目に大きな眼帯を当てた、 オオ、 一人は黒眼鏡をかけた、痩せっぽちの小男だ。その二人 あいつらだ。犯罪の行わ じっと川手氏に狙いを定めてい は眼帯を当てた、無精鬚の大いれる毎に姿を現わしたあの

して見ろ、 「ハハハハハ、これでも逃げられるというのか。 貴様の心臓に穴があくぞ」 身動きでも

るのだ。

大男の方が、今度はハッキリした声で、 さも愉快らしく怒

鳴った。

川手氏は、 あくまで用意周到な相手に、 最早や観念 の ・眼を

閉じる外はなかった。

た。オオ、そこには、 すると、大男は左手を上げて、 君達は俺をどうしようっていうのだ」 あの薄気味悪い棺桶が、 静かに地下室の隅を指さし 主待ち顔に置

一君はこの中へ入るのさ。 ちゃんと君の名が書いてあるじゃ かれてあるのだ。

って、生きながら土の底深く埋められるのだ」ね。それじゃ一つ味わって見るがいい。君はこの棺の中に入を想像して見たことがあるかね。ハハハハハ、ないと見えるないか。川手、君はこれまでに、生きながらの埋葬という事

寒さこ、歯り艮がガチガチ鳥丿台かこ。身体中の血液がスーッと引潮のように消えて行って、異様な一川手氏は立っている力もない程の烈しい恐怖に襲われた。

「だ、誰か、誰か来てくれエ!」寒さに、歯の根がガチガチ鳴り始めた。

「だ、誰か、誰か来てくれエ!」

しった。 土気色の顔、紫色の唇から、気違いのような絶叫がほとば

を聞きつけて、助けに来てくれると思っているんだね。フフて逃げ出すくらいのものだ。アア、君は爺や夫婦が、その声たって、ここは山の中の一軒家だぜ。鳥や獣物がびっくりし「ハハハ……、駄目だ、駄目だ。君がいくら大きな声を出し

フ……。

ぜ。 なのさ。 かろうじゃないか。 見れば、 というのは、外でもない、今君が見た山本家の乳母だった女 ところがね、 もうこうなったら、 まさか女房を裏切って、 つまり俺の味方なのだ。 川手君、それは飛んだ当て違いというものだ 何もかも云ってしまうが、 爺やの方も、 俺の邪魔立てをする筈もな 夫婦であって あの 婆や

夫婦が俺の手下だとすると、そんなところへ、宗像先生が君、ハハハ……、君は不思議そうな顔をしているね。あの爺や

しまおう」

云うままになった君の不運と。諦めるがいい」の先生、見かけ倒しのボンクラ探偵だぜ。そんな探偵さんのいたところへ、先生の方で飛び込んで来たのさ。あの三角髯一杯食わされたという訳だよ。俺がちゃんとお膳立てして置も変な事はないさ。宗像大先生は、この俺のためにマンマとを連れて来たのは、変だとでもいうのかね。ハハハ……、何

…よし、それじゃ俺が黙らしてやろう」 というのだ。……まだ泣いているな。往生際の悪い して、 らなかった。 白そうに笑うのだが、 ないか。みっともない、その態は何だ。オイ黙らんか。 何かしら訳の分らぬ事を絶叫しないではいられなかった。 「ハハハ……、オイ川手、 眼帯の大男山本始は、 恐怖の余り魂も身に添わず、無駄とは分っていても、 ただ、あの真暗な「死」が、目の前にチラチラ 川手氏は、 得意らしく種明かしをして、さも面 貴様も実業界では一廉の人物じゃ その言葉さえ殆んど耳に入 黙れ

されるがままになっている。まった。川手氏は何の抵抗力もなく、まるで人形のように、一方の手でギュッと喉をしめつけ、一方の手で口を蓋してし云いながら、大男はいつの間にか川手氏のうしろに廻って、

らグルグルと巻きつけ始めた。出して、素早く川手氏の足元に走り寄り、いきなり足の先か出して、素早く川手氏の足元に走り寄り、いきなり足の先かそれと見ると、黒眼鏡の小男は、どこからか長い細引を取

「よし、お前、足の方を持つんだ。そして、棺の中へ納めて荷物のように、身動きも出来ず縛り上げられてしまった。 足から腰、腰から両手と、見る見る内に、川手氏は無残な

力まかせに抱き上げた。 大男の指図に、小男は無言で川手氏の膝の辺に両手を廻し、

た。 川手氏は不思議にはっきりと、ある異様な事柄を気附いてい そうして宙を運ばれながら、生きた心地もない焦慮の中で、

かい息遣いなどが、女としか思われないことであった。 の感触、 という事であった。 というのは、黒眼鏡の小男が、どうも本当の男性では 時々触れ合う胸の辺の肌触り、それに、小刻みな柔 膝に巻きついたネットリとしなやかな腕 な い

がっているか、君に想像がつくかね。 る筈もなかった。 てしまうと、もうそんなことを考えつづけている余裕などあ かりで、やがて例の不気味な寝棺の中にドサッと抛り込まれ 「川手、俺はとうとう目的を達したんだ。俺がどんなに嬉 だが、それは、慌しい心の隙間に、 一瞬チラッと閃いたば

父と母とのあの血みどろの妄、執を、今こそはらすことが出来 たのだ。 四十年の恨みを、俺の Ĺ

たのです。 らないかも知れません。 あなた方のあの残酷な御最期にくらべては、これでもまだ足 今生きながら棺桶の中へとじこめられようとしているのです。 お父さん、お母さん、これを見て下さい。あなた方の敵は、 しかし、僕は智恵と力の限りを尽し

す。と云って、耳を削ぎ鼻を削ぐ一寸だめし五分だめしも、 その苦しみの時間は知れたものです。それよりも、 いと云って、 思いに殺すなんて、まるで相手を許してやるの 生きながらの埋葬ほど恐ろしいものはないと 、何が恐ろ も同 . 然で

> 母さん、 思います。無論、それ程の苦しみを与えても、お父さん、お ません。どうかこれで思いをおはらし下さい かしないかです。でも、僕の智恵では、その上の思案も浮び あの時のあなた方のお苦しみには、やっと匹敵する

と渇きとに責められて生きていなければならないのだ。 まうのだ。そこで、一日も二日も三日も、 しさが、君には想像が出来るかね。真暗な土の中へ入ってし 空気の不足と餓え

ところで、川手、この生きながらの埋葬というも

ر ص

の恐ろ

蛆虫が、君の身体中を這い廻って、肉や臓腑を、ムチムチと啖^。葉掻きに藻掻いて、やっと息が絶えると、待ち構えていた 君はその血をさえ、餓鬼のように貪り啜ることだろうて。 い始めるのだ。……」 の生爪がはがれて、血まみれになるばかりだ。フフフ……、 いくら藻掻いたところで棺桶の蓋は開きやしない。君の指

残な宣告を聞いていた。イヤ一語一語を聞き取る程の余裕は たっていた。 身の想像力によって、魂も消えるばかり、 なかったけれど、 川手氏は棺桶の中に身動きも出来ず横わったまま、この 聞かなくても、 生埋めの恐ろしさは、彼自 ひしひしと思いあ 無

こ。自分では何か大声に叫んでいる積りで、血の気の失せた唇を、 鯉のようにパクパク動かしているばかりであった。 口が自由になっても、 もう叫び声さえ出なかった。 ただ、

に一言云って聞かせて置くことがある。……それはね、こん な目に会うのは、 「では、もう蓋をしめるぜ、 分らんかね。 君が最後ではないということだよ。フフフ 君は知るまいが、君には一人の妹がある 観念するがいい。だが、 その前

らしをしていた頃、 んだ。君の父親があの泥棒をした金で、数ヶ月の間贅沢な暮 ある女の腹に出来た子供があるんだ。

そして、君さえ知らぬその妹を見つけ出したのだ。 てやしないかと、どれ程苦心をして探し廻ったか という誓いを立てた。だから、どっかに庄兵衛の血筋が残っ 俺は川 手の血筋 は一人残らず、この世から絶やしてしまう 知 れない。

地獄で目出度く兄妹の対面をするがいい。イヤ、地獄といやそいつも、今に君のあとを追って、地獄へ行くことだろう。 ハハハハ……、久しぶりで、 君の二人の娘も、そこで君を待っているはずだったね。 親子の対面も出来るというもの 地獄といや

讐の為に捧げて来たのさ。 に大きくなったのさ。そして、 はまだ乳母に抱かれた赤ん坊だったが、あの赤ん坊がこんな る黒眼鏡の男は、実は男じゃない。 それからね、序にもう一つ云い聞かせて置くが、ここに 君がさい前覗き穴から見た女だぜ。と云っても、 兄の手助けをして、 女だよ。エ、誰だと思う 一生を復 あ の 頃 い

この妹にも存分恨みをはらさせたのだ。オイ、お前も今わの君の二人の娘も「対して作」」(ませてやれ の断末魔の血を啜って、どんな女に生長したか、よく顔を拝

山本始の指図 大きな黒眼鏡を取って見せた。 【に従 つて、 男装の 女 は 川手氏の上に 顔を近よ

女の顔を見た。 蝋燭の光の陰に、眼界一杯にひろがった中年の 気違いのように上ずった、 二つの恐ろしい目

を見た。

さん、あたしこれで胸がせいせいしたわ。サ、早く蓋をして、 した。そして、いきなり川手氏の顔に唾を吐きかけた。 「ホホ……、泣いているわ。顔の色ったらありゃしない。 兄

女はじっと川手氏の顔を睨みつけて、キリキリと歯

噛みを

釘を打ちつけましょうよ」

揃って、 き山本夫妻の怨霊のさせる業か、この復讐鬼兄妹は、揃いも るで日常茶飯事のように、 妹は兄に輪をかけた狂人であった。この無残な言葉を、 その計画の奇矯、 精神的不具者としか考えられなかった。その所業の 到底常人の想像し得る所ではなかっ 子供の無邪気さで云い放った。

匹の鬼の顔が、 せるような金槌の音が響き渡った。 赤茶けた蝋燭の火が明滅し、ニヤニヤと不気味に笑う男女ニ やがて、鬼気漂う地底の密に、一打ち毎に人の心を凍ら 闇の中に消えたり浮上ったりした。 その金槌 の音につれて、

入って行く。 な廊下を幾曲りして、 釘を打ち終ると、二人は棺桶を吊って窖の外に出 雨戸を開き、 そのまま庭の木立の中へ

墓石を見たあ い墓穴が地獄への口を開いていた。 大樹の茂み の同じ場所に、何時の間、に囲まれた闇の空地、昨 昨日川 に に誰が掘 手氏が自分自身の ったのか、

かい土の上で、足を揃えて地均しを始めた。 し入れると、その辺に投げ捨ててあった鍬とシャベル 二人は小さな蝋燭の光をたよりに、 棺の上に土をかけた。 、そして、穴を埋め終ると、 棺桶. をその穴の その柔 を取っ 底に落

-77-

もいつまでも、地均しの踊りを踊り続けるのであった。の影法師は、まるで楽しい舞踏ででもあるように、いつまでさえ加わって、地上に立てたほの暗い蝋燭の光の中に、二つ足拍子も面白く、やがて、男女二いろの物狂わしい笑い声

錫の 小 函 こばこ

お話は一転して東京に移る。

のをした。にボート遊びをしていた若い男女が、世にも不思議な拾いもあの無残な川手氏の生体埋葬が行われた翌日の夜、隅田川

た川の真中を漕ぎ廻っていた。いつきから、もう店開きをした貸ボートを借りて、人目離れいつきから、もう店開きをした貸ボートを借りて、人目離れの中で、たった二人で話をするのには、これに限るという思まだ季節には早いけれど、川風が寒いという程ではなく、闇浅草のあるカフェーの女給であったが、丁度土曜日のこと、男は丸の内のある会社に勤めている平凡な下級社員、女は

かしら」

やがて十時であった。

は、一つも見当らなかった。物好きもなく、暗い川面には、彼らの外に貸ボートの赤い行燈を貯すするないこの夜更けに、ボート遊びをしているような

抜けようとした時であった。夢中に話し込んでいる二人の間の種も尽きず、ゆっくりと櫂を操りながら、今吾妻橋の下を彼らはその淋しさを、却ってよい事にして、楽しい語らい

ボートの底に転がった。へ、ヒューッと空から何かしら落ちて来て、女の膝をかすめ、

「アラッ!」

ないのだ。はない、橋の上を通りかかった人が、投げ落したものに違い、なは思わず声を立てて、橋を見上げた。空から物が降る筈

っていたのだ。もなかった。怒鳴りつけようにも、相手はもう立去ってしましい辺りを見上げたが、その辺に川を覗いているような人影ー男は櫂を一掻きして、ボートを橋の下から出し、それと覚

「痛い?」ひどく痛むかい」

まだ胸がドキドキしている。誰かがいたずらしたんじゃない「それ程でもないわ。でも、ひどいことをするわね。あたし、うに訊ねた。 女が渋 面を作りながら膝をさすっているので、男は心配そ女が渋 面を作りながら膝をさすっているので、男は心配そ

-78-

よ」というでは、川の中へ捨てたつもりで行ってしまったんだ投げたんだよ。川の中へ捨てたつもりで行ってしまったんだいなかったから、きっと、こんな所に舟なんかないと思って「まさか。それに、あの時、ボートは橋の下から半分も出て

に御丁寧に縛ってあるようよ」これ随分重そうなものよ。アラ、ごらんなさい。何だかいや「そうかしら、でも危いわねえ。軽いものなら構わないけど、

げ、行燈の火にかざして見た。 男は櫂を離して、ボートの底に転がっている一物を拾い上

それは石鹸箱程の大きさのもので、新聞紙で丁寧に包み、

上から十文字に細い紐で括ってあった。

「あけて見ようか」

男は女の顔を眺めて、冗談らしく云った。

「汚いわ、捨てておしまいなさい」

「だが、若しこの中に貴重なものが入っていたら、勿体な女が顔をしかめるのを、意地悪くニヤニヤして、

くなって、川の中へ捨てたというようなことかも知れないぜ。じゃないかな。誰かが盗んだけれど、持っているのが恐ろしからね。何だかいやに重いぜ。金属の箱らしいぜ。宝石入れ

男は多分に猟奇の趣味を持っていた。

よくある奴だ」

「慾ばっている! そんなお話みたいなことがあるもんです

るまい。君、この行燈を持っていてくれよ」りする奴はないぜ。兎も角開けて見よう。まさか爆弾じゃあ「だが、つまらないものを、こんなに丁寧に包んだり縛った

けてやるのであった。訳でなく、蝋燭のついた行燈を取って、男の手の上にさしつ男の酔狂を笑いながら、しかし、女も満更ら好奇心がない

の上にかがみ込んで、注意深く紐を解き始めた。 男はその新聞包をボートの真中の腰かけ板の上にのせ、そ

「いやに沢山結び玉を拵えやがったな」

ながら開いて行った。やっと紐をはずすと、幾重にも重ねた新聞包を、ビクビクし、小言を云いながら、でも辛抱強く、丹念に結び玉を解いて、

「ホーラごらん。やっぱり捨てたもんじゃないぜ。錫の小函

こりゃ面白くなって来た」したら、ラヴ・レターかなんか入っているのかも知れないぜ。中へ入れて捨てたんだ。して見ると、この中には、ひょっと中のものが浮いたり流れたりしないように、こんな重い函のだ。重い筈だよ。ウン、分った。この函は重しに使ったんだ。

よっぽど人に見られては困るものに違いないわ」ているんじゃない?(こんなにまでして捨てるくらいだから、「およしなさいよ。何だか気味が悪いわ。いやなものが入っ

らしく小函の蓋に手をかけ、ソロソロと開いて行った。男はまるで爆弾でもいじるような風におどけながら、勿体「だから、面白いというんだよ。マア、見ててごらん」

「ハンカチらしいね」

男は拇指と人差指で、ソッとそれの端をつまみ上げ、函の外でいい函の中にはハンカチを丸めたようなものが入っていた。

取出した。

ているわ」 「ア、いけない。捨てておしまいなさい。血だわ。血がつい

ットリと染み込んでいた。 如何にもそのハンカチには、ドス黒い血のようなものがベ

は一入激しくなりまさった。それを見ると、女が顔色を変えたのに引かえ、男の好奇心

ルースでなどにから。の間に、嘗て愛読した探偵小説の中の、それに似た場面をあまれたという興奮のために、目の色が変っていた。彼は咄嗟(彼はもう無言であった。何かしら重大な事件の中にまき込

ほの暗い行燈の下で、血染のハンカチが注意深く開かれてれこれと思い浮べていた。

行った。

「何だか包んである」

男の声は、囁くように低かった。顔をくっつけ合った二人

には、お互の鼻息が、異様に耳についた。

「怖いわ。よしましょう。捨てておしまいなさいな。でなけ

ればお巡りさんに渡した方がいいわ」

まったハンカチの上に、何かしら細長いものが、鈎なりに曲だが、男はもうハンカチを拡げてしまっていた。真赤に染

って横わっていた。

指だよ」

男が鼻息の間から喉のつまった声で囁いた。

マア!

女はもうお喋りをする元気もなく、行燈をそこに置いたま

ま、顔をそむけてしまった。

「女の指だよ。……根元から切取ってある」

男が憑かれた人のように、不気味な囁きをつづけた。

れは一体どうした訳だろう。……犯罪だ!(君、これは犯罪(指を切取って、川の中へ捨てなければならないなんて、こ

だよ。……悪くすると殺人事件だよ」

怪人物R・K

げ捨てられた奇怪な錫の小函の中から、今斬り取ったばかり隅田川の夜更け、ボート遊びの男女が、吾妻橋の上から投

のことである。のような生々しい人間の指を発見して、色を失った、その翌朝のような生々しい人間の指を発見して、色を失った、その翌朝

ねて見る気になり、丸の内の宗像探偵事務所に立寄った。警視庁の中村捜査係長は、出勤の途中、ふと宗像博士を訪

た。 でもないかと、時々宗像探偵事務所を訪問して見るのであっの捜査に当っていることでもあり、何か新しい手掛りの発見の犯人の事件では、博士は被害者川手氏の依頼を受けて、その犯人の事件では、博士は被害者川手氏の依頼を受けて、そ相手のようにしていたのだが、殊に今度の三重渦巻の怪指紋日頃から深く傾倒しているので、何かというと、博士を相談中村係長は、民間探偵とはいえ、宗像博士の学識と手腕に、

宗像博士は中村警部の顔を見ると、

のところへ出向こうかと思っていたところです」

といいながら、先に立って、警部を奥まった化学実験室へ

案内した。

「そうですよ。マアお掛け下さい。色々重大な御報告がある「ホウ、そうでしたか。じゃ、何か新しい手掛りでも……」

のです。無論例の三重渦状紋の怪物についてですよ」

とを喜びながら、目を輝かして博士の顔を見つめた。

中村警部はそれを聞くと、早朝の訪問が無駄でなかったこ

「そいつは耳よりですね、一体どんなことです」

その一つは、川手庄太郎氏が行方不明になってしまった事

です」

「エッ、行方不明に?」

重ねて連れて行ったのに、どうしてこんなことになったのか、ったことは、先日お話した通りですが、あれ程用心に用心を思っているのです。川手氏を甲府の近くの山中の一軒家へ 産ーイチンです。これは僕に全責任がある訳で、全く申訳ないと

ないのです。 山の中から電報を打つくらいですから、よくよくの事に違いったのです。用件は書いてありませんでしたが、あの不便な一昨日でした。川手氏から至急来てくれという電報を受取殆んど想像もつきません。

っと川手氏のところへ行ったのです。いことがあったものですから、一日延ばして、昨日の午後やところが、その日僕は別の事件で、どうしても手の放せな

見えぬ 庭から附近の山までも まで待っても食事にもいらっしゃらないので、家の中は勿論、 お寝みになったまま、 ながら、今朝から川手氏の姿が見えないというのです。 行って見ると、 というのです。 留守番 探し 蒲 団 の爺さん夫婦のものが、 . がも 廻ったのだけれど、どこにも姿が ぬけの殻になっていて、 オロオ 昨 夜 ا ا ا いつ

りません。 えられない。 着 のまま汽車に乗る筈もなく、 ではない、 のままで行方不明になってしまったのです。 調べて見ると、川手氏 てっきり何者かに攫われたのです。イヤ、 あの三重渦巻の怪物に連れ去られたのに違 の衣類はちゃんと揃っている。 自分の意志で家出をしたとは考 まさか寝 何者 いあ 間 寝 間

を得ず、僕自身で出来るだけのことをしました。からお出でになるのじゃ夜中になってしまいます。で、やれ僕は余程あなたにお電話しようかと思ったのですが、東京

せんでした。ている筈ですが、昨夜僕の帰るまでには、何の発見もありまている筈ですが、昨夜僕の帰るまでには、何の発見もありまうなこともやって見ました。その捜索はまだ今でも続けられあちらの警察と青年団の手を借りて、一寸した山狩りのよ

う怪し 車しなかったかと、 も、駅員には少しも気附かれなかったのです。 人物が下車しなかったか、 一方僕は自身で、 い人物の乗降はなかったのです。 訊ねて見たのですが、 附 近 の三つの 何か大きな荷物を持 駅に電話 イヤ、 どの駅にもそうい をか け った人物が乗 あったとして て、 怪 し

件が待ち構えていたのです」 性が待ち構えていたのです」 の仕業とすれば、その本拠は東京にあるのですし、いずれ 大の仕業とすれば、その本拠は東京にあるのですし、いずれ の世業とすれば、その本拠は東京にあるのですし、いずれ ので僕は一先ず東京へ帰ることにしました。例の怪指紋の犯

「エッ、ここにもですって?」

さないではいられなかった。き糺そうとしていたのだが、今はそれも忘れて、膝を乗り出中村警部は、川手氏の行方不明について、もっと詳しく聞

「そうです。僕が来る少し前、この事務所へ妙な品物が届け

-81

です。その品物が川手氏の死をはっきりと語っているのです」 す必要はないと思いました。あの人はもう生きてはいない られたのですが、それを見て、僕は川手氏の行方を急いで探 の

「これですよ」

です」

「それは一体何です。どうして、

そんな事がお分りになるの

函を指し示して、 宗像博士は、 化学実験台の上に置いてある、小さな錫の小

たといいます」 立去ったというのです。その男はひどく青ざめて、震えてい けて、これと一緒に僕に渡してくれといって、逃げるように 不在だというと、手帳の紙をちぎって、こんなことを書きつ 「今朝、三十歳位の会社員風の男が僕を訪ねて来て、助手が

に記してあった。 中村警部に渡したが、 云いながら、博士はポケットからその手帳の紙を取出して、 それには鉛筆の走り書きで、左のよう

今出勤を急ぎますので、 たかは、小函の中のものをよくごらん下されば分ります。 まお届けします。 この品を拾いました。包んであった新聞紙も紐もそのま 昨夜午後十時頃、ボートを漕いでいて、 なぜこの品を先生のところへ持って来 後刻改めてお邪魔します。 吾妻橋の下で、

函じゃありませんか。 かがこの品を隅田川へ投げ捨てたという訳ですか。綺麗な小 「フーム、吾妻橋の下で拾ったというのですね。すると、誰 中に一体何が入っているのです」

> なさい」 「実に驚くべきものが入っているのです。マア開けてごらん

博士は錫の小函を中村警部の方へ押しやった。

で括ってあったのですね。ひどく用心深いじゃありませんか」 「錫の函を、こんなに沢山の新聞で包んで、その上をこの紐 警部はそんな事を云いながら、拇指と人差指で、 小函の蓋

血のようですね

をソッとつまみ、静かにそれを持ち上げた。

指だ。 気味な細長いものが現われて来た。指だ。人間の指だ。鋭利 に取出して、 な刃物で根元からプッツリ切断した、 めて押し込んである。中村氏はそのハンカチを、実験台の上 小函の中には、読者は既に御存知の血染めのハンカチが丸 、恐る恐る開いて行った。 開くに随って、何か不 まだ生々しい血染めの

「女の指のようじゃありませんか」

警部は職掌柄、はしたなく驚くようなことはなかったが、

その顔には流石に緊張の色を隠すことが出来なかった。 「僕もそう思うのですが、しかし女と極めてしまう訳にも行

きますまい。華奢な男の指かもしれません」 「しかし、この指が川手氏の死を語っているとい

うの

顔を

これが川手氏の指だとでもおっしゃるのですか」

見比べるようにして、不審らしく訊ねた。 警部は血に染まった女のように細い指と、 宗像博士の

佐藤恒太郎

から、その指をもっとよく調べて下さい」 「イヤイヤ、そうではありません。ここに拡大鏡があります

博士が差出す拡大鏡を受取ると、警部はポケットから鼻紙

を取出して、それで指をつまみ上げ、 拡大鏡の下に持って来

熱心に覗き込んだ。

「オヤッ、この指紋は……」

流石の警部も、 今度こそは顔色を変えないではいられなか

「見覚えがありましょう」

ませんか。 「見覚えがあるどころか。 三重渦状紋だ。 渦巻が三つ重なっているじゃあり 例の奴とそっくりです。 これ

「僕は今、その隆線の数も算えて見ましたが、 例の殺人鬼の

指紋と寸分違いません」

「すると……」

せん」 く犯人自身が斬り取って、 しょう。重い錫の小函を使ったのも、 「すると、この指は犯人の手から斬り取られたのです。 隅田川の底へ沈めようとしたので その目的に違いありま 恐ら

「なぜです。 あいつは、 なぜ自分の指を斬り取ったりし たの

です」

りが皆無になる訳ですからね。 紋だけです。これさえ抹殺してしまえば、 なさい。犯人はこの指さえなくしてしまえば全く安全なので 「それは容易に想像がつくじゃありませんか。考えてごらん 我々が犯人について知っているのは、 犯人を捉える手掛 ただこの三重渦状

捨てたところを見ると、 巧みに利用しましたが、 犯人は川手氏を脅かし苦しめる為めに、この怪指紋を実に その大切な武器を惜しげもなく切り もう指紋そのものが不要になった、

> りませんか。僕が川手氏はもう生きていないだろうというの つまり復讐の目的を完全に果したとしか考えられないじゃあ そういう論理からですよ」

この男を疑えば疑えない事もないじゃありませんか」 その小函が、どういう経路で佐藤という男の手に入ったか、 先ず取調べて見なければなりません。変な奴ですね、警察へ 又この手帳の切れっぱしに書いてある事が事実かどうかを、 が恐ろしくなったという訳ですね。よくある奴です。僕もあ 届けもしないで、いきなり先生のところへ持って来るなんて、 なたの想像が当っているような気がします。それにしても、 「なる程、目的を果してしまったら、 俄かに逮捕されること

るらしく見えた。 「ハハハ……、イヤ別に深い考えがあった訳じゃない でし ょ -83-

中村警部は警察が無視された点を、何より不服に思ってい

るのですからね。 すような具合になっているのです。新聞があんなに書き立て 佐藤という男も、 それを知っていて、

う。世間では三重渦巻の事件といえば、すぐ僕の名を思い

たところなどは、 僕の所へ持って来たのでしょう。これを拾って指紋に気附い なかなか隅に置けない。 例の街 の探偵とい

った型の男ですね」

って、詳しく聞き糺して見る外はありませんね。

どこに隠れているか、

全く見

この指や小

「それにしても、その男がもう一度ここへやって来るのを待

当もつかないのですから」 函だけでは、犯人が何者だか、

いと思うのです。 ーイヤ、 僕の想像では、 ただ橋の上から投げ込まれたのが、 佐藤という男も多くを知ってはいま 偶然ボ

出

カチなどというものは、 ればなりません。 ートの中へ落ちたというような事でしょうからね。それより っていることがあるものです」 我々は手に入ったこれらの品を、 一本の紐も、 証拠品として非常に重大な意味を持 一枚の古新聞も、ましてハン 綿密に研究して見なけ ないが」

せんか」 かし、ここにはまだ紐と新聞紙とハンカチがあるじゃありま も、どこにでも売っているような、ありふれた品ですからね」 てしまっては、全く意味がない訳だし、この錫の小函にして り重大な手掛りですが、こうして犯人の身体から切り放され ゃありませんか。手掛りといえば、この指紋そのものが何よ 「しかし、見たところ、 「如何にも、指と小函に関しては、 別にこれという手掛りもなさそうじ おっしゃる通りです。

りした。 染のハンカチを拡げて見たり、 めた。中村警部はそれを聞くと、 宗像博士は、何ぜか意味ありげに云って、 包装の古新聞を裏返して見た 脇に落ちぬ体で、改めて血 相手の顔を見 つ

うな点があるとおっしゃるのですか」 「もっと念を入れて調べてごらんなさい。 「僕には分りませんが、これらの品に、何か手掛りになるよ 僕はこの 品 々によ

って、犯人の所在を突きとめることが出来るとさえ考えてい

「エッ、犯人の所 在を?」

るのですよ」

自信ありげに微笑んでいる。学者めいた三角型の顎髯に、 かしら奥底の知れぬ威厳のようなものが感じられた。 何

警部はびっくりしたように、博士の顔を見た。博士はさも

と気がつかぬけれど、この隅をよくごらんなさい。 でイニシアルが縫いつけてある。光にかざして見ないと分ら 「先ずこの血染めのハンカチです。血まみれていて、ちょっ 警部はハンカチを手に取って、 窓の光線にかざして見た。 赤い絹糸

「なる程、RとKのようですね」

「そうです。犯人はR・Kという人物ですよ。偽名かも知れ

ませんからね」 川の底へ沈めてしまうものに、 ないが、 いずれにしても、 これは犯人のハンカチでしょう。 まさか作為をこらす筈もあり

はありませんね」 にいるでしょうから、この持主を探し出すのは容易のことで しかし、広い 東京には、 R・Kという頭字の 人間 が、

の頭字をクロスワードの縦の鍵とすれば、 を探し出す別の手掛りが、ちゃんと揃っているのですよ。こ その無数の中からたった一人 もう一つ横の鍵に

「ところが、よくしたもので、

考えていることが、 中村警部はそれを聞くと、面羞ゆげに瞬きをした。当るものを、我々は手に入れているのです」 ているのですよ。御丁寧に五枚も新聞を使っていますが、そ 「その鍵というのは小函の包んであった新聞紙の中に 少しも分らなかったからである。 博士の 隠され

枚だけ地方新聞が混っている。『静岡日々新聞』です。これは 体何を意味するのでしょうか」

の内四枚は『東京朝日』です。ところが、ごらんなさい。

来なかった。 情ないことに、 ただ先生の前の生徒のように、 中村氏にはまだ博士の真意が理解出 じっと相手の顔

を見つめている外はないのだ。

ない。 ちらかです。 新聞を、何気なく使ったことが、よく分るではありません 京朝日』は皆昨日の朝刊です。『静岡日々』だけが一昨日の日 日郵便で犯人のところへ送っているものか、二つの場合のど 地方新聞売子から買ったものか、それとも、 附になっている。これによっても、 新聞を使用したと考えても、先ず間違いはないでしょう。 この新聞も、 「犯人が往来や外出先で指を切るなどということは考えられ ところで、この『静岡日々』ですが、これは犯人が街頭 無論自宅でやったのに違いありません。そうすれ その場にあり合せた、 犯人がその日読み捨てた 犯人自身の購読している 直接本社から毎 か。

紙を剥がした痕が残っている。 こにちゃんとその痕跡がある。 ないかと、 そこで、 拡大鏡 僕は若しやこの新聞に郵送の帯封の痕が残ってい で調べて見たのですが、ごらんなさい、こ 極く僅かだけれど、 ハトロン

いつかは尻尾を掴まれるものですね」に入るなんて、恐ろしいことです。どんな賢い犯罪者でも、 して置いたし、 る積りだったのだから、ハンカチのイニシアルもその ったのでしょうが、それが偶然ボートの中へ落ちて、 サア、これがあ ハトロン紙の痕跡など、まるで注意もしなか いつの致命傷ですよ。 無論犯人は ĴΠ ままに に . 沈

中村警部は疑問がとけて、ホッとした面持である。 東京でこんな田舎新聞を取っている人は、

そ

直接読者名簿を調べればいい訳ですね

なる程、

やっと分りました。そ

の静

岡日

1々新聞

. の

このR・Kの住所をつきとめることが出来るでしょう」 倒もありません。あなた方警察の手でやれば、数時間の 中からR・Kの頭字の人物を探せばいいのですから、何の面 電話で静岡警察署に依頼すれば、 ます。では、僕はすぐ捜査課に帰って手配をします。ナアニ、 んなに沢山ある筈はない。精々百人か二百人でしょう。 「有難う。何だか目の前がパッと明るくなったような気がし R・Kの住所姓名はすぐ分 簡に、

えれば有難いのだが」 そして、犯人の住所が分ったら、 「じゃ、この証拠品はあなたの方へ保管して置いて下さい。 中村警部は一面を輝かして、もう椅子から立上っていた。 僕の方へも一寸お知らせ願

の

りますよ」

を受取ると、 「無論お知らせしますよ。では、 中 村 捜査係長は、 いそいそと事務所を立去るのであった。 博士がハトロン包みにしてくれ 急ぎますからこれで……」 た証拠品

妖魔

中村警部から電話がかかって来た。 その日の午後三時頃、待ち兼ねている宗像博士のところへ、

北園竜子という家を訪ねて、お出で下さいませんか。またぞのりゅうごという家を訪ねて、お出で下さいませんか。しお差。支なければ、これからすぐ青山高樹町十七 の電車停留場から一町もない場所ですから、じき分ります。 「大変おくれまして。 差支なければ、これからすぐ青山高樹町十七番地の 。例の人物の住 所が判明したの です。 高樹町

僕も今そこへ来ているのです」

思ったのか、オドオドしながら行儀のよいお辞儀をした。

かった。 警部の声は犯人を突き留めたにしては、何となく元気がな

「北園竜子、キタゾノ、リュウコ、アアやっぱり女でしたね。

それがあのR・K本人ですね」

お待ちします」お待ちします。ではなるべく早くお出でをお会いしてからお話しましょう。ではなるべく早くお出でをまって、空家になっているのです。……イヤ、詳しいことはん。しかし、残念なことに、その家は、昨日引越しをしてし「そうです。今まで調べた所では、そうとしか考えられませ

であった。 であったが、それは大邸宅と大邸宅に挟まれた、ごく手狭な建物ったが、それは大邸宅と大邸宅に挟まれた、ごく手狭な建物運転手に尋ねさせると、北園竜子の住んでいた空家はじき分という訳で、博士は直ちに自動車を青山高樹町に飛ばした。

て、調べを始めようとしている所です」下さい。今丁度昨日まで北園に使われていた婆さんを見つけ「ヤア、お待ちしていました。汚いですが、こちらへお入り

建勿である。 に導いた。階下が三間、二階が二間程の、ひどく古めかしい 空家の中から中村捜査係長が飛び出して来て、博士を屋内

間探偵に敬意を表した。 た。博士が入って行くと、刑事は丁寧に目礼して、有名な民いていて、その前に六十歳程の小柄な老婆がかしこまっているの階下の八畳の座敷に、中村氏の部下の刑事が胡坐をか

中村警部が紹介すると、老婆は博士をえらいお役人とでも「この人が北園竜子に使われていたお里さんというのです」

を切ったのは、 物を運び出してしまうと、老婆は暇を出され、主人を見送る そこにどんな親戚があるのか、 と、今度の引越しは郷里の三島在へ帰るのだと云ってい こと、弟子の娘さん達の外に、 が、見たところ三十前後と云ってもいい程若々しい美人であ が何時の汽車に乗って、どこへ行ったかは少しも知らぬこと からといっても聞き入れられず、 を送り出したのは、昨日のお昼頃であったこと、運送屋が荷 払ったり、女手ばかりでボツボツ荷造りをしたりして、 越しを思い立ったのは一週間程前で、それから不要の品を売 あったらしい様子だが、 弟もなく、 れたが、その結果判明した点を略記すると、老婆は などであった。 の者の所へ立去ったこと(若し北園竜子が犯人とすれば、 婦人数名が出入りするだけで、 ったこと、彼女は数年前夫に死別し、子供もなく、 の家に使われていた事 さて、 それから宗像博士の面前で、 ひどく淋しい身の上であったこと、 無論その後に違いない)だから、主人の竜子 職業としては生華の師匠をしていた 北園竜子は三十九歳だといっていた 老婆は少しも知らぬこと、引 全く孤独な生活をしていたこ 友達といっては生華の仲間の そのまま同じ区内の身寄り 老婆の取調べが始めら 少しは貯金も 両親も兄

夫といったようなものだね」いうようなものはなかったのかね。くだいて云えば、マア情「で、あんたの主人には、特別に親しくしている男の友達と

が、やがて思い切ったように語り出した。中村警部が訊ねると、老婆は暫くもじもじと躊躇してい

た

-86

ですから、何もかも申上げてしまいます。しまっては、御主人様に申訳ございませんが、お生のお訊ね「それがあったのでございますよ。こんなことをお喋りして

ざいます。それは立派な好男子の方でございましたよ」と、丁度そのお方も格子を開けてお帰りになるところで、出いつけられたお使いを、思いの外早くすませて帰って見ますいつけられたお使いを、思いの外早くすませて帰って見ますいつけられたお使いを、思いの外早くすませて帰って見ますと、丁度そのお方も格子を開けてお帰りになるものですから、妙なでございますよ。その方がいらっしゃる時分には、奥様が必会いがしらに、電燈の光で、たった一度お顔を見たことがごさいます。それは立派な好男子の方でございましたよ」と、丁度そのお方を開けてお帰りになるところで、出たが、何をの光で、たった一度お顔を見たことがございます。それは立派な好男子の方でございましたよ」といった。

老婆は歯の抜けた口をすぼめて、ホホホと笑うのであった。くものでございますよ」いくら年寄りでも、やっぱり気を附けて、胸に刻み込んで置でしたが、奥様があんなに隠していらっしゃる方かと思うと、「ハイ、きっと見分けられるでございましょう。たった一度

れがそうだったと顔を見分けることが出来るかね

「フーム、それで、あんたは、今でもその男に出会えば、こ

見ることにした。

て、それらの事件の当夜、

竜子が外泊したかどうかを確めて

その代り、奥様の方が……」いから戻るまでには、きっとお帰りになりました。ですが、「イイエ、一度もそんなことはございません。わたしがお使「で、その男は泊って行くこともあったのかね」

「イイエね、奥様の方がよく外でお泊りになったのでござい「エ、奥様の方が、どうしたというの?」

「ホウ、そいつは変っているね。で、どんな口実で留守にしますよ」

た。どんなお友達だか知れたものじゃございませんよ」一晩も二晩もお留守になることが、ちょくちょくございまし「遠方のお友達の所へ遊びにいらっしゃるのだと申してね。たの?」

それから川手氏自身が行方不明になった日附などを思い出ししき日附、その死体が陳列館やお化け大会へ運ばれた日附、そこで、中村警部は川手氏の二人の令嬢が殺害されたと覚と一致すれば、愈々この女を疑わなければならないのだ。せた。若しその竜子の外泊の日が、これまでの殺人事件の日それを聞くと、捜査係長と私立探偵とは、思わず目を見合

たのである。 日と竜子の外泊の日とがピッタリー致していたことを確め得けれど、月々の行事などに結びつけて、結局それらの事件の老婆の記憶を呼び起すのに、ひどく手数と時間がかかった

の所が少しはっきりしないようだが」かね。どうして突然引越しをする気になったか、どうもそこ「で、奥さんの様子に、近頃、何か変ったところはなかった中村警部はこれに勢いを得て、更に質問をつづけた。

で人が変ったように、ソワソワしていらっしゃいました。何か深い心配事でもおありの様子で、いつもの奥様とはまるよ。変った様子といえば、引越しの十日余り前から、奥様は「サア、わたしもそれを不思議に思っているのでございます

それから間もなく引越しの話が持上ったのでございます」 とも存じませんが、 わたしなんかには何もお話しにならないので、事情はちっ なんでもよっぽどの御心配事のようで、

きていた。 老婆との 問答の、 後々に関係のある重要な点は、 以上に尽

越し荷物は、 答が行われたのだが、 若い者が、 図で、昨日の夕方貨車に積み込んだことが判明した。 老婆の取調べが終った頃、 一人の刑事に連れられて入って来た。そこで又問 運賃前払、 その結果、 東海道三島駅前運送店留置とい 引越しの荷物を運んだ運送屋 北園竜子の大小十三箇 う指 の 引 の

取った形跡があり、 のである。 の中の白い陶器の表面に、幾つかの指紋が検出された。そし なことに、屋内の滑かな物の表面は、悉く布様のもので拭き 次々と検査されて行った。その結果を簡単に記すと、 とか、襖の框や引手だとか、家の中のあらゆる滑かな箇所が、 紋係が、指紋検出の道具を携えて入って来た。窓のガラスだ ったが、ただ一つ、流石にここだけは拭き忘れ 運送屋が帰るのと入れ違いに、待ち兼ねていた鑑識課 その一 つに、 問題の三重渦状紋がはっきりと残っていた 指紋らしいものはどこにも発見されなか たのか、 不思議 便所 の 指

だが、 いう。 しく見える、 というのが 犯人は北園竜子と決ったのだ。 刑事達は 附近の人々は口を揃えて、 相棒かも知れない。。噂によれば竜子は 歓声をあげんばかりであった。愈々三重渦巻の 風にも堪えぬ風情の、 いくら尋ね廻っても写真が手に入らぬのが残念 老婆が云った四十五六の情: その美貌を説き聞かせてく なよなよとした美人だと 非常に若々 怪 夫

> 合せて、 失せたのだ。 れる。妖魔だ。今の世の妲己のお斉は、 残虐 の 数々を演じ、 忽然として大都会の唯中に消え 逞しい情夫と力をたま

やがて、中村係長の命を受けて、四方に散

の爺さんを叩き起し、 の生華の弟子を訪ねて、聞込みの報告を持ち寄るもの、 次々と帰って来た。 出入商人の御用聞きを引きつれて来る 附近の住宅や、 その近くに っていた刑事達 住む竜子

もの、 事柄は殆んど発見されなかった。 問答からは、 、一々を記していては際限がないが、 読者に伝えて置かなければならぬ程の、 それらの聞込みや 重大な

陳述である。 いのは、 だが、 その中にただ一つ、ここに書き漏らすことの出来な 一人の刑事に連れられて来た食料品店の御用聞 の夕方、こち きの

す らへ御用を聞きに来ますと、 しって、 「そういえば妙なことがあるんですよ。 今夜中に届けてくれって、 奥さん自身で勝手口へ出ていら 妙な註文をなすったので 昨 $\dot{\exists}$

「フム、妙な註文とは

のです。 福神漬の罐詰の大きい奴を五つずつと、 んで食パンを十斤買って、 「それがね、実に妙なんです。店で売っている牛肉 緒に届けてくれっておっしゃる それから、 の罐詰と、 パン屋さ

う使ってしまいましたがね。 りにこれを上げるといって、 怖い目で睨みつけて、何でもいいから持ってお出で、その代 そんなに 沢山どうなさるんですって、 そして、 一円下すったのです。 お前の店には内しょに 聞 い たら、 それはも 奥 さんは

ない訳に行きませんや」って、口止めされたんです。しかし、警察の旦那には白状しあたしがこんな註文をしたことは、決して云うんじゃないよ出来ないだろうけれど、パン屋さんにも、その外の人にも、

「で、君はそれを届けたのか」

っしゃいました」はいないと見えて、やっぱり奥さん自身で受取りに出ていらはいないと見えて、やっぱり奥さん自身で受取りに出ていら「エエ、夜になってからお届けしました。すると、婆やさん

は逮捕を恐れる余り、人里離れた山の中へ、たて籠る積りで罐詰やパンを国への土産にする奴もなかろう。それとも彼女個の罐詰を註文するなんて、狂気の沙汰ではないか。まさか改にぶッつかったような気がした。一体これは何を意味する中村警部はそれを聞くと、何だかえたいの知れぬ不気味な

す

博士は殺人鬼を讃嘆するように溜息をついた。

を感じないではいられなかった。れに気附くと、心の底からこみ上げて来る、一種異様の戦慄するような不気味なものが隠れていた。中村警部は、ふとそ滑稽な感じであった。だが、そのおかしさの裏には、ゾッと美しい殺人鬼とパンと罐詰。この妙な取り合せは何となく

でもあったのだろうか。

もなく、中村警部の活動を傍観していた。段落を告げた。宗像博士は、終始これという意見を挟むこと、その日の取調べは、この御用聞きの不思議な陳述を以て一

「僕が今考えているのは、無論偽名だとは思いますが、兎も自動車で帰途についた。(やがて、捜査係長と民間探偵とは、刑事達と別れて、同じ

張込みをすることなどですが、そういう正攻法では、うまく を探し出すこと、それから荷物の送り先の三島駅の運送店に 角あいつの戸籍簿を調べて見ること、一枚でもあいつの写真 不気味な気ちがいめいた匂いがつき纒っていたじゃありませ 行きそうもないような気がします。何だか今日の取調べには、

中村警部が半ば独言のように呟いた。

んか」

ます。しかし、犯罪にかけては天才のように正確無比な奴でるべき狂人の犯罪です。狂気の分子は到る処にちらついてい衆人に見せびらかすなんて、正気の沙汰じゃありません。恐「気違いめいているのは最初からですよ。殺人犯人が死体を

「怪物の着想、そうです。僕もそんな風のものを感じます。れない怪物の着想が隠されているような気がするのです」したよ。ナンセンスのようでいて、実はその奥にえたいの知「今日のパンと罐詰の一件なんか、僕は何だかゾーッとしま

ませんか。 我々は眼帯の大男と、黒眼鏡の小男しか見ていないではあり、この事件には最初から女性がいたのでしょうか、しかし、しい女性であったことを、どう考えますか。

例えばですね。君は三重渦巻の指紋の持主が女性、

しかも美

人ではなかったかとね」に小柄で、素敏こい黒眼鏡の男こそ、外ならぬ北園竜子その(僕は今こんなことを考えているのですよ。あの少年のよう

中村警部はそれを聞くと、ハッとしたように顔を上げて博

-8

うようにして、いつまでも黙り込んでいた。 士を見た。そして、そのまま二人は、お互の目の中を覗き合

暗闇に蠢くもの

の三つの捜査方針は、戸籍簿を除いては全く失敗に終った。三島駅前の運送店に張り込みをする事という、中村捜査係長北園竜子の写真を手に入れる事、彼女の戸籍簿を調べる事、

いた。

刑事を八方に走らせ、竜子の知人という知人を訪ねて、写

られたまま、受取人の姿はいつまでたっても現われず、三島が、運賃前払いの十数箇の荷物は、運送店の倉庫に積み上げの手元にも一葉の古写真さえ保存されていなかった。真を探し求めたけれど、流石に殺人鬼は用心深く、どの知人

外にも偽名もせず、寄留届もちゃんとしていたので、戸籍はただ一つ、戸籍簿だけは満足な結果が得られた。犯人は意

駅にそれらしい人物の下車した様子もなかった。

弓子を記憶している人さえない有様であった。地を調べても、北園の家は遠い昔に跡方もなくなって、母の悉く死亡しているという孤独な身の上であることが分ったが、三歳の時病死しており、竜子には兄弟もなく、近い身寄りは岡県三島町の北園弓子というものの私生児で、母は竜子の十何の苦もなく判明したが、それによると、北園竜子は原籍静

く傭い入れられた助手の、林という青年が、心配そうに窺ってく傭い入れられた助手の、林という青年が、心配そうに窺って、が、その夜は八時になっても、例の実験室にとじこもって、は別に、どんな捜査方針を採るべきかを苦慮していた。しきりと考えごとをしていることを知り、博士自身、警察として、中村警部から、その都度電話の報告があったので、所へは、中村警部から、その都度電話の報告があったので、

て博士の助手となったのである。 先任助手が、殺人鬼の毒手に斃れたことも承知の上、志願しーロック・ホームズを夢見ている男で、小池、木島の二人の歳の青年であったが、探偵小説を愛読した余り、未来のシャ林は去年ある私立大学の法科を出たばかりの、まだ二十五

博士に笑われて、頭を掻きながら引下る事も度々であった。であった。飛んでもない見当はずれの想像説を組み立てては、その女性が不思議な失踪をしたことを知ると、林はもう夢中から、三重渦巻の指紋の主が、意外にも美しい女性と分り、調わば、この事件を目当てに傭われたようなものであった

-90-

実験室にとじこもっている博士の頭の中に、どんなすばらし 彼は、宗像博士を現代随一の名探偵として畏敬していた。

法師の動く度に、ただその事ばかり考えていた。 い論理が組立てられているのかと、咳払いの聞える度に、

「林君、ちょっとここへ来てくれ給え」

込んで行ったが、見れば、 兼ねていたように「ハア」と答えて、 突然ガラス戸の向うから博士の声が洩れて来た。林は待ち 博士の顔に明るい微笑が漂ってい 勢いよく実験室へ飛 び

る。さては、何か妙案が浮かんだのに違いないと、林も思わ

ずニコニコと笑った。

林君、 博士の藪から棒の質問に先ず面喰った。 君は幽霊とかお化けとかいうものを怖がる質かね」

かを信じていらっしゃる訳ではないでしょうが……」 「それはどういう意味でしょうか。まさか、先生が幽霊なん

ういう恐怖心が強いかどうかと訊ねるのさ」 怖がる恐怖心だけは、不思議と誰にもあるものだよ。 「ハハハ……、幽霊そのものは存在しないにしても、幽霊 君はそ

を

夜中に墓地を歩き廻ったりするのは大好きな方です」 「アア、そうですか。それなら、僕は怖がらない方です。 真

い手柄が立てられるぜ」 一緒に、夜の冒険に出かけるのだ。うまく行けば、すばらし 「ホウ、そいつは頼も しいね。それじゃ、これから一つ僕と

だ。そして、空家の中で夜明かしをするのだ」 「北園竜子の住んでいた空家へ、これから二人で忍び込むの 「夜の冒険といって、一体どこへ行くのでしょうか」

「では、

あの空家に何か怪しいことでもあるとおっしゃるの

ですか」

「怪しいことがあるかも知

れない。

ない

かも知れない。

それ

を二人で試して見るのだ」 った。しかし、 林助手には博士が何を考えているのか、まだよく分らなか 無論: 北園竜子捜査に関する、 何 か の手掛りを

ね 「まさか、 あの空家に幽霊が出るという訳ではあ ij ますまい

得るためには違いない。

「ウン、幽霊が出てくれるといいんだがね。 林が冗談らしく笑うと、博士は案外真面目な顔で、 わしは、 それを

念じているくらいなんだよ」 と訳の分らぬ事を云った。

思うと、突然車にも乗らないで、異様なモーニングの裾を飜 もう慣れっこになっていた。一日中実験室にとじこもって一 て、そのまま二日も三日も帰らないことさえ珍らしくはなか えしながら、鉄砲玉のようにどこかへ飛び出して行く。 言も口を利かないで、哲学者みたいに瞑想に耽っているかと った。名人肌ともいうべき奇行家なのだ。 林助手は就職間もなかったけれど、博士の奇矯な言動には、 そし -91-

に身内がゾクゾクするのであった。 るのかと思うと、未来のシャー いう突飛な企ての裏に、 のお供を命じられても、今更驚くことではない。イヤ、そう その調子を呑み込んでいるので、突如として「化物退治」 博士のどんな深い智慧が隠されてい П ツ ク・ ホ | ムズは、 嬉しさ

げて、自動車に乗り込み、 それから、二人が葡萄酒とサンドイッチを詰めた小鞄をさ 青山高樹町の問題の空家の一 町ほ

ど手前で下車したのは、もう九時半頃であった。

燈の光も薄暗く、商店街に比べてはまるで別世界のように、 て夜も更けていないのに、殆んど人通りもなく、 前にも記した通り、 その辺は物淋しい屋敷町なので、さし まばらな街

「僕らは無断であの空家へ忍び込むのだからね。そのつもり

で、通行人などに怪しまれないように」

ひっそりと静まり返っていた。

ろう。 ば、探偵どころか、恐るべき夜盗の類と早合点したことであ 服男が影のように忍んで行く有様は、 空家の裏側の路地へ忍び込んで行く。細い路地には電燈もな 博士は小 全くの暗闇である。その闇の中を、手探りで、二人の洋 ・声に注意を与えながら、足音も盗むようにして、 若し第三者が見たなら

を押し開いて、真暗な土間へ入って行った。 前に当てがっていたが、 から鍵束のようなものを取出して、それをあれこれと戸の錠 空家の勝手口に辿りつくと、 忽ち易々と錠をはずし、 先に立った博士は、ポケット ソッと板戸

巧みさで、空家の戸締りを開いたのだ。 いよいよ夜盗である。博士は錠前破り専門の盗賊も及ばぬ

を立てたり、声を出したりするんじゃないよ」 しがいいというまでは、 「林君、ここで靴を脱ぐんだ。声を立ててはいけないよ。 博士は暗闇の土間に立って、 無言の行だ。いいかね、 林助手の耳に口を寄せ、 忘れても音 やっ わ

て行くと、 靴を脱いで、 博士は中の間と覚しき部屋で立止り、 板の間に上り、 手探りで、博士のあとについ 林助手の肩

と聞える程の囁き声で命じた。

を押えて坐れという合図をして、自分も、 その暗闇の中に胡

坐をかいた。

質問する訳にも行かず、林は博士の隣に坐ったまま、息を殺 すようにして、真暗なあたりを見廻すばかりであった。 声を出すなと云われているので、これからどうするの

かと

滅入るように静かだ。その上にこの暗闇 もいるような心細さである。 電車通りからは遠く、 自動車も滅多に通らぬ横町なので、 山奥の一軒家にで

障子の桟が算えられる程にはっきりして来た。 ら障子、黄色い壁、床の間と段々物の形が見え始め、やがて、 な感じである。初めは白い襖がポーッと浮かび出し、それか なしになっているので、階下全体が一つの大きな暗室のよう のかに見分けられるようになって来た。 い借家、 やがて、暗闇に目が慣れるにつれて、 それが荷物を運び出したまま、 階下は三間ほどの狭あたりの様子が、ほ どの部屋も開けっぱ

りませんか」 中で、こうしていたって、別に何事も起りそうもないじゃあ 行って、 もう我慢が出来なくなった。彼は博士の耳の側へ口を持って 林助手は喋るなと云われていても、何だか口がムズムズして、 「 先 生、 そうして、十分、二十分と無言の行をつづけているうちに、 まるで蚊の鳴くような低い声で、ソッと囁いた。 僕らは一体何を待っているのですか。こんな空家の

し殺した声で囁き返した。 すると、博士は幽に舌打ちをして、 林の耳に口を寄せ、 押

しでも物音を立てたら、出なくなってしまうんだからね」 幽霊が出るのを待っているんだよ。喋っちゃいけない。

-92

たので、林はもう囁き声で質問する事も出来なくなった。 そう云って、叱りつけるように、肩の所をグッと押えられ

やない. 殺しがあった訳じゃなし、 変だな、 先生気でも違ったのじゃないかしら、この家で人 お化けや幽霊の出る因縁がないじ

うのは、何者であろう。待てよ、幽霊といったって、無論昔 のを信じているとは考えられない。すると……アア、そうだ。 の怪談にあるような奴が現われる筈はない。先生がそんなも ひょっとしたら本当に幽霊が出るのかな。 だが、先生程の人が、こんなに真剣になっているんだから、 一体その幽霊とい

ゾーッとさせた。 げに分って来たような気がした。そして、その想像が、 いなかった。 つは幽霊なんかより、幾層倍も気味悪く、恐ろしい代物に違 林助手は、何だか博士の待っているものの正体が、おぼろ 博士がお化けとか幽霊とか形容したのも 尤 もで 若しそんなことがあり得るとしたら、 そい 彼を

た。 のが、 らしていると、ポーッと白い襖の蔭から、黒い朦朧としたも 彼は何だか背筋がゾクゾク寒くなって来た。じっと目を凝 ヒョイとこちらを覗いては引込んで行くような気がし

ある。

ている様子だ。 だ。どうやら博士自身もそれを頬張って、 くと、博士がサンドイッチを摘んで彼に渡そうとしているの 何かソッと腕に触るものがあるので、びっくりして振 ムシャムシャやっ り向

無言でそのサンドイッチを受取って、口に入れたことは入

れたが、博士の所謂幽霊が気になって、今にもそいつが、向 、バアッと飛び 出して来るのではないかと思

うと、食慾どころではなかった。 うの真暗闇から、 あとになって考えて見ると、そうして坐っていたのは一時

囁きつづけた。 林助手にはそれがたっぷり十時間にも感じられたのであった。 間余りに過ぎなかったのだが、 自身の動悸の音が、 る奇怪なるものの姿が、走馬燈のように去来し、 じっと我慢をして坐りつづけている彼の網膜には、あらゆ 種々様々の意味を持って、 その一時間の長かったこと。 悪魔の言葉を 耳には、

跳。梁するのだ。に蠢く怪しい影となって、 目を閉じれば瞼の裏の眼花となり、 幻想の魑魅魍魎が目まぐるしく 目を開けば暗 闇 の部屋

こともできなかった。 汗が浮かび、息遣いさえ異様にはずんで来るのを、 無言の行が永引くにつれて、 彼の全身には、 ジッ どうする トリと脂

幽に鳴ったばかりでやんでしまった。 が感じられた。二階の闇の中を、 ハッとして、耳をすましたが、その物音は二三度ミシミシと ふと気がつくと、 頭の上に、 人でも歩いているような気配 誰か歩いているのかしら。

はじめた。 んでいると、 気のせいかしら、今のは耳鳴りの音だったのかしらと怪し 今度は、 すぐ次の間の梯子段がミシミシと鳴り

手の肩先をグッと押えつけた。宗像博士の手だ。博士が身動 すると、 足音を忍ばせて、何者かが階下へ降りて来る様子だ。 闇の中から、 誰かの手がニューッと伸びて、

すくんで、足音の主に立向って行くような勇気は少しもなか受けなくても、林助手はもう金縛りにでもあったように身がきしてはいけないと、無言の指図をしたのだ。そんな指図を

った。

できない、淡が遅びまかにののので、気がでいた。でのでは、なの間の闇の中に、朦朧としに分っていた。分っているからこそ、一入恐ろしいのだ。はない。では一体何者であろう。林助手にはそれがおぼろげまさかお化けや幽霊ではあるまい。幽霊が足音を立てる筈

て黒い人影が浮び出した。やっぱり人間だ。

側の方へ消えて行った。そして、ギイーと開き戸の軋む音。いるとも知らず、スーッと中の間を通り抜けて、奥座敷の縁ー息を殺して見ていると、そのものは、二人がそこに坐って

入る為めに、二階から降りて来たのであろうか。手洗い場だ。オヤ、すると、あの怪しい人影は、手洗い場へあんな音のする開き戸がほかにある筈はない。縁側の隅の

「先生、あれは何者です」

博士の耳に囁くと、博士も囁き返す。一先生。あれに何者です」

「分らないかね」

「それでいいのだよ。あれがあいつのもう一つの姿なのだ」い洋服を着ているように見えましたぜ。男のようでしたぜ」「何だか、分っているような気がします。でも、今の奴は黒

けない。もう袋の鼠も同じことだからね」「イヤ、もう少し様子を見よう。相手をびっくりさせてはい

「捉えるのですか

き戸の軋む音がして、黒い影が戻って来た。

そして、二人はまた押黙ってしまったが、

すると、

再び開

ふと何かの気配を感じたように、そこに立止ってしまった。黒い影は、足音も立てず、スーッと中の間へ入って来たが、はいけないと、二人は中の間の隅に身を縮めて、息を殺した。暗闇とは云え、相手も闇に慣れている筈だ。見つけられて

の耳に入ったのかしら。だ。匂いを気附いたのかしら。それとも幽な呼吸の音が相手どうやら、闇をすかして、こちらを見つめているらしい様子

の間へ逃げ込み、大きな音を立てて階段を駈け上って行った。という幽な叫び声が洩れたかと思うと、怪物は風のように次恐ろしい睨み合いであった。そして、黒い影の口から「アッ」闇の中の、息もつまるような、脂汗のにじみ出すような、

と、一つを林助手に手渡し、パッとそれを点じて、先に立っ博士はそう云って、鞄の中から二箇の懐中電燈を取り出すア来たまえ」

出来る。 具も何もないガランとした部屋なので、一目で見渡すことが 階段を上って見ると、二階は、僅か二間しかない上に、家

は何もないがらんどうだ。
は何もないがらんどうだ。二つの押入れも開いて見たが、中ゃんと枢がかかっている。二つの押入れも開いて見たが、中一巡したのに、その光の中へは何者の姿も現われなかった。博士の振り照らす懐中電燈の光が、二つの部屋をグルッと「オヤ、変ですね。誰もいないじゃありませんか」

-外に隠れる場所もないし、どこへ消えてしまったのでしょ

-9

れともあいつは、 と背筋が寒くなって来た。やっぱり幽霊だったのかしら。 林助手はけげんらしく呟いたが、呟いているうちにゾー 、幽霊よりも不気味な魔法使なのかしら。 そ ッ

「シッ、静かにしたまえ。あいつが聞いているじゃないか」 博士の囁き声を聞くと、「ソレ、そこに!」と云われでもし

たように、又ドキンとした。

「どこに隠れているのでしょう」

怖々訊ねると、博士は闇の中でニヤニヤと笑っているらし 懐中電燈の光で、ソッと天井を指し示した。

「エッ、では、この上に?」

囁き声で聞き返す。

「そうだよ。外に逃げ場所はないじゃないか」

を掴んで、耳に口をつけ、 でその天井板を調べていたが、 博士は囁いておいて、一方の押入れを覗き込み、 オズオズと近よる林助手の腕 懐中電燈

「ここだよ。この天井板がはずれるようになっているのだ。

……君、勇気があるかね

Ł からかい気味に訊ねた。

る奴だ。それを怖がって尻ごみするようでは、 霊でもない、生きた人間、しかも一人ぼっちで逃げ隠れてい 林助手は、 勇気がないとは答え兼ねた。相手はお化でも幽 探偵助手の恥

て下さい。若し相手が手強いようでしたら、「僕この上へ上って、確かめて見ましょう。 ò 加勢に来て下さい」 先生はここにい 声をかけますか

辱である。

ばいいのだから」 かだけを確かめてくれ給え。 「じゃ、捉えなくてもいいから、ただあいつがいるかいない あとは警察の方に任せてしまえ

り、天井板をソッと横にずらせて、埃っぽい屋根裏へ這い上音を立てないように注意しながら、押入れの中段によじのぼ って行った。 ヒソヒソと囁き交して、林助手は上衣を脱ぎ、なるべく物

足場にして這えばいいかというような事も心得ていた。 な構造になっているかを、 の天井へ上って見た事があるので、屋根裏というものがどん 彼は嘗て、猟奇の心から、電燈工夫のあとについ 大体知っていた。天井のどの辺を て、

いになって、ジリジリと進んで行った。 態と懐中電燈は消したまま、蜘蛛の巣と埃の中を、四ん這

進んで行くうちに、もうその中央の辺に達してい うして何の隔てるものもなく、真の闇の中で、えたいの知れ ぬ怪物に相対しているかと思うと、不気味さは一入であった。 広くもない屋根裏のこととて、 博士に軽蔑されまいと、痩我慢を出しては見たものの、そ 脅えながらも、 ジリジリと

「ハッハッ」と小刻みの呼吸の音が聞えて来る。 息を殺し、耳をすまして、じっとしていると、 どこからか

息遣いはどうだ」

「オヤ、それじゃ、相手も怖がっているのだな。

あの烈しい

「よしッ、思い切って、懐中電燈で照らしてやれ」 それと悟ると、林助手は俄かに勇気が出て来た。

彼はいきなりそれを点じて、 人の気配のする方角を、 パ ッ

-95-

ギラギラと光って見える。ひどく小柄な弱そうな奴だ。そのとさげて冠っている。そのソフト帽の下から、大きな眼鏡が古ぼけた黒の背広服の襟を立て、黒のソフト帽の鍔をグッ

兎のようにオドオドした、見るも哀れな表情であった。を上げて、こちらを見たが、それはまるで追いつめられた小パッとさし向けられたまぶしい光に、その人物は思わず顔

姿を見て、林はまた一段と勇気をました。

お願いです」と手を合せて拝まんばかりの様子である。は涙さえ光っている。「どうか見逃して下さい。お願いです、細。面の女のように優しい顔が、恐怖に青ざめ歪んで、目に

ゃ一つ引っとらえて、手柄を立ててやろう」「ナアンダ、こんな弱々しい奴だったのか。よしッ、それじ

じっとこちらを見つめているばかりだ。もう身動きさえ出来ないらしく、ただ泣き出しそうな顔で、方へ這い寄って行った。だが、相手は猫の前の鼠のように、林はますます大胆になって、無言のまま、ノソノソとその

も、相手はまだじっとしていた。手の心臓の鼓動が聞えるかと思われるほどであった。それでやがて、二人の顔と顔とが、一尺程の間近に接近した。相

いるような奴を憐れむことはないのだ。彼は思い切って、サーしかし、躊躇している場合ではない。屋根裏に逃げ隠れてれないだろうと思った。そのやつれ果てた、哀願しているような表情は、一生忘れら本はなぜか妙な躊躇を感じた。相手が可哀想になって来た。

非常にしなやかな細い手首であった。ッと腕を伸ばすと、相手の手首を掴んだ。想像していた通り、

掴まれている手首を振り放した。れ程の力があるのかと、びっくりするような烈しい勢いで、その態度が突然一変した。こんな弱々しい奴に、どうしてこてくれないのか」と叫んでいるように感じられた。そして、すると、相手の目がキラッと光った。「これ程頼んでも許し

うの闇の中に飛び退っていた。アッと思う間に、相手は本当に小兎のような素早さで、向

れそうに、メリメリと鳴った。裕もなく、その方へ飛びかかって行った。天井板が今にも破り又、逃がすものか。林はもう懐中電燈で照らしている余

て行った。 ない。無我夢中で、その二本の足のようなものにしがみついすれっ、変だなと思ったけれど、ゆっくり考えている暇はから、二本の足がブラブラと下っているような気がした。身体がなかった。身体はなかったけれど、頭の上の屋根の方だが、飛びかかって行った場所には、どうしたのか相手の

ンと下へ伸びて来た。な感じがしたが、次の瞬間には、それが恐ろしい勢で、グーすると、その足が、スーッと屋根の方へ引込んで行くよう

ていたけれど、その異変の起った場所には直接の光が射さぬ何が何だか分らなかった。懐中電燈は点火したまま転がっこに転がっていた。アッと思う間に、林助手は天井板をメリメリ云わせて、そ

ので、

はっきり見定めることが出来ないのだ。

-9

の目を遮るものもなく、 ポッカリと二尺四方程の穴があいているのだ。穴の上には何 屋根の裏側の薄い板張が見えている。 だが、忽ち事の次第が分って来た。ほのかな反射光の中に、 遥かの彼方に、 その板張の一部分に、 キラキラと星が光っ

用意してあったのだ。 アア、何ということだ。こんなところに屋上への抜け穴が

ている。

ガタガタと瓦を踏む音が聞える。 屋根の上へ逃げ出したのだ。 怪物は林を蹴飛ばして置

女じょかい

を伝って、下へ降りる積りかも知れません」 「先生、外へ廻って下さい。大屋根の上へ逃げました。 屋根

から、林助手の声が聞えて来た。 押入れの外に待っていた宗像博士の耳に、 屋根裏の闇 の中

と屋根の上を注視した。 空家の表側に廻って、 のように階段を駈け降り、 ていた博士は、 それでなくても、 、この声を聞くと、 天井の恐ろしい物音に、もう身構えをし 相手に悟られぬよう、 裏口から闇の道路へと飛び出し、 矢庭に身を躍らして、 物蔭から、 じっ 疾風

遠くの街燈のほのかな光線が、 冒しながら、 怪物は二階の大屋根から、雨樋を伝わって、非常な危険を やっと一階の屋根まで降りたところであった。 守宮のように二階の窓の雨戸

> し出している。 にへばりついた黒い背広に黒いソフト帽の人物を、 朦朧と映

ばして、下の道路を眺め、 その者は、 博士は一層注意して、 道路を眺め、耳をすまして様子を窺っている。雨戸にへばりついた姿勢のまま、ソッと首を伸 物蔭に身を隠し、僅かに一方の目だ

けで、屋根の上を見つめていた。

った。 出して来る。 根の上を、 えない。 途絶えている。 もう十一時に近い時刻、 その死に絶えたような静寂の中で、黒い怪物は、 四ん這いになって、ソロソロと 庇 の端の方へ乗り 不気味な無声映画でも見ているような感じであ 遠くを走る電車の響きの外は、 淋しい屋敷町には、 全く人通りも 何の物音も聞 屋

その辺を探し廻っている姿である。 て黒い人の姿が現われた。 するとその時、怪物の頭の上の大屋根に、瓦の軋む音がし 林助手が抜け穴から這い出して、

非常な早さで走り出した。 スーッと墜落して、コロコロと転がったが、忽ち起き上って、 した様子で、いきなり庇の端に乗り出すと、パッと闇の地上 の音に追手の迫るのを察したのであろう。 へと身を躍らせた。大きな黒い塊が、博士の目の前の道路へ、 怪物はハッとしたように、大屋根を見上げた。そして、瓦 何か非常な決心を

を保ちながら、 るのか、 なぜかそれをせず、あくまで相手の跡を追って、どこへ逃げ って捉えようと思えば、捉えられぬ筈はないのだが、 宗像博士がそのあとを追ったのは云うまでもない。追い縋 その行先をつきとめようとするらしく、 執拗な追跡をつづけた。 適当の距離 博士は

の神社のこんもりとした森が見えて来た。 れがするらしく、段々速度が鈍くなった頃には、 怪物はこの辺の地理をよく知っていると見え、淋しい方 い方へと町角を曲りながら、十丁近くも走ったが、 そして、 行手に何 その森 息切 か の

淋

隠れる姿が、辛うじて認められた。 た落葉の上を、 破れた生垣の間から、 奥の社殿へと辿って、 森の下闇へ踏み込み、ジメジメとし その裏側の高い床下へ

中が逃走者の目ざす場所であった。

突然、 て蹲まっている怪物、 裏に近づき、床下の闇の中に、幽に蠢く人影をつきとめると、 背をかがめて歩ける程の高い床下、柱と柱の間に身を縮め 博士は相手に悟られぬよう、足音を忍ばせながら、社殿の パッと懐中電燈を点火して、 その胸から上の半身像が、 相手の顔にさしつけた。 電燈の丸

光の中に、

クッキリと浮き上った。

眼が、 れど、 青ざめた頬、 いたままになって、 黒ソフトをまぶかく冠り、 確かに女だ。 その眼鏡の中から、恐怖の為めに一杯に見開かれた両 追いつめられたけだもののように、こちらを見つめ、 激動の為めに白っぽく色を失った唇が、半ば開 しかも美しい女だ。 ゾッとするような烈し 大きな眼鏡で顔を隠しているけ い息遣いをしてい

竜子。そうだろう、君は北園竜子だね 「ハハハハハハ、とうとう追いつめられてしまったね、 博士は物柔かに云って、じっと相手の表情を注視した。 北 園

になった。 竜子の顔がキューッと歪んで、 あの兇悪な殺人鬼が、 どうしてこんな弱々しい表 今にも泣き出しそうな渋面

゙誰です。あなたは誰です」

るなどは朝飯前の芸当に違いない。 悲しくもないのに涙を流し、怖くもないのに恐怖の表情を作 情をするのか、不思議と云えば不思議であった。だが、 は出来ない。女というものは、 「わしかね、 、わしは三重渦巻の指紋を持つ殺人犯人を捉える ましてこれ程の悪人となれば、 油断

しをよく知っている筈だね」 ために、 相手は答えなかった。答える代りに一層恐怖の表情を強め 永い間苦労している宗像というものだ。無論君はわ

て、身をすくめた。

列箱の中へ飾ったり、 君は悪魔の智恵を持っている。そんな悄らしい にはずいぶん毛色の変った犯罪事件も取扱ったが、 中へ寝かした腕前には、流石のわしも兜を脱いだ。 な魔法使を相手にしたのは初めてだよ」 実は人殺しの天才なのだ。 「わしは実を云うと、君の腕前には全く感心しているのだよ。 姉娘の死骸をお化け大会の破れ蚊帳の 川手氏の妹娘の死骸を博物館の陳 顔をしていて、 君のよう 永年の間

-98

う方にも、 覚えはありません。わたしは何も知らないのです。川手とい せん。これには何か深い訳があるのです。 してまるで気でも狂ったように叫び出した。 出して、 「違います。違います。 博士がそこまで云うと、男装の竜子が突然両手を前にさし 博士の口を塞ぎたいとでもいう様な恰好をした。そ その二人のお嬢さんにも、 わたしはそんな恐ろし 会ったことさえありま 何者かが私を罪に い罪を犯した

そんな手で欺そうとするのは、 「ハハハハハハ、 つまらんお芝居はよしたまえ。このわしを 浅墓だよ。 わしは何もかも知

落そうと、恐ろしい企らみをしているのです」

ては考えつけないことだよ。この一事からでも、見せかけて、そこの天井裏に隠れているなんて、 のだ。 っているのだ。若し罪がないものなら、 、それも普通 の逃げ方では ない。 引越しをして、 なぜ逃げ隠れをする 悪魔でなく 空家

だけの大罪を犯しながら、永久に法網を脱れてしまったかも 君はまんまと世間を欺きおおせたかも知れぬ。そして、あれ るじゃないか。若しわしが君のトリックに気づかなかったら、 に警察の人達は、 ろしい殺人者であることは、立派に証拠立てられている。 君の行方を探しあぐねて、途方に暮れて

知れぬ

いね。 出したのだ。そし からね。 るように、 抜けな真似をする筈がない。これまでのやり方でも分ってい れる積りに違いないと考えた。では、どこに隠れるか。 れは君が、 ンの謎を解いたのだ。 のように人里離 君はどうして、 まぐれ当りでは 君という人は巧みに人の意表を突く手品使なのだ 数日の間、 れた山の中に隠れるか。 て、 わ Ĺ 引越しにそんなも あの不思議な十箇の罐詰と十斤の食 世間と全く交通を断って、どこかに隠 ないのだよ。 が天井裏の 隠れ場所を察したか知 食料品屋の小僧から聞 。イヤ、 のの必要はな 君がそんな間 鬼熊 えるま ح ح き パ

けて来たのだが、 こへ気がついた。 があり相な気がするのだ。 て見た。 わしはそういう手品使の気持になって、君の計画を想像 殊更あの家を空家にして見せたところに、 すると、どうも君の突然の引越しそのものが臭 そこで、 そのわしの想像がまんまと的中した。 助手を連れて、 わしはつい数時間前 空家の探検に に、やっとそ 何 かカラクリ これ 出か い の し

得た訳だよ。ハハハハハハ」

でわしも、君と同じくらいの智恵を持っているという自信を

君があの

恋 現 い て、決してわたしは罪を犯した訳ではありません。 ない恐ろしい訳があったのです。 屋根裏へ隠れたのは本当ですけれど、それにはどうにも出来 んて、全く身に覚えのないことです」 「イイエ、違います。それはあの家を引越したと見せ 逃げ隠れをしたからといっ 人殺しな か け て、

男装の女性は、さもさもくやしげに、 ハラハラと涙を流

てかき口説くのだ。

です。 が納得して下さる筈はありません。 犯さぬのに逃げ隠れする奴があるものか。 も出来ない恐ろしい訳というのは、一体どんな事だね 「 ア ア、 「ハハハ……、そんな筋の通らない理窟では駄目だよ。 博士は半ば揶揄するように、嘲笑を浮べて訊ねる。 あんないまわしい指を持って生れて来たのが、 もう駄目です。 どんなに弁解して見ても、 わたしは呪われているの だが、その あ なた方 わ どうに たし 罪も

うに聞えるね ど、殺人罪は犯さない。 うと、何だか、 「フフン、実にうまいもんだ。流石に君は名優だよ。そうい 君は例の三重渦巻の指紋の持主ではあるけれ 真犯人は外にあるのだとでもいうよ

の業だったのです」

くづくとその顔を見つめるのであった。 博士は懐中電燈の丸い光を、 がい 表 信 の 変 化も見落すまい 近々と相手の顔にさしつけ、 とす るか のように、

なおもかき口説く。 丸い光の中の女性は、 一入悲しげな、 絶望 の 表情になって、

その無実を云い解くすべが、全くないのです。ごらん下さい。 「そうなのです、犯人は決してわたしではありません。でも、

ここにあの恐ろしい指紋の指が着いていたのです」 彼女は云いながら、丸い光の中へソッと左手をさし出した。

手首全体に繃帯が巻いてあるので、 じを与えている。 差指のあるべき場所が異様にくぼんで、歯の抜けたような感 切口は見えぬけれど、人

りましたけれど、つい十日余り前まで、迂濶にも、 まるで、気もつかないでいました。 人差指の妙な指紋が、その恐ろしい三重渦状紋とやらだとは、 一わたしは、 三重渦巻の指紋を持った殺人鬼の話は聞 わたしの い てお

論、 き落されたとでも申しましょうか、 わたしの気持をお察し下さいませ。 べて見ますと、アア、 見たのです。そして、 ところが、ふと新聞に出ている、犯人の指紋の拡大写真を 筋の数まで、一分一厘違わぬ事が分りました。その時 ハッとして、 何という恐ろしい事でしょう。 スーッと目の前が真暗に 自分の左手の人差指と比 いきなり、 地獄の底へ突 形は・ 勿

の

ハッキリ知っていたのでございます」 長々しい繰り言に、博士はもどかしげに足踏みをした。

界に、

なって、気を失わぬのがやっとでございました。私は広い世

全く同じ指紋が二つとあるものではないと云う事を、

の島など……」

殺人事件のあった日には、どこそこにいましたと、 ないか。身に覚えのないことなら、何も指など切らなくても、 「それで、 疑いを逃れるために、思い切って人差指を切り落 、へ投げ込んだというのだね。だが、 おかしい アリバイ じゃ

という奴を申立てればいいのだからね

ーッと引き歪んで、 「アア、それが出来ましたら。 それを聞くと、丸い光の中の女性の顔が、またしてもキュ 青白い頬にハラハラと涙がこぼ それが出来さえしましたら。

……わたしは呪われているのです。本当に引くことも進むこ とも出来ない地獄の呪いにかかっているのです。

日附を確めて見ました。 念の為めに、古い新聞を探して、あの殺人事件の最初からの たしもそれに気がついて、一まず安心したのです。そして、 アリバイという言葉は本で読んでよく知っております。 わ

どの殺人事件の日にも、わたしは家をあけて外出してい にうたれました。アリバイが全くないことが分ったの すると、どうでしょう。 わたしは又息もつけない程の驚き です。 まし

ただ何となく歩き廻ったのです。郊外だとか、時には鎌倉江 晩中帰らない日さえありました。そして、何という恐ろし と申しましても、 あの殺人事件が起っているではありませんか。イイエ、 運命でしょう。そのわたしの外出していた日に限って、 た。それも一時間や二時間ではなく、半日以上、 よそのお家を訪ねたわけではありません。 ある時は一 必ず

時間、 「ハハハ……、益々辻褄が合わ 「エ、お友達? 「イイエ、一人ではありません。 一人で歩き廻る奴もないものだ」 それじゃちゃんとアリバイがあるじゃ なくなっ あの、 お友達と……」 て来た。 そ $\tilde{\lambda}$ な永い

それが、

か。その友達を証人にすればいい筈じゃないか」

「それが、普通のお友達ではなかったのです」

言させればいいじゃないか」 の嫌疑を甘んじて受ける奴もないものだ。その男の友達に証 友達があったそうだね。だが、そんな事を恥しがって、殺人 「ウン、分った。君の家の婆やが云っていたが、君には男の

「でも……」

「でも、どうしたんだね」

上げ、涙はとめどもなく流れ落ちる。これをお芝居とすれば、 うとするのだが、そうすればする程、 わせながら、烈しく泣きじゃくり始めた。泣き声を噛み殺そ 竜子はもう口が利けなくなった様子で、 胸の奥から嗚咽がこみ ワナワナと唇を震

実に驚くべき名優である。

呟くのであった。 女は 漸 く泣きじゃくりをやめ、さも悲しげな細い声で、 手の激情の静まるのを待っていた。すると、 宗像博士も流石に憫れみを催したらしく、無言のまま、 ややあって、 幽に 相

「その人には、もう二度と逢うことが出来ないのです」

「どうしてだね

住所さえも知らないのです。 しょうが、わたしはそれ程親・ 「こんなことを申し上げても、あなたは信じて下さらないで しくしていた、その人の職業も

です。

気がつきました。その紙切れに、何と書いてあったとお思い

面白いではないかと申すのです。 夢のようにつき合っている方が、童話の国の交わりみたいで、 か分りません。その人は、所も名も明かさないで、こうして

名前は須藤と申していましたが、それさえ本当の名かどう

三月程前、ふと汽車の中で御一緒になったのが、最初でし

きっと奥さんも、 娘のように夢中になってしまったのです。 なく引きつけられて、お恥しいことですけれど、 たが、その人は、大変身分のある人のように感じられました。 の人の何とも知れぬ不思議な、夢のようなお話に、いつとは お子さんもおありなのでしょう。 わたしは小 でも、

恐ろしい境遇を、よく相談しようと思ったのです。 この森の中だったのです。そして、この間からの、 です。エエ、ここなのです。その人と外で出逢う時はいつも しは、その人と約束した時間に、このお。社の森の中へ来たの 丁度四日程以前、この指を切る前の晩のことでした。わた わたしの

この柱でした。この柱に小さな紙切れが貼りつけてあるのに す。本当に夢のように、一夜をここで過したのです。 思いでしょうね。でも、 を待って待って、明け方まで待ち暮らしました。まさかとお ません。丁度ここです。このお社の床下に、わたしはあの人 そして、夜の白々あけに、ふと見ますと、そうです、丁度 ところが、その晩は、どうしたことか、その人の姿が見え わたしは何かに魅入られていたので

ないでしょう。 ったのです」 縁切り状でしたの。もうこれっきり、あなたと逢うことは 楽しかった夢を忘れませんと、そう書いてあ

恥も外聞も忘れたように、声を立てて泣き伏すのであった。 人なき深夜の社殿の床下で、男装の女と、モーニング姿の私 語り終って、 思わぬ長話に、さい前から三十分余りも時がたっていた。 男装の竜子は、又込み上げる悲しさに、 今は

代の殺人魔、 ヒソと語り合う。 立探偵とが、光と云えば懐中電燈ただ一つをたよりに、ヒソ 一人はそれを追いつめた名探偵。何という不思 その二人が恋人でもあることか、一人は稀

議な取合せ、常規を逸した光景であったろう。

すばらしい小説家だ。よくもそこまで考えたもんだねえ。す「うまい。実にうまいもんだ。君は名優なばかりでなくて、たが、やがて感に堪えたように、しきりと肯きながら、宗像博士は泣き伏す女怪を、あきれ果てた面持で眺めてい

っかり辻褄が合っている。

殺しの相棒だったと考える事も出来るのだからね。し、それは、君を捨てた夢のような恋人ではなくて、君の人ということは、証人もある事だから、本当に違いない。しかも、何の反証も上げられないじゃないか。男の友達があっただがね、それは君が創り出したお話に過ぎないと云われて

はまるじゃないか。た大男がついている。君の今云った男の友達にそのままあて出しているのだが、その女にはいつでも左の目に眼帯を当てこの殺人事件には、君とそっくりの男装の女が、度々顔を

るまいぜ。面白いが、まさか、そんな夢のような話を信じる裁判官はあかね。君の今の話は、なかなかロマンチックで面白いことはエ、どうだね。そう考えた方が、少くとも実際的ではない

いつの間にか屋根を打ち抜いて、女の身には想像もできない見せかけて、空家の屋根裏に身を潜め、発見されたと知ると、て、態々隅田川に投げ捨てている。そして、引越しをしたと一君は既に指を切っている。その指を御丁寧に錫の函に入れ

女は顔を上げなかった。泣き伏したままの姿勢で、絶望的犯人だという事を疑うものは、一人だってある筈がないよ」な馬鹿な真似ができると思うかね。誰に聞かせたって、君が危い芸当を演じて逃走している。犯人でもないものが、こん

「アア、もう駄目です。……わたしは呪われているのです。に呟くばかりであった。

、 宗像博士がそう云って、懐中電燈を持ち変えた時であった。ア、それではわしと一緒に出かけようか」「気の毒だが、君のお芝居は無駄骨折りばかりだったよ。サ……あなたはきっと、そうおっしゃるだろうと思いました」

と怪しんだのであろう、ギョッとしたように、身動きをやめ博士はこの突飛な言葉を聞くと、相手が気でも狂ったのか「アラ、あなたは誰ですの?」を上げた。

よ」 よ」 「何を云っているのだ。わしは宗像だよ。私立探偵の宗像だ

て、鋭く答えた。

いい。君を捉えた男がどんな顔をしているか、よく見覚えて「ハハハ……、妙な註文だね。よろしい。サア、よく見るが熱心さで、床下から這い出して、博士の前に立ちはだかった。真実気が違ったのかも知れない。男装の女は、何か異常な不の懐中電燈で、あなたの顔を照らして見て下さいませんが、「本当ですの? でも、何だか……、ねえ、すみませんが、

博士は電燈の丸い光を、我れと我が顔にさし向けて、朗か

置くがいい」

に笑って見せた。

ひどく弾んだ息遣いが、 のような感じで、 博士を見つめた。 女は闇 の 中から、 名探偵を凝視しつづけた。 いつまでも、 大きな眼鏡を光らせて、 ハッハッと薄気味悪く聞えた。 いつまでも、 真暗な中から、 獲物を狙う牝豹 異様に執念深く

辺から、 れは実に不思議な、 二人とも身動きもしないで、 何とも名状の出来ない殺気のようなものが立ち昇る 息づまるような光景であった。 永い間立ちつくしていた。 両人の身 そ

小 五郎

ある、 行 神社 われている頃、 私立探偵明智小五郎の事務所を訪ねてい の森の中で、 警視庁の中村捜査係長は、 宗像博士と北園竜子との不思議な問答が 麻布 た。 区 龍土町に

度旅行中で、 た通り、 宗像博士の先輩であり、随ってその手腕も、 明智小五郎は、年こそ若かったけれど、私立探偵としては、 っ の宗像博 この事件をまず明智探偵に依頼しようとしたが、 いつ帰京するとも判らなかったので、 現に川手庄太郎氏も、 士を選んだのであった。 この物語 博士をしのぐも の初めにも記 それでは 丁

明智は三重渦巻指紋の事件が起る少し前、 捜査の依頼を受けて、 の各地を飛び廻っていた。 朝鮮に出張し、 そして、首尾よくその目的を 京城を中心とし 政府からあ る国 て

さ

果し、今日帰京したばかりのところであった。

見たいと思った。 い からの知合で、ごくうちとけた交りを結んでい ても、今度の奇怪な殺人事件について、 中 捜査係長は、 係長は明智とは宗像博士よりもずっと早く 明智から帰京の通知を受けると、 彼の意見を聞 何はお いて

りの友達を待ち受けていた。 予め電話があったので、 明智は事務所の応接室に、 久し振

あった。 ⁻あちらの仕事は大変うまく行ったそうだね。 中村警部は明智の顔を見ると、 先ずその喜びを述べるので お目出 [度う]

るね」 事は、 ってい ぷりなんだが、 んだが、 ったような気持がしているんだよ。 有難う。 る、 随分敏捷に立廻らなけ 恐ろしく歓待してくれ 三重渦巻指紋の事件などの方が、 つい 今し方まで陸軍関! 実を云うと、僕なんかには、 ればならない ってね、 係の晩餐会に呼ば しかしああいう種類 なんだか英雄に ずっと魅力があ 例えば今君がや 冒険味もたっ れ にでもな て の いた 仕 -103-

いつもよりは多弁であった。 明智は大仕事を済ませたばかりの、 のびやかな気持から、

君はあの事件を注意していたの か

新聞をすっかり揃えて貰って、 ね。ハハハ……、 でも僕はすっかり惹きつけられてしまったよ。 い一種の匂いがあるんだ。 「ウン、 京城の新聞 だから帰る途中大阪で、事件の最初からのいるんだ。僕の鼻は猟犬のように鋭敏だから の簡単な記 汽車の中で読み耽って来たの 事で初めて見たんだが、 何とも云えな それ

僕は弱っているんだ。何だか壁のようなものにぶッつかって聞きたかったからだよ。明日まで待っていられなかった程、今夜こんなに遅くやって来たのも、あれについて君の意見が「ハハ……、君らしいね。だが、そいつは都合がいい。実は

この事件の担当者みたいになっているので、やり切れないのに新聞が騒ぐものだから、世間がうるさくってね。僕がまあしまってね。白状すると全く途方に暮れているんだ。あんな

「ウン、新聞に出ただけは分っている。だが、君の口から詳で、君はあの事件の大体の輪郭は分っている訳だね」

い話が聞きたいもんだね

だよ。

たのだ。口で云うよりも、これを一読してくれれば、一切が僕個人の捜査日記だよ。君に読んで貰おうと思って持って来「無論話すがね。それよりも、ここにいいものがあるんだ。

開き、明智に手渡した。 警部はポケットから大型の手帳を取出して、そのある頁を

よく分ると思う」

に、頁を繰って行った。れ込んで、長い脚を組んで、その膝の上に手帳をのせ、丁寧れ込んで、長い脚を組んで、その膝の上に手帳をのせ、丁寧明智はそれを受取ると、早速読み始めた。ソファに深く凭

み込んでしまったように見えた。ぷり三十分程も費すうちに、明智は事件の経過をすっかり呑る。警部は一々詳細に答える。そんなことを繰返して、たっ疑問の箇所にぶつかると、読むのをやめて、警部に質問す

冷静な判断がむずかしいのだ。全く白紙でこの事件を見渡し「遠慮なく感想を聞かせてくれたまえ。僕は渦中にあるので、

て、君はどう考えるね」

落ちついた口調で話しはじめた。静かに目をつむったまま、暫らく黙り込んでいたが、やがて警部が促すと、明智はソファに凭れ込んで、腕組みをして

いかね」

「僕は宗像君とは二三度会ったばかりだが、彼の一種の才能 「僕は宗像君とは二三度会ったばかりだが、彼の一種の才能

更に一枚上手の役者らしいね。新聞は魔術師だなんて書き立「恐ろしい事件だ。この犯人は、あの俊敏な宗像博士よりも、利いた事を、はにかんでいるのだと考える外はなかった。微笑の意味が分らなかった。商売、敵に対して非難めいた口をなぜかその唇の辺に幽な微笑が浮かんでいる。警部にはその明智はそこで言葉を切って、じっと中村警部の顔を見た。

恐ろしく賢い奴だ。名探偵と云われる宗像君を、

思うままに

人の

世間に見せびらかしたいのだ。一種の狂人だね。狂

ね。殺人その事よりも、

てているが、全く魔術師だ。その上に、この犯人は露出狂だ

その結果をできるだけ飾り立てて、

飜弄するほど賢くて抜目のない奴だ。

「だが、それも後手だったよ」

警部は投げ出すように云って、唇を噛んだ。

してつきないものがあるよ。君の手帳には、その記 の前晩に、 「この北園竜子という女のやり口が、又実に面白い。引越 沢山の罐詰とパンを買入れた点など、興味津々と 事の横に

赤い線が引いてあるが、

これはどういう意味だね

でも身を隠す用意をしたのだと思うが、何だかそれも信じら 「僕には全く見当がつかない。多分犯人は人里離れた山奥へ

ゾーッとしたのだよ。 れないような気がする。ただ、僕はその事実を聞いた時に、 なぜか分らないが、胸の中を冷い風が

吹き過ぎたような、変てこな気持がしたんだ。それで赤線な

ど引いたのだろう」

「ハハハ……、なる程渦中にあると盲目になるもんだね。 君の潜在意識はちゃんと真相を感づいていたのだよ。

だ

がら、

非常信号を発したのさ。ハハ……、僕には犯人の隠れ場所は がゾーッとしたというのは、 その口の利けない潜在意識が、

大方想像がついているよ」

「エッ、隠れ場所が? 冗談じゃあるまいね。 ど、どこだい?

それは

警部は思わず椅子から立上って、頓狂な声を立てた。 お望みとあれば、君をその場所

なにも慌てることはない。

独で、その場所 のつかぬ筈はない。 へ御案内してもいいよ。だが、宗像君程のものが、そこへ気 へ犯人を捉えに行っているかも知れない ひょっとしたら、今晩あたり、宗像君単 Ľ

に陥れようとしたのだ。 「ウン、北園というのはなかなか利口な女だよ。君達を錯覚 引越しをして、 家を空家にしてしま

るが、

「そんな近い所なのか」

一番安全な隠れ場所に一変する

えば、その家はもう捜査網から除外されるわけだからね。

そ

の日から、

「エッ、するとあいつは、あの空家に隠れているというのか」 「若しその女が、僕の想像しているような賢い奴だったらね」

だ。よしッ、兎も角も確めて見なくっちゃ。明智君、僕はこ れで失敬するよ」 「ウーン、そうか。成程、 あの手品使いの考えつきそうな事

いい。……ア、電話だ。一寸待って呉れ給え」

待ち給え。君が構わなければ、僕も一

緒に行っても

「まア、

話したかと思うと、その受話器を中村警部の方へ差し出しな 明智は急がしく卓上電話の受話器を取って、一こと二こと

「君だよ。 捜査課の徳永君からだ。何だかひどく慌てている

ぜ。重大な用件らしい」

「エッ、宗像博士が? 発見したって?……ウン、 青山の…

警部はすぐさま受話器を耳に当てた。

…明神の境内だね。……エ、社殿の床下?… 分った。よし、僕はここから直ぐ行くから、 ・・ウン、 君達も手配をし 分った、

て、駈けつけてくれ給え」 中村係長は興奮のため、 顔を真赤

器を置くと、明智に事の次第を告げた。 「やっぱり君の推察の通りだった。あの女は空家の屋根裏に

į

して、

ガ

チャ

ンと受話

宗像博士が追いつめて、近くの神社の境内で捉えたらしい。 隠れていたんだって。そこから屋根を破って逃げ出したのを、 博士から今電話で知らせて来たというのだ。僕はすぐ出かけ

お供するよ。北園という女の顔も見たいし、久し振で

宗像君にも会いたいからね」

明智は云いながら、呼鈴を押して、助手の小林少年を呼び、

電話で車を命じさせて置いて、手早く外出の用意をするので

あった。

眼帯 の男

二人は、暗闇の森の中へ入って行った。 それから十分余りの後、 例の神社の鳥居の前で車を捨てた

て佇んでいた。モーニング姿の宗像博士と制服の二人の警官 くと、そこに三人の黒い人影が、手に手に懐中電燈をかざし の交番から駈けつけた警官達であった。 である。あとで聞けば、それは博士の知らせによって、 向うにチラチラする幽かなる光を目当てに社殿の裏へ近づ

来るでしょう」 と一緒に駈けつけたのですよ。警視庁からも間もなくやって 「宗像さんですか。中村です。丁度明智君を訪ねていまして 捜査課から電話の知らせを受けたものですから、 明智君

いて一歩前に進み出でた。 闇の中で、中村警部が挨拶すると、 宗像博士は、 明智と聞

させられてしまいましてね。 「オオ、明智さん、お帰りになった事は新聞で承知していま あなたのお留守中に、 やっと犯人を追いつめたかと思 僕は途方もない難事件を引受け

ね。

のです。ところが、何を云うにも僕一人だったものですから して、この女をここまで追跡して、なんなく捉えてしまった

自動車を探すのに、この女を引きつれて歩く訳にも行か

すると、僕のその想像は当りすぎる程当ってい

ま

した。そ

えば、ごらん下さい、この始末です」

博士は弁解でもするような調子で云い ながら、 社殿の床下

へ懐中電燈の光を向けた。

「アッ、これは……」

血みどろの死骸であった。 に、まざまざと浮き出していたのは、 それも無理ではない。社殿の床下、懐中電燈の丸い光の中 中村警部が、驚きの余り、思わず叫び声を立てた。 無残な生人形のような、

ら顎にかけて、一筋二筋、赤い毛糸のような血が流れていた。 フト帽が脱げて、 血の塊が電光を受けて、ギラギラと毒々しく光っていた。 トリ血のりがついている。 女の右手には五寸程の白鞘の短刀が握られ、 黒い背広の胸が開いて、その白いシャツが真赤に染まり、 長い黒髪が乱れ、土気色になった女の唇か その刃先にベッ

「自殺ですね。しかし、どうしてこんなことに……」

うか、僕自身で確めて見ようとしたのです。 になれなかったのです。兎も角、その想像が当っているかど かったのです。若しやという想像ぐらいで、 抜けがけの功名をしようとした訳ではありません。確信がな の空家の捜索をして頂けばよかったのです。しかし、決して 「僕の手抜かりでした。あなたに報告して、警察の手で、 警部の言葉を受けて、宗像博士が申訳なさそうに説明した。 警察を煩わす気

ず、それよりは、電話でお知らせして、あなた方に来て貰っ

頼んで、交番にも知らせて貰ったのです。 近所の商家まで電話を借りに走ったのです。その商家の人に た方がと考えたのです。 で、僕はこの女を、ここの床下の柱に縛りつけて置い ホンの五分間程こ て、

ていました。まさか短刀など隠していようとは思いも及ばな うして解いたのか繩目を解いて、見事に心臓を突いて自殺 ところが、 帰って見ると、この始末じゃありませんか。 ど

こを留守にしたばかりです。

どろもどろであった。 宗像博士は大切な犯 人を殺してしまった失望に、 説明もし

かったのです」

その端が側の柱に括りつけてあった。 成程、死人の身体には、解けた細紐が幾重にも纏いつき、 宗像博士が、 常に身辺

が悪かったのではないでしょうね」 を離さぬ、絹糸製の丈夫な細紐である。 「どうしてこれを解くことが出来たんだろう。 まさか縛り方

独言のように呟いた。 明智は柱の側にしゃがんで、その細紐を調べながら、半ば

いは心得ているつもりですが」 「僕もそれを不思議に思ってい るの っです。 捕繩のかけ方ぐら

「宗像さん、この女は自殺したのでは 明智がふと何かに気附いたらしく、 ない 妙なことを云い出した。 かも知れませんね」

博士も不審に耐えぬ面持だ。

「エッ、自殺でないというと?」 宗像博士も中村警部も、 意外な言葉に、 明智の顔を覗くよ

うにして、聞き返す。

めに、 て、その短刀を死人の手に握らせた上、自殺と見せかける為 人に恨みを含むものが、この森の中に忍んでいたとでもいう 「他殺では - しかし、誰が何の為めにそんな真似をしたのでしょう。犯 あとから繩を解いて置いたとも考えられますからね」 ないかと思うのです。 誰かがこの女の心 臓を抉っ

ように云った。 宗像博士は腑 に落ちぬ様子で、 明智の軽率な判断をなじる

のですか」

せんか。 僕はさい前、中村君から、 が、この事件には、男装の女らしい小柄な犯人の外に、 一人、一方の目に眼帯をあてた大男がいるというではありま 「イヤ、必ずしも恨みを含む者とは限りません。宗像さん、 事件の経過を詳しく聞いたのです もう

うな気がするのですよ。つい身近にそいつの気配を感じるの 例のないことではありません。僕は何だか、その辺の闇の中 に、まだ眼帯の大男が身を潜めて、僕らの話を聞いているよ ですよ」 犯罪者が一身の安全を計る為めに、仲間を殺すというのは、

て云うのであった。 の腕を、指先で注意を促すように軽く叩きながら、 明智は闇 の 中の宗像博士の側に近よって、そのモ 声を低め ーニング

を殺すことはないじゃありませんか。 ればすむことではありませんか」 「なぜです。仮令共犯者がここへ来たとしても、 単に繩を解いて連れ去 何 もこの女

博士は彼の優れた商売敵を、

嘲笑うかのような口吻であっ

た。

事情 たなければならなかったか。そこにこの事件の恐ろしい のです。なぜ眼帯 の全体の経過を、 「しかし、 があったのかも知れ 彼としては、我々の常識では判断の出来ない 、静かに考えて見て、どうもそんな気がする の男は、 ませんよ。宗像さん、僕はこの事 共犯者を救わないで、その命を絶 謎が 深

「感じですか?」

あるのじゃないかと、

そんな風に感じているのです」

宗像博士は一層皮肉な調子になった。だが、明智は少しも

ひるまない。

可能を易々と為しとげているのです。満ちていたではありませんか。犯人は うか」 れば、 なかったか。 来ましょう。 なども、彼の狂気と魔術の一つの現われでないと誰が断言出 かし、この事件は最初から、 「そうです。 事件の全貌は自ら明かになって来るのじゃないでしょ 僕は 眼帯の男は、 実に面白い謎 まだ明確に云うことは出来ないのです。 々ですね。この難題が解けさえす なぜ北園竜子を殺さなければなら 理論を超越して、狂気と魔術 犯人は、あらゆる不合理と不 救うべき共犯者を殺す

るように、 明智は言葉以上に、 静かに云うのであった。 事件 の 奥にあるものを見通してでも い

でもありません。 兎も角として、眼帯の男を捉えなければならぬのは、云うま うですが、 「あなたは共犯者がこの女を殺したものと決めていられるよ あいつは必ず捉えてお目にかけます。 僕にはどうも信じられませんね。 '僕は最初からこの事件に関係している責任 そうすれば凡てが しかし、 それは

> て云った。 明かになるでしょう。 博士は明智の言葉に反撥を感じたのか、やや切口上になっかになるでしょう。魔術師の正体があばかれるでしょう」 やや切口上になっ

「オオ、 あなたは眼帯の男を捉えるとおっしゃるのですか。

件

何か確信がおありなのですか」

た。 ともあろうものが、 た。皮肉ではなく、真実驚いているらしい様子だ。宗像博士 たからとて、何をそれほど驚くことがあるのだろう。 「そんなことは不可能ですよ」と言わぬばかりの口吻であっ 明智はなぜかびっくりしたような、烈しい口調で聞 もう一人の共犯者を捉えて見せると云っ き返し まるで

場へ出かけて来たばかりか、同業者の宗像博士を揶揄するか る。これには何か深い訳があるのではないだろうか。 するさえ好まぬ筈だ。 日頃の明智なれば、 のような態度を示しているのだ。 「あの男を捉える確信があるかとおっしゃるのですか。 今夜の、明智の態度口吻には何となく解し難い所があった。 他人の手がけている犯罪事件に口出しを それに、 今夜はノコノコ犯人逮捕 明智らしくないやり方 ハハ であ の現

の中の明智の顔のあたりを、グッと睨みつけた。 明智はたじろがなかった。彼も亦、博士の顔を異様に見つ 博士は何を失敬なと云わぬばかりに、 挑戦的 な . 調 闇

ハ…、

マア、見ていて下さい」

かと怪しまれたと語った程である。 そうしているところへ、鳥居の前に自動車の停車する物音

日その折の有様を形容して、二人の目から青白い火花が散る

間妙な睨み合いがつづいた。中村警部は、

め

ている。

人とてもない北園竜子の死体は、一先ず警視庁の死体置場へも駈けつけて来た。そして一応の取調べが終ると、身柄引取で、物慣れた現場調査が行われた。暫くすると、検事の一行が聞え、捜査課長を初め警視庁の人々が来着し、順序を踏ん

て、こんなことを囁いた。のだが、その帰りがけに、中村警部を人目のない場所に招いのだが、その帰りがけに、中村警部を人目のない場所に招い明智小五郎は、調査の終るのを待たないで、先に帰宅したと運ばれたのであった。

と思うのだよ」は僕で、宗像君の邪魔をしないように、調査をして見ようか「僕はこの事件にすっかり惹きつけられてしまった。一つ僕

い」の眼帯の男を探すばかりだが、君は何か心当りでもあるのかの眼帯の男を探すばかりだが、君は何か心当りでもあるのか「調べると云って、もう主犯が死んでしまって、あとは共犯

中村警部は、いぶかしげに聞き返す。

常に興味を感じている」宗像君が、どんな風にしてあの眼帯の男を捉えるか、僕は非「イヤ、共犯者を探すことは、宗像君に任せて置けばいい。

らしい様子だ。明智は意味ありげに答えた。闇の中でニヤニヤ笑っている

ら、 男ただ一人だ。 は川手氏ー ·それじゃ、 以上事件 家への復讐の目的を完全に果してしまっ 後には 兎も角死んでしまった。 あ の男を探さない の起りようはな 何 .も調 べることがないじゃない で、 いし、 残っているのは眼帯の 君は何を調べようとい その犯 たの か。 一人は自 だ 犯 か

れないじゃないか」明になったことが分っているばかりで、まだその死骸も現わっても、川手庄太郎氏だけは、山梨県の例の山の家で行方不「君は忘れているよ。川手氏一家がみなごろしになったとい

たことを意味すると考える外はないじゃないか」を切って、隅田川へ捨てたのは、奴らの復讐事業が全く終って、犯人があの怪指紋の指を切ったりする筈がない。あの指ろを見ると、川手氏も無論殺されているに違いない。でなく「ウン、それはそうだ。しかし、今まで行方が分らないとこ

考えられない。僕はそこに一縷の望みをつないでいるんだよ。 何 例 氏がどんな最期をとげたか、探り出して見るつもりだ。 へ行って、 の 「そうも考えられるがね。 か、 は、 番怨みの深い筈の川手氏を、 の死体を見せびらかす手を用いなかったのは いずれにしても確めて見なければならない。 この犯罪の動機から考えても変じゃないか。 死体陳列の出来ないような特別の事情があったとしか あの一軒家を調べて見るつもりだ。 しかし、 安らかに眠らせて置くという 川手氏に限って、犯人が そして、 僕は明日N駅 なぜだろう。 これには

らね」
ったかい。じゃ、いずれ調査の結果は、君だけに報告するかでのたかい。じゃ、いずれ調査の結果は、君だけに報告するか僕自身の好奇心を満足させれば、それでいいのだからね。分達にも内密にして置いて貰いたい。僕は全く陰の人として、達だが、それは宗像君には云わないでくれ給え、警視庁の人

て行くのであった。 そう云い捨てて、明智は境内の闇を、鳥居の方へ立ち去っ

れから数日は何事もなく過ぎ去ったが、丁度北園竜子変

騒ぎが起った。 死から七日目の夕方、日本橋のK大百貨店に、飛降り自殺の

の前の鋪道に恐ろしい地響を立てて叩きつけられるのを見た。空から大きな黄色いものが、爆弾のように落下して来て、目百貨店閉館の間際に、その側面の道路を歩いていた人々は、

飛降り自殺者であった。

服を着た男が、血にまみれて、押しつぶされたようになってて駈けよって見ると、そこの敷石道の上に、カーキ色の労働一瞬間ギョッと立ちすくんだ人々が、やがて、それと知っ

切れが発見された。自殺らしく、死体の胸のポケットから、一通の書置き様の紙ーの近の交番から警官が駈けつけて、調べて見ると、覚悟の

かけての大事業の完成を喜び合いたいばかりだ」

という意味のことが、、拙い鉛筆文字で細々と認められ、

息絶えていた。

しの共犯人、例の眼帯の男であることが分ったからだ。が変った。その飛降り自殺者こそ、外ならぬ川手氏一家鏖殺が変った。その飛降り自殺者こそ、外ならぬ川手氏一家鏖殺警官は何気なくその紙切れを読み始めたが、見る見る顔色

跡に、最早逃亡の気力も失せたので、博士に手柄を立てさせ探偵宗像博士の為に、素性を看破られ、数日に亙る執拗な追する。この自殺は必ずしも予定の行動ではないのだが、私立「自分は生涯をかけての大復讐の目的を果して、ここに自決遺書には、

父の為に、自分が川手一家に加えたよりも、もっと残虐なや川手一家は自分の父母の仇敵である。父母は川手庄太郎の

な人通りにむくろを晒すのも、その罪亡ぼしの積りである。

川手の娘達を群衆の前に晒し物にした。

今こうして賑自分は復讐の:

が為

であった。

自ら一命を絶つ決心をしたのだ。

るよりは、

に捧げたのである。川手の子孫の根絶やしを思い立ち、生涯をその復讐事業の為り方で殺害されたのだ。自分は父の今わの際の遺言に基いて、

一刻も早く冥途に行って、可愛い京子に会い、二人の生涯をその妹京子も宗像博士の為に捉えられ、遂に隙を見て自殺し果を収め、自分達は三重渦巻の賊とまで呼ばれるに至った。里画渦巻の異様な指紋を持っていたので、それを利用して川三重渦巻の異様な指紋を持っていたので、それを利用して川北園竜子は本名を山本京子といい、自分の肉親の妹だが、

が犯人の直後に迫っていたことは、彼の遺書によっても明か帯の男山本始を殺してしまったのは残念だけれど、博士の手像博士の引立て役を勤めたかの観があった。彼の推察が見当の竜子他殺説は全く誤解であったことが判明した。流石の明の終りに「山本始」と署名がしてあった。これで明智小五郎

の自殺を境として、もう過去の語、草となってしまったのだ。これ以上続きよう筈はなかった。さしもの大事件も、山本始恨むもの、恨まれるもの、共に亡び去ったのだから、事件がここに全く終。焉をつげたのである。被害者一家はみなごろしかくして、あれ程世間を騒がせた三重渦巻の怪殺人事件も、

件の終焉を信じないものはなかった。 モジャモジャ頭の私立探偵明智小五郎を除いては、 世人は勿論、 警視庁自身さえ、そう考えていた。ただ一人、 誰一人事

生きていた川手氏

いが、 F 賑わすためか、博士と共に招待を受け、主客五人、京橋区の 事件の終焉を祝し、並々ならぬ労苦を嘗めた民間探偵宗像博 せていた。 士を 犒 う意味の小宴を催した。別段手柄を立てたわけではな 事部長は 殺人鬼山本始が自殺してから数日後のある夜、警視庁の刑 ―レストラントの別室に、食卓を囲んで雑談の花を咲か 捜査課長や中村係長の友人である明智小五郎も、 捜査課長や中村係長の進言を容れて、この大犯罪 、 席 を

案外早く犯人達の自決を見て、何よりでした」 今度は一生懸命だったでしょうね。しかし、あなたのお蔭で、 「宗像さんは、二人まで助手の命をとられているんだから、

を、 私の助手はともかくとして、折角依頼を受けた川手家の人達 ております。 の眼鏡を直しながら、恐縮の面持で答えた。 「イヤ、今度は最初から失策つづきで、実に申訳ないと思っ 刑事部長が宗像博士を慰めるように云うと、博士は鼈甲縁 私としては全力を尽したのですが、今度の奴だけは、 遂に救うことが出来なかったのは、 いつも一歩の差で犯人にしてやられたのです。 実に残念でした。

明 智

うですね」 ……あなたは、北園竜子は自殺でないという御意見だったそ に興味を持っていられたということですが、何か御感想は? た智慧を持っている奴で、常識では想像もつかない手を打つ さんも云われたように、どこか人間放れのした、気違いめい ので、非常な苦労をして、 「明智さん、中村君に聞けば、あなたも今度の事件には非常 しかも苦労甲斐がなかったのです」

方をした。すると、明智はそれを待ち兼ねてでもいたように、 「そうですよ。僕はそう考えているのです」 刑事部長は、なぜか明智の痛いところへ触れるような云い

とキッパリ云い切るのであった。

た。 「エ、あなたは今でもあれを他殺だとお考えなのですか」 捜査課長がびっくりしたような表情で、横合から口を出し

「他殺としか考えられませんね」

現に山本の遺書にも、妹は自殺したのだと、はっきり記して といって、真実の妹を殺すなんて、考えられないことです。 子の実の兄だったじゃありませんか。いくら我身を守る為だ ら名探偵の君でも、時に失策がないとはいえぬ。それを、 あったではありませんか。……それとも、 ない意地というものですよ。飛降り自殺をした山本始は、 度口にしたことは、あくまで押し通そうというのは、つまら の挑戦を感じたのだ。もう黙っているわけには行かぬ。 「ハハハ……、明智君、大人げないじゃありませんか。 それを聞くと、宗像博士の目が異様に光った。博士は明智 明智は極り切ったことのように、動ずる色もなく答えた。 あなたはあの山本 <

の遺書を認めないとでもいうのですか」

をたしなめた。 博士はまるで後輩にでも云い聞かせるような態度で、 明 智

ない。 認めませんね。 あれはまるで出鱈目ですよ」 あ んな都合のい ĺ١ 遺書なんてあるもんじゃ

か。 ようにやけくそになっているのかとさえ怪しまれた。 アア、何を云い出すのだ。 彼は宗像博士との手柄争いに敗れて、まるで駄 明智は気でも違ったのでは Q ッ子 な の い

す。 れとも何か、 に書き残したあの告白が、 っているのじゃありませんか、 「明智君、 君こそ出鱈目を云っているとしか考えられませんね。 君は本気でそんな無茶を云っているのですか。 あの遺書を認めない、 出鱈目だなんてあり得ないことで 仮令悪人にもせよ、 はっきりした理由がある 死の間際的際的 そ

顔を見つめるばかりであった。 長と捜査課長とは、 が云ったように、 には行かなかった。 座の人々も、 この口論では、宗像博士に味方しない 酔っぱらっているのかも知れ 非難をこめた眼差で、 明智は今日はどうかしているのだ。 無言のまま明智 ない。 刑事 博士 わ け 部 の

のですか」

アア、 あった。 人々はもう、 殆んど健康 明智は本当に気が違ってしまったのではあるまいか。 博士の詰問に答えた明智の言葉は、 あっけに取られて、 人の論理を無視したようなもの 急には言葉も出ない であった。 ますます意 有様 で

自殺した男が、 「無論、 遺書を認 果して犯人の一人であったかどうかを疑うか め ない理由ははっきりしていますよ。 あ の

> エッ、 なん ですって?

遺書を書いて飛降り自殺をしたというのですか」

君は、犯人でもない男が、

あ んな

さんばかりの表情であった。 宗像博士は開いた口が塞がらぬという体で、 殆んど笑い出

「眼帯の男の顔をはっきり見届けたものは、 誰もない

の

っです。

ただ無精髭を生やした労働者風の大男ということが分ってい

るばかりです。それがあの飛降り自殺をした男と同一人であ

も分っていないのですから、 ったと、どうして保証出来ましょう。 あんな遺書など誰にでも偽造出 無論、 眼带 の男の筆蹟

「それじゃ君は、

あ

の自殺した男が、

偽物

だったとい

来るじゃありませんか」

になってしまった。 明智の止め度もない放言に、 宗像博士は激怒のため に 真赤

す か。 の上の戯。談でないとすれば、 意して自殺するなんて、 馬鹿馬鹿しい、 犯人でもないも 君は一体何を考えているのです。 君は気でも違ったのではあ のが、態々遺書まで用 酒

せんか」

すから、 れません。 ハハハ……、そうかも知れませんね。 僕もおつき合いをして気 が狂ってしま 相手が気違い犯人で った の

不安になるくらいです。 奇怪な事柄なので、 僕自身でさえ、 今僕の考えていることが、 本当に頭がどうかしたのでは 例えば、 僕はまだこんなことも考え 余り並 な はずれな かと、

ているんですよ。

飛降り自殺をした男が犯人でなかったばかりでなく、 あの

うの

掴むために悩んだのですが うに、真犯人であってくれればいいと、僕は随分その確証を 僕は確証がほ 北園竜子さえ、犯人かどうかよく分らないということです。 しいのです。 あの二人があなたの信じているよ 遺憾ながら確証は全くないこと

が分ったのです」

着した心祝いの集いに招かれて、彼は事件の落着そのも あろう。 頭から否定しているのだ。アア、 まだ一人も捕まっていないことになるではないか。 すら否定せんとしている。 とが分って来たからだ。彼は眼帯の男を否定し、北園竜子を かなかった。明智は実に驚くべき妄想を描 ここまで来ると、一座 の人々はもう黙っているわけに すると、この殺人事件の犯人は、 これは一体どうしたことで いているらしいこ 事件が落 のを、 は行

浮かし、 の三角型の顎髯を、 が、当の宗像博士の憤慨はもう極点に達していた。博士は例 刑事部長 明智の前に握り拳を振廻しながら、 も捜査課長も、 ピリピリ震わせて、思わず椅子から腰を 何か口々に驚きの叫 わめくのであっ び声を発した

ごとじゃないか。 お気の毒だが、君の云い草は支離滅裂、まるで気違いのたわ 僕が解決した事件を、 つけようなんて、 「明智君、黙りなさい。君は僕に何か私怨でもあるのですか。 君も余りに子供らしいというものだ。 そんな出鱈目な論理で、僕の仕事に なぜぶち毀そうとするのです。 しかし、

出て来るのです。

人でもないものが態々指を切断して、

北園竜子が犯人でないなんて、一体どこからそんな結論 君は三重渦巻の指紋を忘れたのですか。 屋根裏に身を隠すなん けちを 犯 が うに感じられるのです。 中の論理を御存じない皆さんは、 を話さないで、 るのは、 根拠がない訳ではありませんよ。 「イヤ、皆さんが、僕が無茶を云っているようにお 無理もありません。 突然結論から始めるものですから、僕の しかし、僕の考えには、 僕の まったく感情的な暴言のよ 悪 い癖 でしてね、 思いなさ

そ、真犯人ではないと考えるのですよ。 て、そんな馬鹿馬鹿しいことが出来ると思うのですか」 「ところが、僕は北園竜子があの怪指紋の持主だったからこ エ、宗像君、 この意

味がお分りですか」 明智は落ちつき払って、 ニコニコ笑ってさえいる

もう一刻もこんな気違いと同席するのは御免です。 分らない。……皆さん、 「分りませんね。そんな気違いのたわごとは、 あなた方には大変失礼ですが、 僕には少しも 私は

る気組みを見せた。 て頂きます」 宗像博士は椅子から立上って、 今にも食堂を立去ろうとす

して、世間でもホッとしているのですから、 ることは差控えて頂きたいと思います。 像さんの慰労の宴を催したのですから、この席で論争をなさ は今夜はどうかしていらっしゃるようですね。 集りの意味がなくなってしまいます。……明智さん、 「マア、待って下さい。主賓のあなたに帰られては、 兎に角、 この際、 折角我々が宗 事件は落着 今 夜 あなた の

って見せた。

ない否定論は慎んで下さらないと困りますね」

捜査課長が仲裁するように云って、

取ってつけたように笑

決して

頭の

云い出したか、その訳をお話しましょう。宗像君も、そんなでは、順序を立てて、なぜ僕が二人の犯人を偽物だなどと

明智は、両手を上げて制するようにしながら、いつに変らに立腹しないで、マア一応、僕の話を聞いて下さい」

ぬニコニコ顔で一同をなだめるのであった。

見る外はなかった。宗像博士も不承不精に着席した。う考えると、半信半疑ながら、兎も角、明智の説明を聞いて自殺否定論には、深い根拠があるのかも知れない。人々はそ怪な推理を組立てているらしい。ひょっとしたら、彼の犯人明智は何かしら、一座の人々には想像も出来ないような、奇明っぱらったのでもなければ、頭が変になったのでもない。

「僕は中村君からこの事件の経過を聞いた時に、殺人鬼の行そこで、明智が話しはじめる。

を眺めて見ようと思い立ったのです。して、その角度から、宗像君とは全く別の見方で、この事件動に、一つの心理的な矛盾があることを気附いたのです。そ

で行くような、 害したのではないか。 ども、しかし、死体の陳列などよりももっと残酷な方法で殺 ひどい目にあわせた復讐者が、当の川手氏に限って、その挙 ように衆人 の死体を衆人の前に陳列して見せなかったかということです。 川手氏の二人の娘さんは、実に残酷なやり方で、見世物の その矛盾というのは外でもありません。 、の眼の前に晒されている。 たのには、 犯人は川手氏を、 極度に残虐な方法を案出したのではないかと 例えば長い時間かかって、徐々に死ん 何か特別の理由がなくてはならない。 死体の陳列は出来ない 娘さん達でさえそんな 犯人はなぜ川 けれ 手氏

と 考えたのです。

あつっ干尽は、分では留骨香らよい合うの里尽によっていは、誰にも知らせず、こっそり出発したのです。た。ある理由の為に、このことは、ここにいる中村君以外にったというN駅の近くの、山中の一軒家へ出かけて行きましそこで僕は竜子が自殺をした翌日、川手氏が行方不明にな

捜索しました。 して、たっぷり一日かかって、屋内、屋外を残るところなくを渡り、高い塀をよじ登って、邸内へ忍び込んだのです。そるので、門を開くことも出来ず、僕は非常な苦心をして、堀あの一軒家は、今では留守番もない全くの空家になってい

したのです」 推察が当っていたのです。つまり、僕は川手庄太郎氏を発見 必要はありません。すぐに結果を申上げますと、結局、僕の しかし、その捜索の模様などを、ここで詳しくお話しする

う発見出来なかったのですが」当時あの地方の警察が、山狩りまでして捜索しても、とうと「川手氏の死骸をですか。一体どこに隠してあったのです。そこまで聞くと、刑事部長はもう黙っていられなくなった。

見したのです」 「イヤ、死骸ではありません。僕は生きている川手さんを発

の川手氏に復讐をとげなかったわけですか」「エッ、生きていた?」それは本当ですか。じゃあ犯人は肝腎明智の意外千万な言葉に、人々は色めき立った。

僕の発見が、もう一日おくれたならば、恐らくこの世の人でような、残酷極まる方法で、川手氏に復讐したのです。若し「イヤ、そうではありません。犯人は犯罪史上に前例もない

はなかったでしょう」

でしょう。

「一体、それはどんな方法です」

あの家の庭の林の中に埋められていたのです」「生き埋めです。川手氏は棺桶ようの木箱の中へ入れられて、捜査課長が、ひどく興奮して、思わず口をはさんだ。

「で、あなたはそれを救い出したのですか。一体どうして今

あるのです。

日まで生き永らえていたのです」

でした。五日の間、土の中にいたばかりです。日も前なのです。川手氏が行方不明になってから丁度五日目「今日ではありません。僕がそれを発見したのは、今から十

落葉の混ったようなもので蔽われていたのですから、川手氏置いたのです。それに、埋められた位置も割合に浅く、土と長く闇の地中で苦しみもがくように、息の通う場所を作ってつまり、あっけなく窒息してしまわないように、出来るだけようの箱には、ところどころに隙間が作ってあったのです。多分川手氏をいやが上に苦しめるためでしょう、その棺桶

氏は髪の毛がすっかり白くなっていた程です。来ず、飢餓と迫って来る死の恐怖とのために、可哀想に川手く、厳重に釘づけにされた厚い板の中で、殆んど身動きも出しかし、ただ息が出来るというだけで、食いものは無論なは棺の中でも、辛うじて呼吸をつづけることが出来たのです。

土の中に埋められていようなどと、考えても見なかったため警察の人達が、あれを発見出来なかったのは、まさか邸内のたので、庭の林の中なども念入りに歩き廻って見たからです。というと、若しやそんなことではないかと、予め想像してい僕がどうして川手さんの埋められている場所を発見したか

て、コッソリ東京に連れ帰り、実は、今僕の家にかくまってのです。そして、数日後、川手氏の元気が回復するのを待っ動車にかつぎ込み、そのまま甲府市のある病院へ入院させたーそこで、僕は川手さんを助け出して、僕が乗って行った自

届けませんでした。も、態と川手さんの名を隠して置きましたし、無論警察へもしこれには止むを得ない訳があったのです。甲府市の病院で勝手な真似をしたとお叱りを受けるかも知れません。しか

を待たなければならなかったのです」
には、瀕死の病人も同然のあの人の記憶が、完全に、甦るの裏に潜む、あらゆる秘密を探り出そうとしたからです。それをぜかといいますと、僕は川手さんの口から、この事件の

建康本によりにいた。「で、川手氏はすっかり元気を回復しましたか。元々通りの「で、川手氏はすっかり元気を回復しましたか。元々通りの

宗像博士が初めて口を開いた。博士の顔には、何は兎もあ健康体になりましたか」

もったきり、寝たり起きたりという状態です」「イヤ、まだ健康体とは云えません。僕の家の一間にとじこ

れ、事件依頼者の無事を喜ぶ色が浮かんでいた。

心が軽くなりましたよ」「そうですか。何としてもお手柄でした。それを聞いて僕も

出した様子で、博士は他意もなく明智の手柄を称えたが、ふと何事

ゕ

思い

た。皆さんちょっと失礼します。ある事件依頼人に、電話を「アア、話に夢中になっていて、うっかり忘れるところだっ」した様子で

続きは暫らく待っていて下さい」かける約束があったのです。じき戻りますから明智君、話の

と慌しく電話室へと立って行った。

「明智さん、そんなに、私立探偵の権能を揮われては困りま

なんて、事を荒立てれば、何かの犯罪を構成しますぜ」すね。川手氏を発見しながら、無断で自宅にかくまって置く

恐ろしい奴ですから、こちらも少し変則な手段をとらなけれりは受けないだろうと信じています。犯人が魔法使みたいな「イヤ、その説明は、今に詳しく申上げますが、決してお叱刑事部長は半ば戯談のように、明智の勝手な振舞を責めた。

しつづけるうちに、やがて、電話室から宗像博士も席に戻っ明智は弁解しながら、なおも川手氏発見の模様を何かと話

ばならなかったのです」

「御用はすみましたか」

て来た。

「すみましたよ。どうもお待たせしました。では、今のお話明智は非常に愛想よく、ニコニコ笑いながら声をかけた。

をつづけて頂きましょうか」

ら、ニタニタと笑って見せるのであった。るようにロイド眼鏡の中の目を細め、三角髯をゆるがせなが善博士も妙に丁寧な口調で答え、何かひどく嬉しい事でもあ

明智小五郎の推理

人でないというようなことを」川手氏の口から何か聞き出されたのですか。北園竜子が真犯が、刑事部長の質問でまた元に戻った。「で、あなたは、その博士が電話室から帰って来ると、その間中絶していた話題

う仕末です」

・の実の妹であることなどが分ったばかりで、二人とも変装をの実の妹であることなどが分ったばかりで、二人とも変装を犯人の一人の眼帯の男は本名を山本始といい、男装の女はそれ、その復讐のために川手氏一家の。鏖っを企てたということ、の犯人の親達が川手氏のお父さんのために無残な最期をとげ「イヤ、川手氏は別に何も知ってはいないのです。ただ今度

の二の矢を放った。明智が答えると、刑事部長は畳みかけるようにして、質問

続と云ってもいいくらいです。彼等が魔術師と云われた所以ますと、この事件は初めから終りまで、あらゆる不可能の連「それは論理の問題です。中村君から詳しいことを聞いて見あの自殺をした男が真犯人でないとおっしゃる論拠は?」全く一致しているじゃありませんか。あなたが、北園竜子や、

った相貌を呈して来るかも知れませんからね」
その秘密さえ解き得たならば、この事件はこれ迄とは全く違も気附かぬ手品の種が隠されていたと考える外はないのです。えて見たのです。真実の不可能事が行われ得る筈はありませえて見たのです。真実の不可能事が行われ得る筈はありません。それが行われたように見えたのは、何かその裏に、何人えて見たのです。真実の不可能事が行われ得る筈はありませんが見る。

君はその秘密を解いたというのですか」

「それじゃ、百貨店の屋上から飛降り自殺をした男の遺言と 16-

横合から宗像博士が堪り兼ねたように口を出した。

「解き得たつもりですよ」

のようなものが閃き合うのが感じられた。ていた。そして、その四つの目の間に、何かしら烈しい稲妻士も、嘲るように笑い返したが、二人とも目だけは異様に光っ明智は、博士の方に向き直ってニッコリ笑って見せた。博

比べて見ようじゃありませんか。ハハハ……」しまってから、机上に組み立てた君の空想が正しいか、一つ頭を働かせて来た僕の解釈が正しいか、事件が殆んど終って事件の最初から、二人の部下まで犠牲にして、目と耳と足と「では、参考のためにその論理とやらを聞きたいものですね。

背に反り返って見せた。 博士は無遠慮な笑い声を立てて、腕組みをしながら椅子の上々である。

すからね」のでないとすると、この事件は最初からやり直しで園が真犯人でないとすると、この事件は最初からやり直しでも一応明智さんの論理を承わらなければなりません。若し北「イヤ、そういう感情の問題はともかくとして、我々として

「僕はこの事件の最初からの、常識では判断の出来ないよう捜査課長も真剣な表情で、明智を促すのであった。

な不思議な出来事を、

すっか

り、

ここに書き出して見たので

落ちつき払って語りはじめた。(明智はポケットから手帳を取出して、その頁を繰りながら、すがね」

手一家の人々に、どれほどの恐怖を与えたか知れません。あ例の怪指紋です。犯人はあの指紋を実に巧みに使用して、川

「この事件に最も異様な色彩を与えたのは、申すまでもなく、

たようなものが、ひしひしと感じられますからね。の指紋をじっと見ていると、何かこう悪魔の呪いとでも云っ

ません。 で、 自邸を逃げ出す直前に、 行証明の紙片に、どうしてあの指紋がついていたか、それかまた、お化け大会の中で、骸骨や人形の生首が持っていた通 恐ろしい指紋を持って生れたのだとすれば、指紋その きたか。これらは殆んど不可能に近い奇怪事と云わねばなり ら川手氏の話によりますと、あの人が、 に列した妙子さんの頬に、 可能が行われたわけではありません。北園竜子が偶 われ方です。たとえば、 は何の不思議もありません。ただ異様なのは、 の厳重な川手家の台所へ、どうして犯人は忍びこむことがで しかし、 例の指紋がついていたそうですが、 あの指紋は、 川手雪子さんの葬儀 女中の持って来た煎茶茶碗の蓋にま 非常に奇怪ではありますが、別 どうしてあの指紋が捺され 事件の最中で見張り 宗像君に連れられて の日に、告別式 その指紋の現 然あんな たか。 ŧ に不 -117-

の仮説を組み立てて見ました。 の仮説を組み立てて見ました。 で、殆んど際限もない程ですが、僕はこれらの不思議を、あせてあったことなど、そういう小さな出来事まで拾い上げれせてあったことなど、そういう小さな出来事まで拾い上げれい手家の応接室に現われた不思議、雪子さんの葬儀の日に、く川手家の応接室に現われた不思議、雪子さんの葬儀の日に、

ことにしているのです。その仮説が、事件のあらゆる細目ににぶッつかった場合は、いつもこの論理学上の方法を用いる僕は正面から解決することのできない、非常に難解な事件

らゆる細目を満足させたのです。事件が丁度それでした。そして、僕の組み立てた仮説は、あならば、それは最早や仮説ではなくて真実なのです。今度のぴったり当てはまって、少しも無理がないことが確められた

うして逃げ去ることができたかという点です。第一は例のお化け大会のテントの中から、黒覆面の犯人がど説がどんなものであるかをお察し願うことにしますが、その最も重大な、また異様な三つの出来事を拾い出して、僕の仮すぎると思いますから、今度の事件の様々の不思議の中から、っして、その僕の推理の過程を一々説明するのは、少し煩雑

鏡の部屋は打毀され、地中に抜け穴でもあるのではないかと、 ピストル ていました。 トの中には警官や興行者側 あのテントの外には沢山 分に調べたと云いますが、そういう手品の種は何一つ発 を残したまま、 その真中の鏡の部屋の中で、 消え失せてしまったのです。 の見物人が群ってい の人達が四方から犯人を取り巻 犯人はただ一挺の ま した。 直ちに テ ン い

見され

なか

ったのです。

ないような、 ょうか。 はありますまいか。 なかったとすれば、 鏡の部屋に何の仕掛けもなく、 この魔法 しかも、 なかった。 僕はこういう仮説を立てて見たのです。犯人は決 めいた不思議を、どう解釈すればよいのでし 種不可思議の 追手達はそれが犯人だとはどうしても考え得 つまり犯人はそこにいたのでは 犯人は絶対に逃げ出す術 まで追手の真中に踏みとどまっていた 手段によって、 十数人の追手 ちゃ ば の目に間違 なかったので ん ない とその らよう。 で いがが

のです。

お分りに

なりますか

にいたのだという仮説です」

えるが如く押黙って、ただ話手の顔を凝視するばかりであっ一座を見廻したが、誰も物を云うものはなかった。人々は酔明智はそこで言葉を切って、謎のような微笑を浮べながら

場合もまた、 忽ち犯人によって発見されたというのは、犯人が千里眼 り、 をどう解釈すればよいのでしょう。 物でもない限り殆んど不可能なことではありません 入りな変装をした上に、 に驚くべき努力をしておられ 氏の話によりますと、 あんなに易々と発見することが出来た 実にここには云い尽せない程の苦心をしているのです。 は降りない 第二 種不可思議の手段によって、 ところが、それ程までにして、 態々別の方角へ汽車に乗ったり、 は 山 で、 梨県の山 犯人はそこにい 危険を冒して進行中の汽車から飛降りたり、 中 宗像君は の ||市内のビルディングで籠抜けをした 手 います。 たのです。 氏 絶えず川手氏を尾行していた 犯人の尾行を防 の 川手氏を匿まった場所 隠 僕の仮説によれ 宗像君と川 れ 目的地へ達しても駅へ 家を、 かという点です。 絶対にそれと分らぬ 犯人 手氏 ぐために、 は とは、 ば、 か。 どうし 、この これ の 川手 怪 実

心かしらとといることに関やしていませず、こな筋質が通っ「第三は北園竜子がなぜ自殺をしたかという点です。縲紲のは深まるばかり、誰一人口を利くものもなかった。 明智はまた言葉を切って、一同を見廻したが、一座の沈黙

の心理的不可能と云ってもよいのです。ているようですが、実はそこに非常な矛盾があります。一種恥かしめを逃れるために自決したと云えば、一応筋道が通っ「第三は北園竜子がなぜ自殺をしたかという点です。縲紲の

ろが、 裏に隠れてまで逃亡を計った女が、繩を解いて自由の身に と云って、 けられていた繩を解かなければならなかったからです。 彼女は決して縲紲の恥しめを受けることはなかった。 闇にまぎれて逃げ去ってしまえばよかったのです。 繩を解いた以上は、 短剣で自殺するためには、 最早や自殺する必要はどこにもな 先ず床下の柱に縛りつ とこ 屋根 なぜ

りながら、

突然自殺する気持になるなんて、

いことではありませんか。

可能 のです。縛られているのを幸、 るのですから、 ではありません。 殺と見せかけて置いたという考え方です。これは同類の仕業 殺の場合は殺すために繩を解く必要はないのですから、 殺してしまえばよい訳ですからね。 棒を殺したのだとすれば、 それは一層不合理です。 隠れていた同類に殺されたのだという考え方もありますが、 自殺の場合は繩が解ければ死ぬ必要はなくなるのだし、他 一方また、 な解釈はただ一つ、何者かが彼女を殺害して、 彼女は自殺したのではなくて、神社の森の中に 今更苦心をして自殺を装わせる必要は少しも 同類なれば既に幾人もの殺人罪を犯して 同類が我が身の安全を計るために相 何もわざわざ繩を解くことはな 闇にまぎれてこっそり刺し 後から自 残る

らでした。 のではない 先程申上げた仮説は、 僕が今度の事件の裏には、 繩を解きながら、しかも自殺していたというこの事実か 僕はひどく難解な謎にぶッつかったのです。 かと、ふと気附 無論これにも当てはまります。 いたのは、 何か非常な秘密が伏在してい 実はこの 事実からでし 前後 る

ないのです。

何かしら一つ足りないものがありました。 の事情は悉くその仮説の犯人を指しているのです。しかし、 僕の推理の環に一

寸した切れ目が残っていたのです。

全く考えられな な 知らなかったのですが、妾腹に出来た妹さんがどこかにいて、 直前、 というのです。 犯人はその妾腹の子まで根絶やしにするのだと豪語していた ていると告白したといいます。それは、川手氏自身は少しも それを川手氏が埋めてくれました。川手氏を生埋めにする 犯人はまだもう一人復讐しなければならぬ人物が残っ

うに明かになったのです。 僕の推理の環は完全につながったのです。何もかも白昼のよ ですか。まるで、闇の中に突然太陽の光が射した感じでした。 皆さん、これを聞いて、僕がどんなにハッとしたかお分り

い

時だと云いますから、そのまだ見ぬ妹さんというのは、 していたが、明智の言葉がちょっと途切れると、もう堪らな これは北園竜子の年齢とピッタリ一致するではありませんか」 ら若くても、川手氏と十以上は違わない訳です。 くなったように、いきなり取って着けたような笑い声を立て 四十七歳だそうですから、][[宗像博士はさい前から何かいらだたしそうに頻りに身動き 、手氏のお父さんが獄中で病死したのは、川手氏 妹さんは四十歳近くの年配です。 川手氏は いく の

い

その川手氏の妹だなんて云い出すのではあるまいね」 りやしない。だが、 ね。黙って聞いていれば、 「ワハハハ……、明智君、 いくら何でも、 君の空想はどこまで突走るか、 夢物語は 君はまさか、 い い 加 減 に して 北園竜子が いたい 分

人ではなくて被害者だったということをね 「ところが僕はそれを云おうとしていたのですよ。 北園

は犯

明智の調子はいよいよ皮肉になって行くのだ。

逃げ出したりするというのかね。 変装して屋根裏に隠れたり、 ゙゙ハハハ……、これはおかしい。 女の身で、屋根から飛び降 君は、犯人でもないも それに、 何よりの証拠 けりて ば、 のが

り忘れてしまっているじゃないか」

北園竜子のあの指紋だ。君は、

あの怪指紋のことを、

すっか

足らぬものです。アア、 なんか、今度の犯人のずば抜けた空想に比べたら、 した恐るべき犯罪者を相手にしているのですよ。僕の想像力 僕達は常識的な出来事を論じているのでは 人のこの空想力を考えると、余りの見事さにうっとりしてし ったからこそ、 「イヤ、決して忘れてやしない。北園竜子は怪指紋の持主だ 本当の犯人でないと考えるのです。 何というすばらしい手品だ。 ない。 常識 宗像君 取るにも 僕は犯 感を超越

が同時に川手氏をこの上もなく脅えさせる手段ともなったの 人だぞと、 徴のある指紋を持っているのだぞ、この指紋の持主こそ真犯 実に執拗にあの怪指紋を見せつけましたね。俺はこういう特 ですから、 犯人は事件の初めから終りまで、これでもかこれでもかと、 凡ゆる機会を捉えて広告している。 犯人の狡智には全く驚く外ありません。 そして、 それ

まう程ですよ。

あの指紋は逆に被害者の指についていたのです。 の怪指紋は決して犯人のものではない。イヤ、それどころか、 人が広告している事実には、 しかし、 は無論逆を考えなくてはならない いつもその裏があるのです。 の です。 犯 あ

な

って帰って行きました。

全く想像も出来ない程のひどい打撃と

彼女は最初の間は気もつかないで

身に転嫁しようと、深くも企らんだ訳です。こと、つまりそうして最後には殺人罪の嫌疑を悉く被害者自 を当の復讐の相手である川手氏の妹さんの指から盗んで来た 第二は世人にこの怪指紋の持主こそ犯人だという錯覚を与え を極度に脅えさせ、 のです。 の紋様が象徴している通り、実に三重の大きな役割を勤めた はっきりと分るではありませんか。 て、犯人自身の安全に資した事、そして第三は、その怪指紋 皆さん、犯人の智慧の恐ろしさは、この一事によっても、 第一はそのお化けめいた隆線模様によって、 復讐をいやが上にも効果的ならしめた事、 、三重渦巻の怪指 紋は、 被害者

盗み、 ばされていました。 たのだと思います。 氏の妹さんに接近しました。恐らくそうして妹さんの指紋を 手段によって(この手段がまた非常に面白いのですが) こからこの復讐事業の筋書が仕組まれたのです。 偶然あの奇妙な指紋のある事を発見したのです。そして、そ 犯人はどうかして、 精巧な写真製版技術によって、怪指紋のゴム印を造っ そのゴム印は絶えず犯人のポケットに忍 当の仇敵である川手氏の妹さんの指 犯人はある 川手

それが魔術師 川手氏の妹さんには、 者の妙子さんの美しい頬にさえ、 あらゆる不可能を超越して、どんな場合にでも、 しつけることも出来たのです。 皆さん、 しかし、犯人のこの奇妙な手品が、その指紋の持主である あれは巧みに出来たゴム印に過ぎなかったのです。 の 手品の 種だったのです。 混雑にまぎれて、 ゴム印 なれ 例えば被害 ばこそ、 ソッと押

-120

その時の彼女の驚きと恐れがどれ程であったか、想像するさ指先を見つめないではいられなかったことでしょう。アア、拡大写真が掲載されたときには、ハッとばかり、自分自身のいたかも知れませんが、新聞に殺人鬼の怪指紋として、その

え身の毛もよだつ程ではありませんか。

の女としては、恐ろしさに気も顛倒して、そんな気違いめい奇矯な行動ではありましたが、相談相手とてもない、独り身かけて屋根裏に潜み、捜査の手がゆるんでから、どこかへ逃を切断して隅田川に捨てるようなことにもなり、転宅と見せじ込んでしまったのに違いありません。そこで、呪わしい指彼女はもう絶対に殺人の嫌疑を 免れることは出来ないと信

自殺のように見せかけて、何喰わぬ顔をしていたのです。で追いつめて、無残にも刺し殺してしまいました。そして、は半ば達せられたのですが、彼は更にこの哀れな女をあくまのです。それ程彼女を苦しめたというだけでも、犯人の目的しかし、彼女はそうして、結局真犯人の思う壺にはまった

た考えになったのも、

少しも無理とは思われません。

悉く抹殺することに成功したのです。 事業の材料として指紋を盗み、 を教えてくれます。彼はそうして、 その相手の男というのが、 かに逢曳を続けていたことを御存知でしょう。 よって、竜子がどこの誰とも知れぬ四十歳余りの男と、 奥底がないのです。 イヤ、それだけではありません。犯人の悪企みには殆んど 皆さんは北園竜子の召使の老婆の証 外ならぬ真犯人自身であったこと その上に、 仇敵の娘を弄び、 つまり、 竜子のアリバイを 僕の仮説 今度の事件で ひそ 言に は

び出され、家を留守にしていたという事実があるのです。数々の殺人罪が犯された当日は、竜子は必ずこの男の為に呼

抜かりもなかったのです」た行動に出たのでしょう。真犯人はあらゆる点にいささかのく見込みがないと分ったものですから、ああいう気違いめいまさか指を切るような事はしなかったでしょうが、それが全ましアリバイさえ成立すれば、いくら気の弱い竜子でも、

す。 二三度家へ来た事のある知合の美しい女に、確かそういう名 うものの私生児ですが、すると、 りません。 前のものがあったという答えでした。最早や何の疑う所もあ 川手氏は、 園弓子という名前に記憶はないかと訊ねて見ました。すると、 った女はこの弓子でなければなりません。 「中村君が調べた戸籍簿によりますと、竜子は北園弓子とい 犯人ではなくて、 竜子こそ川手氏のお父さんの妾腹の娘だっ その名をちゃんと記憶していたのです。 川手氏のお父さんの妾であ 僕は川手氏に、 幼い時分 た

でもするような顔で突立っていた。立上る時、興奮の余り、一同その方を眺めると、真青になった宗像博士が、果し合い、この時テーブルの一方に、ガタガタという音がしたので、す。犯人ではなくて、被害者の一人だったのです」りません。竜子こそ川手氏のお父さんの妾腹の娘だったので前のものかあったという答えてした。最早や何の疑う所もあ

つい椅子を倒したのである。

がら竜子が死んでしまっているので、 うものが一つもないじゃないか。証拠を得ようにも、 って、事実ではない。論理と空想の外には、現実の証拠とい 明智君、 実に名論です。しかし、それはあくまで名論 今更どうすることも出 残念な であ

か だね。これも犯人ではなくて被害者だったとでもいうのです が、それじゃもう一人の犯人、あの眼帯の男の方は一体何者 これで君の竜子が犯人でなかったという空想はよく分った

来やしない。

明智は少しも騒がず、にこやかに答えた。

はありません。彼はこの事件とは何の関係もない、 一人のルンペンなのでしょう。 「一種の被害者です。しかし、川手氏の一族だという意味で 恐らくは

金銭を与えもしたでしょう。そして、閉店間際の百貨店 の男の服装を与え、多分は御馳走もしたことでしょう。 犯人は眼帯の男によく似た大男を探して、甘言を以て眼帯 の、 或は

すが、 んで、 人影もない屋上に誘い出し、例の偽の遺書をポケットに突込 隙を見て地上へ突き落したのです。これは僕 恐らく間違ってはいないと思います」 の想像で

が、 り出すように、空ろな笑い声を立てた。 明智は強い語調で云って、じっと博士の目の中を見つめた 博士はややまぶしそうに、その視線を避けながら、 しぼ

ているのじゃない。 「ハハハ……、またしても想像ですか。僕は君の空想を訊ね 「その答は簡単ですよ。僕は真犯人の眼帯の男が、まだ生き 確証のある事実が聞きたいのだ」

> てピンピンしていることを、よく知っているからです」 ナニ、 その犯人がどこにい

るかも知っているのだね 生きている? それじゃ君は、

無論知っていますよ

んな所で無駄なお喋舌りをしていることはないじゃないか」 「では、 なぜ捉えないのだ。犯人の ありかを知りながら、こ

「そうだよ」 「なぜ捉えないというのですか」

「それは、もう捉えてしまったからです」

悪魔の

ŧ 口々に何か云いながら、 明智の意外な言葉に、一座は俄に色めき立った。 捜査課長も、中村警部も、思わず椅子から腰を浮か 明智につめよる気配を見せた。 刑事部長 して、

た。 宗像博士の血走った両眼は、 異様にギラギラと輝きはじめ

いつどこで捉えたというのだ」 「犯人を捉えたって? オ イオ イ、 冗談はよしたまえ。 体

明智は平然として答えた。

「犯人はいつもそこにいたのです」

中でも、 いたと同じように、 中でも、北園竜子が一命を失った刹那も、犯人は常にそこに「お化け大会の中でも、川手氏が山梨県の山中に身を隠す途 今も犯人はここにいるのです。犯人は全

く気附かれぬ保護色に包まれて、 我々の目の前に隠れている

のです」 それを聞くと、 刑事部長はもう打捨てては置けぬという面

持で、鋭く質問した。 「明智君、 君は何を云っているのです。ここには我々五人の

人がいるとでもいうのですか」 外に誰もいないじゃありませんか。 それとも、 我々の中に犯

「そうです。我々の中に犯人が いるのです」

「エ、エ、それは一体誰です」

件にあてはまる人物は、 に居合わせた人物です。 「この事件での数々の不可能事が起った時、いつもその現場 被害者川手氏を除くと、そういう条 たった一人しかありません。……そ

静かに宗像博士の顔を指さすのであった。 れは宗像隆一 明智は別に語調を強めるでもなく、ゆっくり云いながら、 郎氏です」

たんだよ。如何にも探偵小説にありそうな結論だね。ワハハ 君は探偵小説を読み過ぎたんだよ。 ハ……、実に傑作だ。こいつは愉快だ。ワハハハ……」 「ワハハハ……、これはおかしい。こいつは傑作だ。明智君、 小説家の幻想に慣れすぎ

々しい音調に変って行った。 な、その笑い声の終りは、泣いているのかと疑われる程、 宗像博士は腹を抱えんばかりに笑いつづけたが、悲しいか 弱

となくあなたがその手品遣いの本人ではなかったかと考えな 今までの明智君の推理を聞いていますと、我々としても、何 いではいられません。あなたはこの際、 「宗像さん、明智君は冗談を云っているのでは 是非弁明をなさる必 ないようです。

要があります」

刑

事部長が宗像博士をキッと見つめながら、

厳然たる警察

せて貰おう。君もこれ程僕を侮辱したからには、 がない筈はなかろう。それを見せたまえ、サア、それを見せ しょう。 面目に反駁せよとおっしゃるのですか。 官の口調で云った。 ない真似は不得手ですが、 「弁明せよとおっしゃるのですか。ハハハ……、夢物語を真 ……確証がほしいのです。明智君、 強いてとおっしゃるならば申しま 僕はそういう大人げ 確かな証拠を見 まさか証拠

「証拠ですか。 よろしい、今お目にかけましょう」

明智はチョッキのポケットから時計を出して、眺めながら、

たまえ」

宗像君、 「話に夢中になっている間に、もう一時間半もたっています。 君が電話をかける為にこの部屋を出てから、もう一 -123-

時間半もたってしまったのですよ。ハハハ……、一時間半の

僕の所へ来たのでしょう。証拠が車に乗って駈けつけて来た …オオ、 間には、 ボーイがやって来た。手に紙片を持っている。 随分色々なことが起っているかも知れませんね。… 多分

み下した。 ら小さな紙片を受取って、 のかも知れませんよ」 明智は冗談のように笑い そこに書いてある鉛筆の文字を読 ながら、その白服のボーイの手か

です。ではすぐここへ通してくれ給え」 「やっぱりそうでした。 丁度うまい 所 ^ 証拠がやっ て 来たの

て、 ボーイが立去ると間もなく、明智の言葉の意味を解し 不審げに入口を見つめる人々の視線の中へ、先ず現われ 兼ね

林りた 檎ごの 三言ささやいたが、 々に一礼すると、 は明智の助手の小林少年であった。詰襟金釦の服を着 のような可愛 ツカツカと明智の側に進みより、何からい頬に、利口そうな目を輝かせながら、 明智の肯くのを見ると、 入口に向って「お 何か二言

人の姿が、 方から抱えられるようにして、後手に縛られ すると、 ドヤドヤと足音がして、二人の屈 部屋の中によろめき込んで来た。 た小柄な真黒な 強な青年に、 両

入り」と声をかけた。

下の私服刑事が十人ばかり、 キョロキョロとあたりを見廻していたが、何を思ったのか、 いきなり表の道路に面する窓の方へ走り寄った。 「宗像君、 それを一目見るや、宗像博士はギョッとしたように立上り、 その窓を開けて、 下を覗いてごらん。 今にも君がそこから飛降りる 中村君の 部 か

明智の依頼によって、 の 周囲に張りこませて置いたのである。 刑事部長 (も捜査課長も知らなかったけれども、 予め部下のものを、 このレ ストラント 中村警部は

Ł

手ぐすね引いて待ち構えているんだよ」

云い、 京子は殺されてし 宗像君の本名は、 宗像君の奥さん。 葉が嘘でないことを確かめたが、何かきまり悪げに、しか. なおも虚勢をはりながらノロノロと元の席に戻るのであった。 「皆さん、 博士はそれと聞くと、素早く窓の下を一瞥して、明智の言 この妹さんは山本京子というのです。 御紹介します。 ま もう御 その実は宗像君の血を分けた妹さんです。 ましたが、 想像になったでしょうが、 この黒い覆面の人物は、 本物はこうしてちゃ 偽物の山本始と 山本始と 世間体は 6 と生

> を見せたことがないというのを知って、 間違っていないという自信を得たのです。そして、 君の夫人が、極度の人嫌いで、 ために宗像君の自宅に捜査 にはそれ以来絶えず見張りの者をつけて置きました。 僕はさっき申上げた仮説を組み立ててから、 の手を入れました。 事務所の助手達にも一度も顔 いよいよ僕の仮説が それを確める そして、 の夫人

うちに一刻も早く仕損じた敵討ちを完成するように云いつけ 見通しているのですよ。 が間違っていますか。 で川手氏を殺害することを命じたのです。宗像君、 した直後、 たのです。 ましたが、 宗像君は、 つまり、僕の留守の間に、 それはこの妹の京子を呼び出して、邪魔の入らぬ 口実を設けて電話室へ行き、どこかへ電話をかけ さい前僕が川手氏を匿っているということを話 ハ ハハ……、 僕は君の心の奥底までも 即刻僕の家へ忍び込ん 僕の推察

心の中でしめたと叫んだくらいですよ。 像君が顔色を変え、電話室へ行った時には、 寝ていることを、 を、僕は待っていたのです。その為に態と川手氏が僕 ところが、そうしてこの女が僕の家へ忍び込んでくれ ハッキリ口外したのです。 それ 実を云うと僕は を聞 の っ て 宗 るの 家に

では山· 本京子の素顔をお見せしましょう」

に

進 ん

で、

度の激 きなり覆面 の痩せた顔が現わ 明智は云いながらツカツカと黒衣の人物の前 情に紙 :の黒布をかなぐり捨てた。 のように青ざめ、 れた。 細い 目のつり上った、 するとその下から、 四十女 極

君から簡単に皆さんに御報告するがいい」 「サア、 小林君、 この女が僕の家で何をしようとしたの か、

きていたのです。

ごく手短に事の次第を語った。 云われて小林少年は一歩前に進み、ハッキリした口調で、

っしゃる寝室の中に、待ち伏せしていたのです。「先生の命令によって、僕達三人は、川手さんの泊っていら

ました。僕達はてんでに物蔭に身を隠して、じっと待っていたのですが、その光の中で、川手さんは何も知らず眠ってい天井の電燈は消して、スタンドだけの薄暗い光にして置い

たのです。

息を殺して見ていますと、この人は寝台に寝ている川手さいて、そこからこの黒覆面の人が忍び込んで来ました。は態と掛金をはずして置いたのですが)ソーッと音もなく開すると、今から三十分程前、庭に面したガラス窓が(それ

と身構えました。かかるようにして、その胸を目がけて、いきなり刺し通そうの短剣を取出して、それを右手に握り、川手さんの上にのしんの顔を、確めるように眺めていましたが、どこからか西洋

何の苦もなく取りおさえてしまったのです。び出して行きました。そして、三方からこの人に組みついて、(僕達三人は、それを見て、隠れ場所から鉄砲玉のように飛

つ受けてはいませんでした」 川手さんは物音に驚いて目を覚ましましたが、かすり傷

「宗象書、業の正処がどんなものであったか、これで書こちうにつけ加えた。 小林少年が報告を終るのを待って、明智はとどめを刺すよ

想がうまく的中して、幸いに捉えることが出来たが、僕の握ハッキリ分っただろうね。だが、この君の妹さんは、僕の予「宗像君、僕の証拠がどんなものであったか、これで君にも

小林君、あの婆やも連れて来たのだろうね」竜子の恋人に化けた君の素顔を、よく見覚えているのだよ。かも知れぬが、北園竜子に雇われていたお里という婆やが、っていた証拠はこれだけではないのだ。君は気附いていない

「エエ、廊下に待たせてあります」

「じゃ、ここへ呼んで来たまえ」

って来た。 やがて、小林少年につれられて、お里婆やがオズオズと入

明智が指さす宗像博士の顔を、老婆はつくづく眺めていた「お里さん、君はこの人に見覚えがないかね」

が、一向記憶がないらしく、かぶりを振って、

「イイエ、少しも存じませんですが……」

と恭しく答えた。

『(て駄目だよ。僕は何もかも知っているのだ。(けひげと眼鏡を取ってやってくれたまえ。イヤ、とぼけたった れたね。宗像君、この婆やの為に、面倒だけれど、一つそのつし(「アア、そうだった。君が知っているのはこの顔ではなかっ

秘密を知っているものは、一人もないのだからね。失策だったよ。川手氏の外には、君のその精巧なつけひげのたのだろうが、その川手氏が生返って見れば、あれは君の大いずれは殺してしまう川手氏のことだからと、つい油断をしる為に、その三角ひげを取って見せたっていうじゃないか。君は川手氏と一緒に山梨県の山中へ行く途中で、変装をす

明智は云いながら、素早く宗像博士の前に近より、いきなだよ。それじゃ、一つ僕がそのつけ髯をはがして上げるか」、ハハハ……、宗像君、今更ら躊躇するのは未練というもの

博士とは似てもつかぬ、のっぺりとした無髯の悪相が現れてってしまった。するとその下から、今までのしかつめらしいり猿臂を延ばして眼鏡を叩き落し、口鬚と顎髯とをむしり取

前は存じませんが、御主人様と二人づれで、時々どこかへお御主人様の所へよく訪ねていらしった方でございます。お名「オオ、そのお方なら存じて居ります。おなくなりになった

てもいい。

来た。

お里婆さんが、やっきとなって喋べり立てる。

出かけになった方でございますよ」

が、この男なんだね」「つまり、いつか君が云っていた、北園竜子の情夫というの

でございますよ」「エエ、マアそういう御関係のお方と、お察し申していたの「エエ、マアそういう御関係のお方と、お察し申していたの中村警部が横合から質問すると、老婆は肯いて、

な仕草をした。 と答えながら、口に手を当てて、羞にかみ笑いを隠すよう

しているのだが、 母だったことも分っている。 老夫婦だ。 あるんだよ。 しこの二人の証人で足りなければ、 「宗像君、これでも君は 川手氏の話で、 例えば山梨県の例の一軒家の留守番をしていた 所在をつきとめて裁判所に引渡す日も遠く まだ弁明をする勇気があるかね。 あ その老夫婦は僕の部下が今捜索 の老婆の方が君達兄妹の昔 僕の方には外に も証人が の 若 乳

も証人などはあるまいと安心していたようだが、川手氏が生連中だ。この方にも、もう捜索の手が伸びている。君は一人それから、君が川手氏に地下室でお芝居を見せた時の役者

君は

その為に、

クッションの下に空洞のある特別のべ

ッド

は

あるまい。

で取扱った犯罪者には、君程の天才は一人もなかったと云っの才能と狡智には驚嘆に近い感じを持っている。僕がこれま見苦しい真似はしないでくれたまえ。僕は君の犯罪者として宗像君、君がいくら魔法使いでも、もう逃れる道はない。返ったばかりに、こういう証人があり余る程出て来たのだ。

は、 手にかけて、嫌疑の転嫁を計ったり、その機敏と大胆不敵に 捺して、 みせたり、 被害者のポケットに入れて置いて、さも不思議そうに驚 ばかりではない、犯人からの脅迫状を、塵芥箱の中や、て、被害者を逆に犯人と見せかけた着想といい、イヤ、 柄を立てて見せた遠大の計画といい、 正体を見破られた苦しまぎれとはいえ、 復讐事業の為に、 流石の僕も舌を捲かないではいられなかった。 自分自身で捺した指紋を怪しんで見せたり、たとえ 怪指紋のゴム印を、 先ず民間探偵に化けて、様々の事件で手 色々な器物や人間の頬にまで 怪指紋を巧みに利用し 助手を二人まで我が それ 心て

る。

でいりに、君は実に手数のかかるトリックを考え出していばっかりに、君は実に手数のかかるトリックを考え出していじい虚栄心に目を見はった。ただ予告の殺人を成しとげたいさんの場合だが、あの記録を読んだ時にも、僕は君のすさま君の五つの殺人のうちで、最も手の込んでいたのは、妙子

る。のたやすい道を避けて、不可能に近い困難な方法を選んでいのたやすい道を避けて、不可能に近い困難な方法を選んでいさえすれば、易々と目的を達することが出来るのに、態々そあんなにまで苦労しなくても、予告をやめて、不意を襲い

-126

を、 の 夜、 その死体をすぐ表庭に運んで、 込み、そこにいた川手氏を縛り上げ、妙子さんを絞め殺して、 によって、 も被害者も決してその空洞 ばならなかった。 非常な苦心をして、予め妙子さんの寝室に持込まなけれ 廊下の見張り番を勤めていた君は、 誰に疑われることもなく、 しかし、 の中に隠れていたのじゃない。 それは人目を欺く手品 塵芥箱の底へ隠して置い 妙子さんの寝室に忍び 探偵という保護色 の 種 たの 犯 あ 人

邸を抜け出し、 捜索に参加しているように見せかけて、その実は、 それ から夜が明けて、邸内の大捜索が始まってから、 眼帯の男に化けて、 京子と一緒に塵芥車 コッ ーを ・シ 挽
ッリ 君は

だ。

という、『殺人芸人』の けないような、ずば抜けた着想だ。 う点を、 見せかけの手品 き込んで、死体運び出しの大芝居を演じたという訳だ。 態々註文して作らせた、 僕は非常に面白く思った。気違いでなくては考えつ の種で、犯罪には全く使用され みのよくするところだ。 仕掛けのあるあのベッドは、 ただ殺人を見せびらかす なかったとい ただ

く脱ぎ捨て、 いて、人々の躊躇する間に、 を一目見たばっかりに、その場で撃ち殺されてしまった。 によって、見事に黒衣の人物を捕えたが、そうして君の 君の賢い助手は、犯人が宗像博士と知らないで、巧みな手段 部屋では、 元の宗像博士の姿になって追手の前に立ち現わ 扉の隙間 からピストルの筒口を覗かせて置 洋服の上に着ていた黒衣を手早 素顔

かへ隠して置いて、探偵と犯人との一人二役を演じて見せた。

お化け大会の中では、君は黒い衣裳と黒覆面を、予めどこ

れたのだ。

つまり君はいつも人々の目の前にいたのだ。

細

だろう。 あざむきおおせたのだ。 し、名探偵その人が稀代の殺人犯人だなんて誰が想像し得た 君は実に 驚くべき保護色に包まれて、 易々と世人を

探偵となり上ったのも、 心は分らないのだからね。 と謳われ それ程 たの の 悪智慧を犯罪捜査に使ったのだから、 も無理ではない。 君の場合と全く同じだったといって 盗賊上りのヴィドックが稀代の名 犯罪者でなくては、 君が名探偵 犯罪者の

そこで何に気附いたのか、 を睨みつけた。 明智は思わず犯人を讃美するかの如き口吻を漏らしたが、 ふと言葉をとめて、 鋭く宗像博士

い

いのだ」

げ出す工夫は全くなかった。 を呈していた。彼は今こそ彼等兄妹の運の尽きであることを、 はっきり悟ったのだ。 眼鏡と髯のなくなった宗像博士は、狂えるけだもの 如何なる魔術師も、 ただ追いつめられた野獣 この 重 进 の中を逃 の 相好

の一戦を試みるばかりだ。

ばいてくれた君の胸板に、 えられる俺ではないぞ。 型ピストルを取出して、 るがいい」 探偵力に及ばなかったのだ。 「明智君、 彼は 部屋の隅に 問答無用だ。 突立ったまま、 先ず仇敵明智 俺は負けたのだ。 君を道連れにするのだ。 この鉛玉を進上するのだ。 しかし、このまま 腰の 「の胸に狙 ポケット 俺 の犯罪力は ・からー お いを定めた。 め 俺の罪をあ ぉ 覚悟す め 挺 と捉 君の

狙いを定めた。そして、 められたかと思うと、 宗像博士の山本始はピストルの引金に指をかけて、 その指にグッと力が入った。 彼の気違いめいた目が、 糸の じっと ように

-127-

離で玉のそれる気遣いはない。では、明智はもろくも撃ち倒かも銃口は、一直線に明智の心臓部を指していた。この近距 人々はハッと息を呑んだ。ピストルは発射されたのだ。し

に突立ったまま、ニコニコと笑っていた。 だが、不思議なことに、 明智は何の異状もなく、 元の場所

されたのかっ

ようだね。どうしたんだね。サア、もう一度やって見給え」 「ハハハ……、そのピストルからは、 山本始は、 しかし、今度も弾丸は飛び出さないのだ。 それを聞くと、あせってまた狙いを定め、 鉛の玉は飛び出さない 引 金

を引いた。

さい前僕がすっかり抜いて置いたのだ。見給え、これだ」 先の早業に気づかなかったのだよ。そのピストルの弾丸は、 るばかりだ。君は今夜はひどく興奮していたので、僕の小手 「ハハハ……、よし給え、いくらやったって、 明智はそう云って、ポケットから取出した幾つかのピスト 引金の音がす

な犯人を捉える際には、常に用いる彼の常套手段である。 ルの弾丸を手の平の上で、コロコロと転がして見せた。 兇悪

衣の京子が、二青年の手を振り払い、 「兄さん、いよいよ最期です。早く、あれを、あれを……」 突如として 劈 くような金切声が響き渡ったかと思うと、黒 後手に縛られたまま、

髪振り乱して、兄の側へ駈け寄った。 兄はその華奢な妹の身体を抱きしめて、

よう。 う。そして俺達が復讐の為にどんなに骨折ったかを御報告し それじゃ今から、 京子、今が最期だよ」 お父さんお母さん の お 側

したのです。

その言葉が終るか終らぬに、妹の色を失った唇から「ウー

の上にくずおれてしまった。 ム」という細い鋭いうめき声が漏れて、彼女はクナクナと床

折重なってその上に倒れ、 見る玉の汗を浮べて、苦痛を堪える様子であったが、遂にそ の力も尽きたのか、彼の大きな身体は、 兄はうめき声さえ立てなかった。 兄も妹もそのまま動かなくなって ただ青ざめた顔に、 妹をかばうように、 見る

の有様を眺めるばかりであった。 人々は何 が何やら訳が分らず、 あっけにとられて、 ただこ

しまった。

側に身をかがめ、その唇を開いて、 きりと肯きながら立上ると、低い声で呟いた。 やがて、明智小五郎が、 何に気附いたのか、二人の死体の 口中を調 てい たが、

を篏めていたのですよ。その義歯の中が虚ろになっていて、 たとえ手足を縛られていても、その義歯の仕掛けを噛み破っ て、中の粉薬を飲み込みさえすればよかったのです。 強い毒薬が仕込んであったのでしょう。いざという場合には、 「アア、何という用心深い悪魔だ。二人とも奥歯に金の

心理は常識では全く判断が出来ません。恐らく幼時の類例の ない印象が、二人の魂に固着したのです。残虐な殺人現場で、 れていました。そして、今その最悪の場合に際会したのです。 それにしても、 皆さん、悪魔の狡智は、考え得るあらゆる場合を計算に入 の海を這い廻った、 何という執念だったでしょう。この兄妹の あの記憶が彼等を悪魔に

う心理は、 仇敵の子孫を根絶やしにする為に、生涯を捧げるなどとい 寧ろ精神病理学の領分に属するもので、 我々には

のないような、悲痛な皺が刻まれていたのである。せていた。そして、その青白い額に、これまで誰も見たこといつもにこやかな名探偵の顔から、微笑の影が全く消え失遂行の為には、天才のように聡明な気違いでした」この二人は気違いでした。しかし、復讐という固着観念の全く理解し難い所です。